

ゆるす、ゆるわう 縦、敷、宥、緩

ゆるす(縦) 他動引き止めて置きたるものを放(はな)ちやる。自由を得させる。
ゆるす(敷) 他動刑罰の執行(けい)を堪忍する。罪科をさがめぬ。「事をさくゆるす(宥) 他動さがめ立をせぬ。禁じたゆるす(緩) 自動ゆるくなる。「せぬゆるまる(緩) 自動ゆるくなる。きびしくゆるむ(緩) 自動ゆるやかになる。ゆるみだす、しまりがなくなる。
ゆるむ(緩) 他動ゆるくする。ゆるめさす、ゆるやか(緩) 自動ゆるきコト。きびしからぬコト。ゆるつたりしてゐるコト。
ゆるり(緩) 自動ゆるつたりしてゐる。ゆるるこ云ふ意を表はす語。
ゆるゆる(緩) 副いそがぬ。おちついでる。くつろぐ。ゆるわらかくあるさまに云ふ語。

(ゆわ)

ゆわち(硫黄) 図火山の在る地方に産する黄色(おう)のもの。もろき石の如き状(じやう)をなしてゐるもの。水には溶けず、之を熱すれば褐色のドロドロせし物となる。其れを更に熱すれば、一種のいさぶべき臭氣を發して蒸發す。又た此れに火を點

ゆるわう、ゆんへ

すれば、青色の炎(えん)を立て、もゆる用途多し。
ゆわち(硫黄) 図木を薄く稍や廣き巾(ひら)にへきたる物の端に、硫黄を溶(と)したる物をつけしもの。
ゆわち(硫黄) 図硫黄を強く熱(ねつ)して、其の蒸氣を俄かに冷(ひや)して、固(かた)まらせたるものにて、粉(こな)の状態を爲す。
ゆわかし(湯沸) 図器具の名、一般(いつぱん)に銅(どう)にて作られたる小さき、やくわんの如きもの、早く湯を沸(わか)すに用ゆ。

(ゆん)

ゆんせい(弓勢) 図弓をはり延すだけの力(ちから)のこト。軍勢(ぐんせい)。
ゆんたけ(弓丈) 図弓の長さ、普通は七尺五寸を定法(ていぽう)とす。
ゆんづえ(弓杖) 図弓を杖につくコト。弓を杖さなすコトを云ふ。
ゆんで(左手) 図左(ひだり)の手。
ゆんで(弓手) 図弓を持つ方の手云ふ意にて、左の手のコトを云ふ。
ゆんべ(昨夜) 図まへの夜。昨夜。

よ 餘、余、予、夜、代、世 一九三二

よ

(よ)

よ(餘) 図のこる。あまる。よそ、ほか。
よ(余) (代名) 自分のコトを他に向つて呼ぶ代名詞、即ちわれ、拙者。
よ(予) (代名) 余に同じ、前條を見よ。
よ(夜) 図太陽が地平線下に隠れてゐる間(ま)の稱、即ち日没(にっぽく)より夜明(よあけ)までの稱。
よ(四) (數) 二と二と又は三と一とを加へたる數(かず)、よつつ。
よ(箭) 図竹(たけ)又は葉(は)に在る節(ふし)と節との間のコトを云ふ。
よ(代) 図人が其の家の主人となつてゐる間の稱、例は誰れの代とが。
よ(世) 図世の中。世間(よ)世界(よ)人の生きてゐる間(ま)天子の國政を執(と)り給ふてゐる間の稱(よ)人々のなすべき事。世間のコト即ち俗事(よ)佛教の語現在(よ)未來(よ)過去(よ)の三世(よ)の稱(よ)よはひ、即ち年齢(よ)。
よ(仔) 図女子のうるはしき顔つきを云ふ。美(よ)しき。はでやかなるコト(よ)。

(よいる)

よる(夜居) 図夜中眠らずに居るコト。
よる(餘威) 図威光(いかり)のありあまつてゐるコト。あまれる威光。
よいくさ(夜軍) 図夜中に於て爲す戦ひ。
よいん(餘音) 図あまれるこえ(よ)のこれるひびきのコトを云ふ。
よいん(餘蔭) 図先祖及び父母などの、おかげのコトを云ふ。
よいん(餘韻) 図のこれるひびき、例は鐘(かね)を鳴したる後(あと)に、床(とこ)しく残(こ)つてゐるひびきの類。
よるん(餘韻) 図餘音(よ)に同じ。
よるん(餘員) 図あまつてゐる人々(よ)必要を感じざる人員のコトを云ふ。

(よう)

よう(用) 図もちゆる。役(やく)に立る。役に立つコト。つかひもち。仕事(しごと)もさで、資本(もと)道具(もぐ)財貨(ざい)はたらき。しるし。ききめ。つひえ。むだのこト。
より(甬) 図宮城の内に在る道路(みち)左右に垣(かき)又は塀(へい)めぐらされある道(みち)花

よあ、よう 用、甬 一九三三

なり。盛(さか)なり。

よ(預) 図蔓草の名、やまのいも。
よ(預) 図あづかるコト。あづけるコト。安(やす)んじたのしむ(よ)なまける。おこたる遊(あそ)びたのしむ(よ)嬉(うれ)しがる。よろこぶ。まへまへより即ちかれて。あらかじめ。まへもつて(よ)そなへる。用意(ようい)す。いやがる。いさぶコト。
よ(豫) 図前條に同じ。
よ(除) 図新たに開きたる田畑。新田(あらた)。
よ(特) 図新たに開きてより二年を経たる田(で)の稱。
よ(厭) 図十分なり。あく(よ)下される。賜はる(よ)酒宴(しゆゑん)のこト。
よ(與) 図あさふ。あたへる。心(こころ)を合す即ちくみす。仲間(なか)即ち同類(どうるい)力を添(そ)ゆる。和(わ)らう。れんごろにす(よ)のぶ。のびる。まつ(よ)容儀(ようぎ)の正しき状を云ひ表はす。又は樹木の茂(さか)むれる状を云ひ表はす。語(ことば)及(およ)びと云ふ意、又は何々(なんなん)と云ふ意を示す助字。
よ(歎) (助字) や又はかき云ふ疑(たが)ひの意を示すに用ひらる。助字。
よ(輿) 図車(くるま)の物を載(の)せる輿(こし)即ち車臺(こし)大道(だいどう)の大地(だいち)のせる。になふ(よ)いろいる。あまた(よ)車を曳(ひ)くものと云ふ意

よ 預、預豫、時、厭、與、歎、輿

よ、よあき 旗、輿、輿、輿

よう 蛹、備、涌、踊、湧、踊、蠅、蠅、瘰、瘰

の咲(く)コト、又は水のわき出るコトを云ふ、

より(蛹) 図さなぎのコトにて、即ち虫類が其の幼き時に、其の形を一變する間に、食物を取らずにゐる時の稱呼、

より(備) 図手足の動きあさふやうに作られたる人形の稱にて、昔時殉死者の代りに死者と共に埋葬すべく用ひられたるもの、

より(涌) 図水の地中よりわき出るコト、即ちわく(湧) 轉じて物事の盛んに發達せる状態を云ひ表はす語、

より(踊) 図おどる。まふ。はれる。あがる。のぼる。豫に通ず、あらかじめ。まへもつてのこらす。すべておしなべて、

より(湧) 図涌に同じ、わく。わき出づ、

より(踊) 図踊(舞)に同じ、

より(蠅) 図蠅の名、はへ、

より(瘰) 図腫物(瘰癧)の名、疔(瘡)の一處(は)に集りて生じたるもの、

より(瘰) 図大なる瓶(瘰癧)、

より(瘰) 図味(瘰癧)をつけて煮(瘰癧)たる食品轉じてたく。にる即ち料理するコト

より(瘰) 図ふさぐ。ふさがる。さへきる。通ぜぬコト。土をたがやして作物をそ

よう 靡、擁、孕、庸、備、塘、雍、勇、膿

だつるコトを云ふ、

より(靡) 図やはらぐ。おだやか(靡)ふさぐ。さへきるコト、 「つさふ(靡)かこむ

より(擁) 図いだく。か、へる(擁)たすく。たより(孕) 図はらむ。子を腹に有す、

より(庸) 図つれ。なみ。普通(庸)用(庸)ゆる(庸)庸の庸にて何れへも偏(庸)らぬ、即ちほ(庸)よきコト(庸)通(庸)に通ず、

即ち開門(庸)昔時の賦課法の一、即ち丁年以上の男子に一定の日数を限り、えだちに就しむる時に、えだちに列ぜざる者に、其の代りとして、定めた日数だけの、長さの布(庸)を差し出させし方法の稱(庸)いさほし。てがら(庸)勢をいたはりねざらふコト、

より(備) 図やまふ。やまひ用ゆる(備)やまひし人に拂ふ賃錢(備)、

より(塘) 図かき。かへ。かこむ(塘)城の堀。溝(塘)小(塘)き城、

より(雍) 図實(雍)の悪しき腫物の稱、

より(雍) 図やわらぐ。おたやかにす(雍)水の流れ来るをふせぐ、

より(勇) 図ゆうと讀む、いさましきコト。たけきコト。つよきコト、(勇)達者(勇)すこやか(勇)氣はげみ進む、

より(膿) 図そば女。めかけ(膿)婚姻の時に

よう、ようえ 鏝、鷹、鷹 一九三四

嫁女に付き添ふて行く女、即ち腰元(鏝)人を送(鷹)り行く、

より(鏝) 図非常に大なる釣鐘(鏝)、

より(鷹) 図鳥の名、たか、

より(鷹) 図胸(鷹)のコト(鷹)馬の腹を(鷹)置く帯の稱(鷹)打つ。はたく(鷹)受く。守る(鷹)あたる(鷹)かかへ持つ(鷹)れんころにすしたしむ、

より(容) 図すがた。ありさま。かたち(容)入る。内に入れあるもの(容)よそは(容)くるむ。つ(容)内(容)に持つ。即ち(容)おちついでる。安(容)らかなる意を示す語、

より(溶) 図水の静かに流れ行く状態を云ふ語(溶)水に物を入れて、まぜて(溶)かす、

より(溶) 図金屬に火を加へて(溶)かす(溶)金屬をかして流し込む(溶)かた、即ち(溶)た(溶)鑄物(溶)する(溶)いる、

より(容) 図はす。はらす、

より(容) 図(容)ふさぎ(容)こむ、

より(容) 図(容)へたな醫者、やぶ醫、

より(容) 図(容)さう(容)な(容)き。たやすきコト、やすしきコト、 「リ(容)其の仕度

より(用意) 図(用意)ころ(用意)け、(用意)ころ(用意)もより(用意)備役(用意)さふて(用意)仕事をさせるコトを云ふ、

より(え) 図(溶液) 図或る物を十分に(え)かしたる汁(え)のコトを云ふ、

より(え) 図(作備) 図あしき、しきたり(え)を、なし初めたるコトを云ふ、

より(え) 図(臂荷) 図つさめにあたるコト、即ち(え)をつくすコト、

より(え) 図(鑄解) 図金屬をかすコト、

より(え) 図(溶解) 図物が水に(え)けるコト、

より(え) 図(容味) 図味(え)を入れるコト、

即ち他人(え)の話の中に、片側(え)より餘計(え)な事を云ひ出るコト、即ち(え)としてぐちのコト、

より(え) 図(備耕) 図(え)はれて他人の田畑(え)を耕(え)やすコトを云ふ、 「えを云ふ

より(え) 図(用間) 図まわしものを使ふコト

より(え) 図(容顔) 図かほかたち、

より(え) 図(容器) 図物を入れる器物、

より(え) 図(踊貴) 図物の價の上るコト、

より(え) 図(用器) 図器物を使ふコト、必用なる器具のコトを云ふ、

より(え) 図(容儀) 図なりすがた、其人の外表面(え)のありさまのコトを云ふ、

より(え) 図(用金) 図官衙などにて、公(え)の事(え)に用ふる金子を云ふ、

より(え) 図(用器書) 図器械(え)即ちコンパスの類を用ひて、描(え)きたる書、

より(え) 図(用脚) 図(え)の異名、

より(え) 図(用脚) 図(え)の異名、

より(え) 図(用具) 図其の事に必要な凡ての道具類のコトを云ふ、

より(え) 図(鑄化) 図金屬(え)鑄石(え)などの堅(え)き物を火にかけて(え)かすコト、

より(え) 図(容光) 図空際(え)へ射し込んて来る、光線(え)のコトを云ふ、

より(え) 図(庸君) 図あたりまへの力(え)のある主君、凡々の主君、

より(え) 図(養鷄) 図虫の名、瓶(え)などの中に生(え)く、ブヨの如き虫、

より(え) 図(用件) 図ようじ。ようむき、

より(え) 図(庸言) 図平々凡々(え)なる言葉(え)何等の役にも立ぬ言葉、

より(え) 図(擁護) 図大切にしてまもるコト(え)かかえてまもるコト。ほ、

より(え) 図(庸才) 図なみなみの人物(え)普通(え)の智慧(え)、

より(え) 図(用材) 図用ひ使ふ材料(え)、

より(え) 図(溶劑) 図或る物を(え)かすべく爲めに用ゆる液體(え)、

より(え) 図(鑄造) 図鐵(え)な(え)鑄(え)して(え)かたに流(え)し込みて種々の物を製するコトを云ふ、

より(え) 図(備作) 図他人に(え)はれて(え)に従事するコト、

より(え) 図(用紙) 図其の事に必要な紙のコト(え)紙(え)、

より(え) 図(容姿) 図みかたち、すがた、

より(え) 図(用事) 図爲すべき仕事(え)、

より(え) 図(容教) 図ゆるす大目(え)に見る

より(え) 図(用捨) 図善(え)悪(え)を分つ意(え)取る(え)捨(え)る(え)コト、

より(え) 図(鑄鑄) 図金屬類をかして流し込むコト(え)轉じて人を教へみちびくコトを云ふ、

より(え) 図(庸主) 図あたりまへの主人、

より(え) 図(用所) 図用ゆる所、用ひころ、

より(え) 図(庸人) 図普通の人、

より(え) 図(用心) 図心を用ゆる(え)つける、

より(え) 図(膿) 図(え)し(え)そ(え)ば(え)め、

より(え) 図(庸準) 図鳥の名、たか、

より(え) 図(難題) 図腫物のふくれるコト

より(え) 図(容色) 図かほかたち(え)りやう

より(え) 図(用心籠) 図竹にて造りし長方形の大なる籠(え)、出火出水など不時の災害(え)に遭ひたる時に、小道具(え)を入れ、棒(え)を通して持ち運ぶ爲めの用を爲す、

より(え) 図(用心金) 図病氣其の他不時

ようし、ようせ
の災害に際したる時に用ゆべく、常に貯(貯)はへ置く金子、

ようそ、ようち
賃銭(賃)やまひ銭、
よりそ(庸租)客年貢えたち、

ようち、ようふ
じて、攻め立つるコトを云ふ、
よりちよ(賤女)図そばめめかけ、

よりふ(備婦)図やまひ女、下女、
よりふ(孕婦)図子をほるむてる女子、

よええ(よええ)
よえい(餘贏)図のこるあまれるコト、
よえい(餘榮)図死したる後の名譽(名譽)はまれ

よか(よか)
よか(廉價)図みこみをつけし直段(直段)を云ふ、
よか(餘暇)図ひま、手すきのコト、

よき、よく 通、浴、鉢、慾

よき(豫期) 圖あらまし新様(新)と心を定めてたコト。前に定めてた期日(期)約束(約)なしたるコト。
よき(夜着) 圖夜具の一種にて。衣物の如く仕立てて綿を十分に入れしもの。
よき(過) 圖自動通り過して行く。立ち寄らずしてすきゆく。
よき(餘金) 圖あまつてる金子。
よき(預金) 圖郵便局(郵便)又は銀行などへ預(預)け置く金子。
よき(夜汽車) 圖夜中に走り行く汽車。
よき(無餘儀) 圖よんどころなし。己(己)を得ずあり。
よき(餘響) 圖のこりのひびき、あこよきより(餘響) 圖宴會などにて、客の樂(樂)を一層増(増)すべく爲めに、演藝(演藝)など特になすの類を云ふ。
(よくぐ)

よく(元) 圖土地のこえて廣(廣)きコト。廣くこえたる土地。
よく(かい) 圖欲心を以て充(充)たされたる世界(世)。
よく(浴器) 圖湯あみに入用なる總ての器具類のこトを云ふ。
よく(き) 圖或る物を欲(欲)がりて、其を得ん(得)一心になるコト。
よく(きん) 圖手拭(手拭)のこト。
よく(きやく) 圖風呂へ入りに来る人(人)あみする人。
よく(くわ) 圖欲(欲)く思ふ心の、甚だしく發するコトを云ふ。
よく(くわん) 圖水をそまきかける。
よく(げ) 圖物をほしがめる心。
よく(げち) 圖翌日(翌日)のあさ。
よく(げつ) 圖あくる月、つぎの月、よく(ご) 圖湯より上りたる時。
よく(さち) 圖ゆをけ。
よく(さん) 圖たすく。輔佐。
よく(さん) 圖傍(傍)より相當の力を添(添)て助けるコト。
よく(し) 圖おさへつけてとごめる。
よく(しつ) 圖浴室(浴室)の。
よく(じつ) 圖あくる日、つぎの日。
よく(しや) 圖いぐみにて射(射)るコト。
よく(え)、よく(く)

よく 欲、徳、臆、望、翼

よく(欲) 圖ほつするコト。好むコト。望むコト。ほしく思ふコト。求(求)むるコト。
よく(徳) 圖物事に感じて精神の感奮するコトを云ふ。
よく(徳) 圖おくと讀む、萬を萬倍せし數(數)甚(甚)た多きコト。數(數)へ盡せぬ數(數)考(考)へ。慮(慮)る。かげ(か)を云ふ。かけ事をなす。
よく(臆) 圖おとく讀む、心むれ(心)さゆ。おさゆるコト。充實する。みつるコト。物事におし恐れ易きコト。胸の部に在る肉。
よく(望) 圖又たおくと讀む、物事をおぼへ居るコト。ものおぼえ。心に記し置くコト。思ふコト。
よく(翼) 圖五色の色糸を以て編みたる組(組)み紐(紐)の稱、飾に用ゆるもの。
よく(望) 圖次の日。明日。あくる日。
よく(翼) 圖鳥のつばき。魚のひれ。本隊(本隊)の左右の備として兩側に在る軍隊。轉じて左右の助け。助けとなるコト。助くコト。飛び揚る。飛びかける。家ののき。正しくとまふ。達者。すこやか。うやもふ。たつとぶ。つしむ。盛(盛)なり。しけしと云ふ意を表はす語。鼎(鼎)の左右に在る耳(耳)。

よく(よ) 圖(翼) 圖正しくして立派なるさま。よのひたるさまを云ふ。
よく(しん) 圖ほしく思ふ心。得たく思ふ心根(心)のこト。
よく(じやく) 圖ほしいと思ふ心根。もさむる心根(心)。
よく(じやく) 圖こえたる土地。よきよく(す) 圖風呂の水。
よく(せい) 圖おさへさむ。
よく(せり) 圖物の十分に出来る土地。
よく(せき) 圖こえたる土地。やせたる土地のこトを云ふ。
よく(そん) 圖へりくだるコト。ひかへめになすコトを云ふ。
よく(そん) 圖物事を控(控)えて爲す。
よく(たつ) 圖無理に奪ふ。おさへつけて取るコト。
よく(てい) 圖風呂場(風呂)の小使、即ち三助のこトを云ふ。
よく(てい) 圖黒く染めたるひらつむぎのこトを云ふ。
よく(てち) 圖いぐるみまつりばり。云ふコトにて、鳥を捕るコト。魚を捕るコトを云ふ。
よく(てち) 圖(朝) 圖(朝)の日の朝(朝)。
よく(く)、よく(て)

よく、よくい、七、杖、関 一九三八

よく(七) 圖いぐるみのこト。即ち糸を矢(矢)に結びつけて射るコト。杖(杖)のこト。取るコト。黒き色のこトを云ふ。
よく(杖) 圖くひ。棒(棒)ぐひ。さしきみ。
よく(関) 圖しきみのこト。しきみは室(室)の境をなすものなるより轉じて、内外の區域(区域)くきりのこトを云ふ。
よく(絨) 圖縫ふコト。縫ひ合すコト。ぬひめのこトを云ふ。
よく(媛) 圖女官のこト。
よく(媛) 圖魚を捕るあみ。小形のあみ。
よく(善) 圖れんころにして氣をつける状態を云ひ表はす語。
よく(能) 圖無理から事を爲す。辛抱して物事を爲す。巧みに物事を爲す。さもすれば。や、もすれば。ひまつとしたらば。云ふ意を表はす語。
よく(避) 圖或るものにあふを好(好)ますして他へさける。我をふせぐ。のがれる。
よく(あさ) 圖翌朝(翌朝) 圖翌日のあさ。
よく(あつ) 圖無理にこらめる。おさへつけてこらめるコト。
よく(あつ) 圖おしつける。おさへつけるコトを云ふ。
よく(い) 圖ゆかたのこト。

よく(でん) 圖位高き人の家にある風呂場(風呂)のこトを云ふ。
よく(ど) 圖こえたる土地。
よく(とう) 圖風呂の湯。
よく(とく) 圖ほしがめる心。利益を得たく思ふ心根。
よく(とし) 圖あけのこし。
よく(ねん) 圖あくる年来年(年来)の。
よく(ねん) 圖欲(欲)情(欲)に同じ。
よく(ばい) 圖おさへつけて買ふ。買(買)りたをして買ふコト。
よく(ばり) 圖ほしがり、のぞむ心。
よく(ばり) 圖よくばるコト。
よく(ぼる) 圖自動むやみにふかく欲心(欲心)を出す。
よく(ぼん) 圖行水(行水)などに用ゆる。大盥(大盥)のこトを云ふ。
よく(ぼん) 圖あくる晩、明晩。
よく(ふかし) 圖深くふかくあり。
よく(へい) 圖守りてたすけるコト。即ち保護(保護)するコトを云ふ。
よく(へん) 圖おさへつけてしりぞくるコト。を云ふ。
よく(ほ) 圖たすけるコト。輔佐。
よく(め) 圖(目) 圖(目)。
よく(や) 圖あくる夜、翌日の晩。
よく(て)、よく(や) 一九三九

よくや、よけい

よくや(沃野)園土地の肥たる平地。
 よくや(抑揚)園おさゆるコトさあぐる
 コト、即ちあげおろし(一)せしるコトさ
 ほむるコト(二)文章や語氣に勢(三)を有
 (四)せたり、又は静(五)めたりするコト
 を云ふ(六)音楽などにて調子を高めたり
 低(七)めたりするコトを云ふ。
 よくよく(翼)園物事の正しく立派に調
 (一)なふてる状(二)盛んなる状(三)おこ
 そかなる状(四)健全なる状(五)やはらぐ状
 を云ひ表はす語。
 よくよく(抑)園おちつきて、つゝしみ
 ぶかきありさまを云ひ表はす語、
 よくよく(能)園念を入れた上にも、念
 を入れる意を表はす語。
 よくりち(抑留)園おさへこむ。無理に
 引き止め置くコト。
 よくわ(豫科)園専門の學科を修むべき、
 其の下(一)しらの學科、(二)げ
 よくわ(餘光)園のこりのひかり。おか
 (一)げ

(よけい)

よけい(餘計)園あまつてる。あまるコト
 (一)利益ならぬコト、むだ、
 よけい(餘惠)園善き事をなしたる爲めに

よけい(餘慶)園前條に同じ、
 よけつ(餘孽)園樹木を伐りたるあとの株
 (一)より生ずる幹(二)、即ちよこばえ(三)
 亡ぼされたる賊黨などの、残れる輩(四)
 (五)の、再び起(六)れる黨類のコトを云ふ
 よけみち(避路)園にげみち、さけみち(七)
 斯(八)ならば斯くせむと、あらかじめ考
 へ置くコトを云ふ。
 よげん(豫言)園未來(一)の事を考へて云
 ひ立つるコト、又は云ひたてたる其の
 こゝばを云ふ。
 よげん(餘言)園むだなこゝば、餘計なほ
 なしのコトを云ふ。
 よげんしや(豫言者)園未來(一)の事を考
 へて云ひ立つる人。

(よこば)

よこあひ(横間)園横のまところ、よこて(一)
 無關係(二)の位置、
 よこあめ(横雨)園風に煽(一)られて、雨の
 横になつて降るコト、又は斜(二)になり
 て降りつゝある雨、
 よこいと(横糸)園織物(一)の横に通(二)つ
 てる糸のコトを云ふ、
 よこいと(四子糸)園縫糸(一)の一種、木
 綿糸を四筋合して、よりたる物、
 よこゑ(横枝)園横の方へ直線(一)にて
 てる枝のコトを云ふ、
 よこかく(横額)園左右を長く仕立(一)た
 る額面(二)のコトを云ふ、
 よこがさ(横傘)園傘(一)を、よこさまにか
 ざして歩むコト、 「よこむきの顔
 よこがさ(横顔)園横より見たるかほつき
 よこがみ(横紙)園すきたる紙の目の横に
 なるもの(一)すき目を横にして用ゆる
 紙のコトを云ふ、
 よこぎ(横木)園荷車の後に横に亘(一)さ
 れてある木(二)総て横に亘されてある木
 のコトを云ふ、
 よこぎ(横切)園道路を横に通(一)り行く、
 よこく(輿國)園同盟しての國、
 よこく(豫告)園前以て知らせ置くコト、

よけい、よこ、緯、横

よこあ、よこく

よこぐも(横雲)園たなびける雲。かすん
 で現(一)はれてるも、
 よこごろ(世情)園男女の情合(一)の、即ち
 色情のコトを云ふ、
 よこさげ(横裂)園衣服織物などの類の、
 横に引きさけしコトを云ふ、
 よこさま(横方)園よこの方(一)邪(二)の、
 よこさん(横産)園胎兒(一)が體內にて、
 横になりて生れ難きコト、
 よこさん(横棧)園障子、戸などの横に亘
 (一)されてある棧の稱、
 よこさまのしに(横棧死)園無益なコトに
 死ぬるコト、即ち犬死(一)、
 よこし(夜越)園夜中に山などを越(一)て
 行くコト、(二)生魚などの一夜持ち越した
 る物を云ふ、
 よこしま(邪)園性質のねぢけて、正しか
 らざるコトを云ふ、
 よこじま(横縞)園織物の縞模様の名、即
 ち縞柄(一)の横に表はしあるもの、
 よこしおき(横吹雨)園斜(一)になりて降
 る裂(二)しき雨の稱、
 よこす(遣)園動かくりつかはす。おくり
 きたる。おこす、 「るくする
 よこす(汚)園動けがす。きたなくする。わ
 よこすち(横筋)園よこみち。よこについ

てあるすちのコトを云ふ、
 よこたて(横縦)園よこさ、たて(一)中(二)の
 さ、長さ(三)のコトを云ふ、
 よこたふ(横)園動かよこになす。よこにた
 をす(一)横向(二)に腰へさす、
 よこたはる(横)園動かよこになつてある(一)
 よこに、これ、ころんで、
 よこちやう(横町)園大道路の左右に在る
 小き道、即ちよこまち、
 よこつけ(横附)園横につけるコト。よこ
 さまにつけるコト、例ば車をよこにつけ
 にするなど、
 よこづな(横綱)園相撲(一)の司家(二)な
 る熊本市の吉田追風(三)家より、大關
 の格(四)に進みたる力士の中にて、技量
 の衆に秀ひでたる者に授けらる、白麻
 (一)にて、なえたる七五三繩(二)に、シ
 デ(三)を垂(四)しあるもの、之(五)を力士が
 腰にまきひて、土俵入するなり(六)其の
 角力(七)の仲間にて、最上の腕前(八)に
 ある力士のコトを云ふ、
 よこづら(横面)園顔のよこの方、
 よこて(横手)園横の方(一)横町(二)の稱(三)
 (四)物事に感動して思はず知らず手を
 拍(五)くコトを云ふ、
 よこと(壽詞)園よろこびのこゝば。祝言

(六)のコトを云ふ、
 よこと(夜毎)園まる夜。よなよな、
 よことち(横綴)園横に長くさがるコト、
 又は横に長くさがる本(一)紙のすき目
 を横にしてさがるコト、
 よこどり(横取)園よこざるコト、
 よことる(横取)園動傍(一)より奪ひ取る
 よこなぎ(横難)園難刀(一)などをを用ひて
 横に難き切りて倒(二)すコトを云ふ、
 よこなまり(横訛)園言語(一)のわるくな
 まつてるコト、
 よこね(横寝)園横に爲つて臥るコト、
 よこね(横疰)園花柳病の一種、梅毒の股
 間(一)に集りたる一種の腫物の稱、
 よこね(横根)園横に延(一)たる樹木の根、
 よこのり(横乗)園馬(一)などに體を横に
 向けて乗るコト、又は乗りたるさま、
 よこばひ(横這)園横に這(一)て歩み行く
 コトを云ふ、
 よこはき(横刀)園刀(一)の及(二)の中(三)
 の廣き物のコトを云ふ、
 よこはしる(横走)園動斜(一)になりて駆
 (二)る(三)支路(四)に入る、
 よこぶ(横笛)園總て横(一)に持ちて吹
 きならす笛(二)のコト、
 よこふり(横降)園雨又は雪などが風の爲

よこく、よこす 邪、遣、汚

よこた、よこば 横

よこあ、よこく

よこば、よこれ 汚

めに斜(ひ)に爲つて降るコトを云ふ、
よこばり(横撃)密城の左右に堀(ほり)開か
れてある堀(ほり)東西にある堀(ほり)。
よこばん(横本)函横(よこ)に綴(つ)たる書物
よこまち(横町)函よこまちやう。
よこみ(横見)函横の方を見る、わきみ、
よこみち(横路)函えだ路のこト。轉じて
正しからぬ筋路(すぢ)筋道(すぢ)の通らぬ無
理なる理屈(わけ)を云ふ。
よこむき(横向)函横をむいてるコト、
よこめ(横目)函ながしめのコト、即ち目
のみ動かして片脇(ひだり)を眺(なが)めみる
コト。
よこもじ(横文字)函西洋文字のこト、即
よこもり(夜籠)函神社佛閣へ夜通(よこ)し
さちこもつて祈願(いのり)をこむるコト。
よこもる(世籠)函動年がゆかぬ。若(わか)く
ある。「横の方より射(や)つ矢
よこや(横矢)函横の方より飛び来る矢。
よこやり(横槍)函突然(よこ)に横の方より
槍(やり)突き出すコト。人の談話中に片脇
(ひだり)より、餘計な事を云ひ出づるコト
を云ふ。
よこる(汚)函動きたなくなる。けがれる
よこれ(汚)函きたなくなるコト。けが

よこれ、よさん

れてるコト。よこれやすき身籠(みか)つ
きの人を云ふ。「てる状(じやう)を云ふ
よこれめ(汚目)函よこれてきたなくなつ
よこれんば(横戀慕)函人の戀に片脇(ひだり)より
戀するコトを云ふ。
よころ(夜頃)函四五夜このかた、
よころふ(横轉)函動横むけに轉(ころ)る。よ
こにれる。
(よころふ)
よざい(餘財)函あまれる財産。のこりの
財産。其の他の財産。
よざい(餘罪)函のこれる罪。其の罪より
外(ほか)に犯したる罪。
よざり(與走)函かこかき、又はになひ人
足の如き賤しき事に使はるるを云ふ。
よざり(豫想)函あらかじめ考へるコト。
よざう(豫考)するコトを云ふ。
よざら(夜櫻)函月夜に櫻の花を見て、
樂(たの)しむコトを云ふ。
よざむ(夜寒)函夜間に寒さを感じるコト
夜に入るさ著しく寒冷を、覺(おぼ)へ来る
時候(とき)の稱。
よざん(豫算)函あらかじめ勘定(かんてい)を
立て、置くコト。前つもり。

よさん、よしう 葎、由 一九四二

よさんあん(豫算案)函政府より國會の議
事に附すべく、議會へ提出する、翌年度
の歳入歳出に關する豫算の原案(げんあん)を
云ふ。
(よしう)
よし(葎)函草の名、あしのこト、
よし(由)函もさる。よつて来るさころ。わ
けがら。由来(よき)。
よし(葎)函まよ。さもあらばあれ。萬
ヶ一にも。さもすれば。たこひさ云ふ
意を表はす語。
よし(好)函よろしき。したしき。うつく
しき。たつき。たやすき。やさしき。
よし(餘資)函資本金のあまれるコト。餘
財(ぜい)に同じ。
よし(餘事)函あより事。むだ事他の事、
よし(餘師)函師匠として餘(あ)ある人物
のこトを云ふ。
よし(善惡)函よろしき事さあしき事
を云ふ。吉事と凶事。
よし(由)函有。由りあり。仔細(しじゆ)あ
り。容子あり。趣(おも)あり。
よし(豫修)函あらかじめならひ置くコ
ト。下積古(げきこ)。下さらひ。

よしこ、よしは

よしこの(好此)函よしこのぶしの略、
よしこのぶし(好此節)函俗曲の名、又の
名を都々乙(つづこ)と云ふ、即ち七七七五
の四句より成り立てる歌にて、三味線
に合して唄ふもの。
よしず(葦簀)函よしの葦(あし)にて編(あ)み
たる、すだれ。障子の紙の代りに葦(あし)
を編み込みしもの。
よしずばり(葦簀張)函葦簀を以て圍(かこ)
あたる假小屋を云ふ。
よしづ(餘日)函期限又は期日よりあまつ
てる日のこトを云ふ。
よしづ(由付)函動ゆえあり氣に見ゆ。
仔細(しじゆ)あるらしくみゆる。
よしつねはかま(義経袴)函普通の袴の裾
(すそ)に、飾(かざ)りとして異りたる色布(いろぬ)
を以て、縁(えり)をつけたるもの。
よしど(葦月)函葦簀(あし)の。に同じ。
よしのがみ(吉野紙)函小判紙の一種、其
の質極めて軟(な)らかく、且つ薄(うす)き
上品なる紙。
よしのぐさ(吉草)函曙草(あけぐさ)の一名、
よしのぐづ(吉野葛)函葛の粉大和の吉野
地方より産出するもの、其の質の特に
善良なるもの。「地のこトを云ふ
よしはら(葦原)函葦の多く生(う)てる土

よしふ、よしん 好、縦

よしふ(餘習)函物事のしきたり。のこつ
てるくせのこトを云ふ。
よし(好)函なかのよき交(あ)り。たし
なみのこトを云ふ。
よじやち(餘情)函あまれるなまき。名殘
(なご)のなまきのこト。
よじやち(餘剩)函あまつてるコト。のこ
つてるコトを云ふ。
よしよし(由由)函ゆえありけなり。仔
細(しじゆ)あるらしくあり。
よしん(餘震)函地理學の語にて、大地震
のありたる後に於て、度々發し来る、小
さき地震のこトを云ふ語。
よしん(豫審)函罪人の罪狀が重罪なるか
又は復雜(ふくざつ)なる時に、豫審判事が下
調(てい)をなすコトを云ふ。
よしん(餘人)函他人(たにん)の人。よそ人、
よしん(餘燼)函燼(すす)のこりたる火、
よしん(縱)函左様(さよう)とするも、左様で
あらふことも云ふ意を表はす語。
よしん(豫審廷)函重罪犯又は複雑(ふく
ざつ)なる輕罪犯に就て、其の犯狀を下調
べする法廷のこト、地方裁判所内に在
り。「依りて、豫審を行ふ判事
よしんはんじ(豫審判事)函檢事の請求に

よしよせ、寄、止縁 一九四三

(よすす)
よす(寄)函動身をよせる。よる。たよる。物
があつたり来る。
よす(寄)函動我が方へ近づかせる。かこ
つけにする。物をおくりやる。かこはえ
る。あつむる。よすまめて。つぎなす。
よす(止)函動やめる。しかけてせぬ。ま
める。やめにする。
よす(餘取)函のこつてる數。
よすが(縁)函たより、よるべのこト、
よすが(終夜)函よすがら夜ごほし、
よすが(世過)函世渡り、身すき、
よすみ(四隅)函四角(しかど)なる形の物の四
方(かた)の隅(すみ)のこトを云ふ。
よすてびと(世捨人)函世を避(よ)て隠遁
(いん)したる人のこトを云ふ。僧侶(そう
り)の異名。
(よせせ)
よせ(寄)函多くの物を、一處(ひと)へ集め
るこトを云ふ。
よせ(寄席)函落語(らくご)講談(こうだん)音曲(おん
びやく)などを催して、客を寄せ集める場所、

よせい、よせば

よせい(餘勢)図あまりの軍勢、あまつて
る勢(勢)、あまの軍勢、
よせい(餘生)図残つてる生命(命)、残年、
よせち(餘饒)図十分にあまれるコト、
よせか(寄掛)圖或る物を或る物の傍
(か)へ持つて行く(持)攻(せ)かける、
よせき(寄木)圖異(ち)なりたる木を混(ま)せ
て、一つ鉢(はち)へたる益裁(せきざい)寄木細
工(せいこう)の略、
よせきさい(寄木細工)圖異なれる木材
を混(ま)せ用ひて、器具の表面の飾(かざり)
をなせし細工のコトを云ふ、
よせざん(寄算)圖加法(か)のコト、
よせせき(寄席)圖寄席(せき)に同じ、
よせつ(豫設)圖あらかじめしたくをなし
置くコトを云ふ、
よせつ(寄接)圖及接(つぎ)に同じ、
よせつ(寄網)圖物を引き寄せる時に用
ゆる網のコトを云ふ、
よせて(寄手)圖攻(せ)て来る軍勢(せい)、
よせね(寄鍋)圖魚鳥及び野菜(さい)物を
細かく切つて鍋にて煮きつゝ食ふ料理
の稱、
よせぬ(寄縫)圖帛地(ぬ)の中(ち)を縮
(ちぢ)めて縫ふ縫ひ方を云ふ、
よせば(寄場)圖人の集(あ)まつて来る場

よせば、よそひ

所(ところ)寄席(せき)のコト、
よせばしら(寄柱)圖馬を繫(つ)ぐ爲めに
立てられたる杭(かき)の稱、
よせみや(寄宮)圖小さき宮(みや)を、一つに
なして祀(まつ)りたる神社の稱、
よせめ(夜攻)圖夜にまされて攻めかける
コト、夜討(よるう)の略、
よせん(豫選)圖下選舉(げらう)の略、
よせん(餘喘)圖餘命(じゆめい)に同じ、
(よそぞろ)
よそ(四十)圖十を四つ合したる數、
よそ(餘所)圖ほかの場所(ところ)我が家以外の
場所(ところ)轉じて交(まじ)りの深(ふか)からぬコ
トを云ふ、
よそがたり(餘所語)圖自己に何等の關係
だもなき物語(ものがたり)のコト、
よそき(餘所聞)圖他人の耳へ入るコト
よそく(豫測)圖さつこはかるコト、下ば
かりの稱、
よそく(餘賊)圖のこりのわるもの、
よそごと(餘所事)圖自分にかゝはり合の
なき事柄(ことば)のコト、
よそぢ(四十路)圖四十(よそぢ)のコト、
よそひ(装)圖よそふに同じ、

よそひ、よたう、装、織

よそびと(餘所人)圖關係のなき人。他人
のコトを云ふ、
よそふ(装)圖化粧(けいざう)する(かざ)つて
美(うつく)しくす(か)形を正しくかざる、
よそふ(織)圖船が出帆(しふん)の仕度(しど)
(か)をさ(か)なふ、
よそみ(餘所見)圖わき見のコト(よそみ)
にみてみるコトを云ふ、
よそみ(餘所耳)圖よそながら聞くコト
即ち直接(ちやくせき)でなく、他より聞き取りた
るコトを云ふ、
よそゆき(餘所行)圖他所へ出掛けて行く
コト(よそゆき)晴れの場所へ出掛けて行くコトを
云ふ、
よそよそ(餘所餘所)圖さらあらぬ體、そ
知らぬ體、我れの知つたことてなしと
云ふ意を表はす語、
よそよそし(餘所餘所)圖我れの知らざる
かのやうに見せかけてあるなり(よそよそし)
しからずあり、すげなくあるなり、
(よたう)
よたう(與僮)圖かこかき人足。こしかき
人足のコトを云ふ、
よたう(餘黨)圖殘(のこ)りの仲間、

(よちぢ)

よたう(夜盜)圖夜間に人家へ入るぬす人
よたか(夜鷹)圖鳥の名、鷹(たか)の一種にて
晝は隠れて、夜出て蟲を捕りて食ふ
鷹(たか)等の賣春婦(うりはら)のコトを云ふ、
よたけし(餘長)圖尋常ならずあり、事々
(ことごと)しくあるなり、「残れる恩澤
(おんたく)よたたく(餘澤)圖大なる恩澤(おんたく)後々(ごご)に
よたたく(終夜)圖夜ごうし、徹夜、
よたぢ(與養)圖あたへる、うばふ、
よたれ(遊)圖口中より自然と流れ出る濃
きつげの稱、
よたれかけ(遊掛)圖子供の咽喉(のど)へ巻
き垂らし置く布切(ぬい)、流れ出る涎(よだ)
を防ぐための物、
よたん(餘談)圖むだばなし、
(よちぢ)
よち(餘地)圖あまつてる場所、あまつて
るコト(よち)の略、
よち(與地)圖世界全部、地球、大地、
よち(豫知)圖あらかじめ知る、前より知
り察するコト、
よちづ(輿地圖)圖世界地圖即ち地球の圖
よちのぼる(攀登)圖取りつきて登(のぼ)る
よたう、よちの 遊

(よつこ)

よつあし(四足)圖四本足の物を云ふ、獸
類(けい)の異稱、四本足の稱、
よつあしもん(四脚門)圖そへ柱を四本建
て、作りたる門の稱、
よつか(四日)圖其の月の四番目の日(よつか)
數(かず)を四つ合したる稱、
よつかど(四角)圖四つ辻に同じ(よつかど)四角形
の四隅(よしかど)の角、
よつせ(世繼)圖其の家のあまこり、あま
こり子、即ち世子、
よつしろ(四白)圖馬の毛色の名、四つ足
に白き毛の生てる馬、
よつたけ(四竹)圖竹の割(わ)た物を二個
(よつたけ)づつ、左右の手に握つて、手を動か
して鳴す粗末(つ)な樂器(がく)の略、
よつたり(四人)圖人が四人のコト、
よつち(四乳)圖猫の腹の乳の在る部分の

(よつめ)

皮を張りたる三味線のコトを云ふ、
よつつじ(四辻)圖十字に爲つて往來
の角、道路の交叉點(こうじゆん)の略、
よつて(依)圖共だから共れゆえに、
よつて(四手)圖四手綱及び四手籠の略、
よつて(四手)圖四角形(よつて)の綱
(つ)の四隅(よつて)を竹にて張り、別に長き
竹の柄(え)を付けたるもの、水中に沈
(し)めて魚を捕る具、
よつてかど(四手駕籠)圖四隅(よつて)の柱を
竹にて製したる駕籠(かご)竹で編(あ)みし
粗末(つ)なる駕籠(かご)の略、
よつて(四時)圖春夏秋冬の稱、
よつて(四友)圖硯筆墨紙の稱、
よつば(四這)圖手足にて、宛然(あは)れ
獸類の如き形をして歩くコト、
よつばら(醉漢)圖えひざれ、酒に酔た
る人、
よつみ(四身)圖衣物の裁ち方の名にて、
本身裁の衣物の身頃(みごろ)より、襟(えり)と
襷(たす)を裁ち出す裁ち方(よつみ)の略、
よつめ(四目)圖紋所の名、田の字形の紋、
よつめ(夜詰)圖夜勤(よるご)當番(あやま)の略、
よつめがき(四月垣)圖竹を互ひに編(あ)み
み合せ、其の間を四角形となしたる垣、
よつつ、よつめ 依 一九四五

よつめ、よてん

よつめきり(四目錐) 錐の一種にて、其の尖(先)を四方より研(研)て尖(先)らせあるもの、もみ錐(杵)の一種、よつめかりし(四目格子) 錐四角な目のあるやうに作られたる格子、よつめごろし(四目殺) 錐圍碁の語にて、敵の石一ツを味方の石四つにて取り圍みたるを云ふ、よつめむすび(四目結) 錐組(碁)の結び方の名にて、紐(ひも)を交叉(まじ)りに結び合せて、四つ目の出来るやふにする結び方、よつめゆりぢり(四目入道) 錐目の四つ

(よてで)

よてい(豫定) 錐あらかじめきめるコト、よてい(豫程) 錐あらかじめ定めたる仕事又は道の里(り)、よてき(餘滴) 錐あまつてるろしづく、よてん(四天) 錐佛法の語、黄蘗宗の僧侶の用ゆる衣服の名、腰の邊にて四つに裂(ひ)てる短かき衣物、

(よんり)

よぬつ(餘熱) 錐去り切らぬ熱、のこつてる熱、よぬんじゆち(米饅頭) 錐菓子(餅)の一種、錐子(こ)に餡(あん)を包みて兩端(はし)を尖(先)らしたる菓子(餅)、よぬん(四年) 錐年を四つ重ねたる數、よぬん(餘年) 錐年の老ひて生きてる間(ひ)の短かくなつたコト、老先(おきな)の短かきコト、よぬん(餘念) 錐他(ほか)の事を思ふ心(こころ)、

(よの)

よのさか(世性) 錐世間のならはし、よのつね(世常) 錐世間なみ、普通(つうず)、よのなか(世中) 錐世間、浮世(うきよ)、よのふとん(四幅蒲團) 錐布(ぬい)を四巾(よ)縫ひ合して作りし布團、

(よはは)

よは(夜半) 錐夜中深夜(しんや)、よは(餘波) 錐ほこぼしりなり、よは(余輩) 錐我々ども、わたくしら、よは(豫報) 錐あらかじめ考(かん)へて、或る事實(じじ)を知らせるコト、

よれつ、よばう

よれつ、よばう

よと、よなふ 瀬、海

よと(瀬) 錐川の水よごみたる處、よと(夜伽) 錐夜中人のよごみするコト、死者の靈(たま)を夜に守り居るコト、よと(餘得) 錐あまれる利益、よぶんのもうけ、よと(餘德) 錐大なる恩德(おんとく)のこれるよとの(餘賤) 錐身分ある人の寢所(ねどころ)の稱、よどほし(餘通) 錐よつびて、よどみ(瀬) 錐よごみたる水、よごみたる場所のコトを云ふ、よどむ(瀬) 錐自動水の勢よく流れず(せ)に止(ど)まつてる、物事の抄取(しりぞ)め言葉(ことば)の流(なが)る、

(よな)

よなか(夜中) 錐夜の半ばごろ即ち午前一二時の頃、よなが(夜長) 錐夜の長きコト、よなき(夜啼) 錐小兒の夜中に泣き叫び立つるコト、よな(海) 錐潮米や麥などの中に在る砂(すな)などを去るべく、洗らふてゆり分ける、よな(悪) 錐悪を去り善を取る、よな(豫納) 錐前(まへ)もつて納(な)め置く

よばり(豫防) 錐あらかじめ防(ぼう)ぐ、手を盡して用心す、よばり(輿望) 錐世上の人望、よばり(豫防) 錐凡て物を豫防するに用ゆる藥(くすり)のコトを云ふ、よば(餘白) 錐紙に文字を記して尙ほ其の紙の白く残(のこ)る部の稱、よば(餘) 錐其の人の生れてより今の時までの年(とし)を云ふ、「び行くコトよば(夜道) 錐夜中男(おとこ)女の寢所へ忍(しの)びよば(婚星) 錐飛分(ひぶん)星(ほし)、流星(りゅうせい)、よば(婚) 錐自動男女が互(たが)ひに情を通(と)するよば(喚) 錐自動呼びたつさけぶ、よばん(夜番) 錐夜の番人、

(よび)

よび(豫備) 錐イザと云ふ時の用意、軍隊語にて豫備役(よびやく)の略語、よびあつむ(呼集) 錐動(どう)まねきあつめるよび(呼入) 錐動(どう)呼び込むよび(呼出) 錐動(どう)めし出す、まねき出す、呼んで引き寄せる、よび(呼入) 錐動(どう)招れき込むよび(呼掛) 錐動(どう)呼ぶよび(呼鐘) 錐動(どう)人を呼び集める合圖(あひだて)よばう、よびか 齡、婚、喚

よなへ、よれさ 米 一九四六

よな(夜業) 錐夜中に仕事をなすコト、よな(世直) 錐世の中の有様(ようさま)の悪(わる)しきを善(よ)く直すコトを云ふ、よな(世直) 錐世の中のしきたりさま、よな(米蟲) 錐米に生ずる虫、よな(夜夜) 錐毎夜、夜ごと、よな(夜習) 錐夜學(よるがく)に向(む)じ、よな(世馴) 錐世の中の事柄(ことづ)になれる男女が互(たが)ひに親(お)しみ合(あ)ふ、よな(餘難) 錐一つの災難(わざ)のために、更に又た災難(わざ)を受けるコト、

(よに)

よに(餘人) 錐自分以外の人人、他人のコトを云ふ、よね(米) 錐稻(いね)の實(み)即ちこめ、元祿時代に、江戸にて遊女(うでよ)のコトを云ひし語、よね(米澤袖) 錐上等の絹(ぬい)織物の名にて、羽前(はねまへ)の國の米澤地方より産する袖(そで)を云ふ、

(よね)

よね(米) 錐稻(いね)の實(み)即ちこめ、元祿時代に、江戸にて遊女(うでよ)のコトを云ひし語、よね(米澤袖) 錐上等の絹(ぬい)織物の名にて、羽前(はねまへ)の國の米澤地方より産する袖(そで)を云ふ、よひかへす(呼返) 錐動(どう)呼んで戻(かへ)らせよひきたる(呼來) 錐動(どう)まねきて我(われ)の方(かた)へ引きよせる、つれ來たる、よひきん(豫備金) 錐臨時に金の必用を感じた時に用ゆる用意金、よひきん(豫備軍) 錐豫備役に在る兵士を以て、組織(そくせい)したる軍隊、よひこ(呼聲) 錐呼び立つる聲、うわさ評判のコトを云ふ、よひこし(宵越) 錐前の宵より持ち越すコト、一夜を経たるコト、よひこむ(呼込) 錐動(どう)呼んで内(うち)へ入(い)らよひさめ(醉醒) 錐動(どう)醒(さ)めし時、よひたつ(呼立) 錐動(どう)聲(こゑ)を張り上げ呼ぶ、よひつき(宵月) 錐宵の中だけ出てる月、よひつき(及接) 錐圍圍上(ごうごう)の語にて接木(つぎ)の仕方(かた)の一種、即ち臺木(たいぎ)に接(つ)ぐ、その他の木の枝(えだ)を切らずに其のまま寄合(よせあ)して、其の接(つ)ぎ目を就(つ)いで包み、繩(な)にて縛(むす)り置き、其の枝(えだ)を断(き)ち切る接ぎ方、故に又た寄接(よせあ)とも云ふ、よひつく(呼付) 錐動(どう)呼んで來(き)らせる、常(つね)によびて馴(な)れる、よひつく(呼繼) 錐動(どう)順(じゆん)々に呼(よ)び傳(た)る

よひか、よびつ

よひか、よびつ

よひつ、よひり

よひつせよ(宵月夜) 闇宵にのみ月の出て
ある晩(シ)の夜、
よひつづく(呼聲) 闇絶へず呼ぶ、
よひつばり(宵張) 闇夜いつまでも起きて
ある癖(シ)の夜を云ふ。
よひとる(呼取) 闇動呼びよせる、
よひね(呼名) 闇動名の他に、常に呼び易
い(シ)を爲めに用ゆる名前、
よひぬ(宵寝) 闇目の暮(シ) たばかりより
寝るコトを云ふ、 「の間を云ふ
よひのま(宵間) 闇日暮(シ)より夜中まで
よひのみ(夜更) 闇夜深(シ)に同じ、
(シ)ると同時に、東の空に著るしく
輝(シ)やき渡る金星の稱、
よひひ(豫備費) 闇臨時に金の必要の生じ
た時に出す用意金、 「の」の
よひふ(呼笛) 闇人を呼ぶ合圖に吹く笛
よひふす(酔臥) 闇えつ拂(シ)ふて眠る、
よひへい(豫備兵) 闇豫備役に在る兵士、
よひむかふ(呼迎) 闇動まよせせる、
よひむの(呼物) 闇評判となりしもの、
よひむどす(呼戻) 闇動呼び返す、
よひやち(餘病) 闇本病の外に發する病氣
よひやみ(宵間) 闇宵(シ)の中の闇、即
ち月の出の暎(シ)き夜、
よひりん(呼鈴) 闇呼ぶ時の合圖(シ)に鳴

よふ、よふん 呼

(シ)す小さき鈴、
(よふん) 呼
よふ(與夫) 闇がかき、こしかき、
よふ(呼) 闇動こなるる(シ)名をつける(シ)聲
を上げて人を招く、
よふか(夜深) 闇夜ふけの夜、
よふかし(夜深) 闇夜おそくまで起きてる
コトのよひつばり、
よふけ(夜深) 闇夜のふけたる時、
よふけ(夜更) 闇夜深(シ)に同じ、
よふこ(呼子) 闇呼ぶ子笛の夜、
よふことり(呼子鳥) 闇鳥の名、又たの名
をかき、鳥と云ふ、ほささぎすの種類
にて、深山に棲む、全身黒色を呈して且
つ濃き黒斑あり、腹前は卵色にて白黒
の細かき斑點あり、趾(シ)は前後に二本
宛四本あり、
よふぬ(夜船) 闇夜分に漕(シ)ぎ行く舟、
よふん(餘憤) 闇のこつてるいきどほり、
思ひ切れぬのはらだち、
よふん(餘分) 闇ありあまつてるコト、
(よへん)

よへ、よみあ 丁

よへ(昨夜) 闇(シ)の夜(シ)の夜、
よへい(餘弊) 闇のこつてる弊害(シ)行、
(よほほ) 呼
よほど(余程) 闇思ふたより多きコト、
よほろ(丁) 男子二十一歳より六十歳まで
國家の用を爲すべき間の稱、
(よま) 呼
よまつり(夜祭) 闇夜分に祭禮を行ふコト
よまはり(夜廻) 闇夜中に見廻りて歩くコ
ト、即ち夜警(シ)の夜、
よまひこと(迷言) 闇こぼすコト、かこつ
コト、ぐちを云ふコト、
(よみ) 呼
よみ(黄泉) 闇死者の魂の行く處と云ふ
コトにて、即ち冥途(シ)行、
よみあぐ(讀上) 闇動聲を發して讀み立て
る(シ)讀み終る、
よみあはす(讀合) 闇動文書を二人以上
で讀み比(シ)てる、
よみあはせ(讀合) 闇同じ文書を二人以上
にて讀み間違(シ)なきかを訓ぶるコト
たるコト、 「みそこな
よみあやまる(讀誤) 闇讀み違へる。よ
よみうち(讀實) 闇世の中の臨時の出來事
を、一枚刷(シ)の物とし、讀み上げつ、
賣り歩くコトを云ふ、
よみかき(讀書) 闇讀んだり、書いたり。讀
書と習字の夜、
よみかた(讀方) 闇文字のよみやう。文章
のよみやうの夜、
よみがへる(蘇) 闇動又た甦の字をも書く
生(シ)きかへる。呼吸(シ)をふきかへす。
復活(シ)す、
よみきり(讀切) 闇よみきるコト(シ)文章の
句切(シ)一冊にて事實(シ)が、完備
(シ)しての書物を云ふ、
よみきる(讀切) 闇動よみ了(シ)る、
よみきかす(讀聞) 闇動文書を讀みて、他
人に聞かせ知らせる、
よみくせ(讀辭) 闇或る語に限りて、古(シ)
(シ)より一種特別の讀み方のあるコトを
云ふ(シ)文章を讀むに、一種のなまりく
せのあるコトを云ふ、
よみぐち(讀口) 闇よみぶりのコト、
よみぐえ(讀聲) 闇書物をよむ音聲、
よみあ、よみ、蘇

よみす(嘉) 闇動ほめた(シ)へる。いつくし
む。よろしとする、
よみせ(夜店) 闇又た夜見世とも書く、夜
間往來(シ)に店を出して、物品を商(シ)
ふコトを云ふ、
よみそこな(讀損) 闇よみあやまるコト
よみそな(讀損) 闇動よみあやまるコト
よみたつ(讀立) 闇聲を立て、讀むコト、
よみち(夜路) 闇夜中に歩みつ、ある路。
夜中に旅(シ)するコト、
よみち(黄泉) 闇死んで行く路、冥途(シ)行、
よみて(讀手) 闇書物を能く讀む人(シ)書物
を巧みに讀みて聞かす人、
よみながし(讀流) 闇よみながすコト、
よみながす(讀流) 闇つかゆるところなく
すらすらと讀み終(シ)る、
よみな(讀馴) 闇動しげくよみて、そ
の文章に能くなれる、
よみならふ(讀習) 闇動たびたび讀みてな
れる。讀みつける、
よみにくし(讀惡) 闇讀むに骨の折るなり
よみづらくあり、
よみひと(讀人) 闇其の歌を詠(シ)せし人、
よみぶり(讀振) 闇文章を讀む容子、
よみほん(讀本) 闇文字の讀み方を習ふ本
漢字交(シ)りの小説本、
よみす、よみほ 嘉

よみもの(讀物) 闇讀んで爲めになる書物
(シ)講釋師(シ)が講談する其の下題(シ)
の夜、
よみや(夜宮) 闇又た宵宮とも書く、神社
の祭禮の前夜に、行ふ祭りのコトを云
ふ、 「さうす。廣く書物を讀む
よみやふる(讀破) 闇動多くの書物に目を
よみよし(讀好) 闇讀みやすきコト。たや
すく讀みあそぶコト、
よみわたり(讀渡) 闇動書物な廣く讀む。
多くの書物に目をさうす(シ)書物を讀み
て、他人にきかせ知らせる、
(よむ) 呼
よむ(讀) 闇動文字文章を見て其の意義を
知る(シ)文章を聲を立て、唱(シ)ふ(シ)物
の數(シ)をかぞふ、(シ)歌(シ)をつくる、
(よめ) 呼
よめ(嫁) 闇又た嫁の文字をも書く、我が
子のつま(シ)婚姻なしたる其の當時の、
女子の夜(シ)の夜、
よめ(夜目) 闇夜間に物を見るコト。夜間
に物を見たるコト、
よみも、よめ 讀取 一九四九

よみも、よめ 讀取 一九四九

よめい、よもき 艾、蓬

よめい(餘命) 罔生(オ)ひ先(オ)の短かき身
さ云ふコト。の、これる生命、
よめい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よめい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よめい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よめい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、

(よも)

よも(四方) 罔四方八方(オ)のあたり
東西南北のオト、
よも(艾) 罔草の名、山野に自生する雜
草、其の葉は菊の葉の如くにして一種
の香氣あり、其の嫩葉は之を乾燥(オ)
して薬用す、
よも(蓬) 罔木の名、やなぎよもきの古
稱、尙ほ其の條を見られよ、
よも(蓬) 罔草の名、やなぎよもきの古
稱、尙ほ其の條を見られよ、

(よや)

よや(四方) 罔四方八方(オ)のあたり
東西南北のオト、
よや(艾) 罔草の名、山野に自生する雜
草、其の葉は菊の葉の如くにして一種
の香氣あり、其の嫩葉は之を乾燥(オ)
して薬用す、
よや(蓬) 罔木の名、やなぎよもきの古
稱、尙ほ其の條を見られよ、

よゆう、よりあ 寄、送 一九五〇

(よゆ)

よゆう(餘裕) 罔ありあまるコト。ゆたか
なるコト。心のゆつたりして居るコト、

(よよ)

よよ(代代) 罔だいたい代(オ)のかさなる
コトを云ふ、世世、
よよ(夜夜) 罔夜(オ)こま、毎夜(オ)、

(より)

より(寄) 罔人又は物の集(オ)まるコト、
より(送) 罔糸などをより合(オ)せたる度合(オ)
のオトを云ふ、
より(結毒) 罔俗語にて腫物(オ)などの毒
が、一處(オ)に集りて、固(オ)くれたる
ものを云ふ、
より(寄合) 罔人の集り来るコト、
より(寄合) 罔動人人が集(オ)まりて、
一團(オ)になる、
より(寄合) 罔動よりて合(オ)はす、ひ
より(寄合) 罔動よりて合(オ)はす、ひ

(よる)

よる(夜) 罔夜に同じ、
よる(由) 罔因(オ)に同じ、
よる(因) 罔もさづく(オ)だいななる(オ)
ちなみさす、
よる(憑) 罔たたる(オ)むくゆる(オ)つく、
よる(類) 罔たよりにする、力(オ)たのむ、
よる(後) 罔動れちて交(オ)へ合す、糸(オ)
の(オ)み合す、
よる(寄) 罔集(オ)まる(オ)むらがる(オ)身
をよせる、即ち寄留(オ)す、
よる(凭) 罔よりかかる(オ)もたれる、
よる(倚) 罔もたれる(オ)其の處に身をよ
せる、
よる(縁) 罔由(オ)に同じ、
よる(擇) 罔動えらぶ、よりわけける、
よる(據) 罔動たよりさす(オ)よりごころさ
す(オ)もさづく、
よる(餘類) 罔残りのさもがら、
よる(おとど) 罔御殿、罔清涼殿の御内な
る、天子の御殿のオトを申す、
よる(夜書) 罔夜(オ)と書(オ)、夜(オ)も書(オ)、

よりよ、よるひ 夜、由 一九五一

よりい(餘類) 罔残り(オ)の短かき身
さ云ふコト。の、これる生命、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、

よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、

よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、
よりい(嫁入) 罔妻(オ)となりて、夫(オ)
の家へ赴くコトを云ふ、

よるべ(寄方) 図たよりし頼(た)むさこ
ろ。力となす人を云ふ。

(よれ)

よれい(餘餘) 図餘年(た)の。殘年(た)に同
じのこれるよはひ。
よれき(餘餘) 図のこりのしづく。

(よろ)

よろ(餘餘) 図あまれる利益(た)のこりの
さひはひ。
よろこび(喜) 図又た悦の字を書き、うれ
しく思ふ。好(た)ましく感じ(た)するコト。
よろこばし(悦) 図うれしがる。うれしき
思ひをするなり。「いさみ立つ
よろこびいさむ(喜車) 自働うれしがつて
よろし(宜) 図ほごよきなり、まごに其
の通り、よろしとするなり。
よろしと(宜) 圖ほごのよき、よきやうに、
すべからず。
よろず(萬) 圖数の多きコト。
よろず(萬) 圖いろいろなる、なにもかも、
よろず(萬) 圖永久(た)末(た)長く、
よろび(鐘) 圖武具の一、昔時戦争の時に
よく用いたる木、草(た)こ金(た)で作
られたる衣服、
よろいし(鐘師) 圖よろひをこしらふる職
人。よろひを賣る家、
よろひむさ(鐘草) 圖牡丹の一名、
よろひむつ(鐘櫃) 圖鐘を藏(た)して置く
櫃(た)、
よろひむし(甲蟲) 圖凡て脊(た)に堅固な
る甲(た)の在る虫のこを云ふ、
よろひむそめ(鐘着初) 圖昔武家にて、男
子が十四五歳になれば、初めて鐘を着
る其の式の稱、
よろひつくり(鐘作) 圖鐘をつくる職人、
よろひどほし(鐘通) 圖大小兩刀の外に、
別に佩(た)る短刀のこ、敵と組打(た)の
時に刺(た)す用を爲す、
よろひむしや(鐘武者) 圖甲冑(た)をつけ
たる武士のこ、
よろぼふ(鐘眼) 自働よろよして歩み行
よろめく(鐘脚) 自働足の運び亂れてたし
かならず、
よろよろ(鐘脚) 圖よろめき歩む状(た)、
よろん(餘餘) 圖のこりの議論。あごの議
論、
よろん(輿論) 圖世間一般の議論(た)。

よろひ、よろん

着用したる、木と草(た)と金(た)で作
られたる衣服、
よろいし(鐘師) 圖よろひをこしらふる職
人。よろひを賣る家、
よろひむさ(鐘草) 圖牡丹の一名、
よろひむつ(鐘櫃) 圖鐘を藏(た)して置く
櫃(た)、
よろひむし(甲蟲) 圖凡て脊(た)に堅固な
る甲(た)の在る虫のこを云ふ、
よろひむそめ(鐘着初) 圖昔武家にて、男
子が十四五歳になれば、初めて鐘を着
る其の式の稱、
よろひつくり(鐘作) 圖鐘をつくる職人、
よろひどほし(鐘通) 圖大小兩刀の外に、
別に佩(た)る短刀のこ、敵と組打(た)の
時に刺(た)す用を爲す、
よろひむしや(鐘武者) 圖甲冑(た)をつけ
たる武士のこ、
よろぼふ(鐘眼) 自働よろよして歩み行
よろめく(鐘脚) 自働足の運び亂れてたし
かならず、
よろよろ(鐘脚) 圖よろめき歩む状(た)、
よろん(餘餘) 圖のこりの議論。あごの議
論、
よろん(輿論) 圖世間一般の議論(た)。

よわし、よわる

(よわ)

よわし(弱) 圖つよくなし、具(た)はれる形
(た)を損じやすし。
よわこし(弱腰) 圖腰の左右に當る細き弱
き部(た)の力(た)の弱き人、
よわたり(世渡) 圖世帯(た)のみすぎ、
よわみ(弱身) 圖よわき身(た)よわつて居
るこ、其の欠けて居るこ、即ち弱
點(た)。
よわみそ(弱味旨) 圖弱き人をあざけつて
よわむ(弱) 圖強もろくする、よわくする、
よわむし(弱蟲) 圖意氣地(た)なき人、物
を怖(た)れる人、臆病者、
よわめ(弱目) 圖より出したる時、よわ
りたる時のこ、
よわよわし(弱弱) 圖さも弱(た)し、如何
よわりきる(弱切) 自働弱(た)つてしまふ、
困つてしまふなど、凡て弱りたる極度
(た)を云ふ、
よわりはつ(弱果) 自働よわりきる、
よわる(弱) 自働よわくなる、もろくなる、
(よん)

ら

(ら)

ら(窶) 圖石の多く積み重(た)なれるこト
を云ふ。立派なる體格(た)を云ふ。
ら(羅) 圖絹織物の一種生糸(た)にて薄
く織りたる物。鳥(た)を捕ふるに用
ゆる一種の細かきあみ。
ら(籛) 圖草の名、つたかづら、
ら(籛) 圖樂器の名かれの一種ざら、
ら(籛) 圖わきまへ。わきまふこト、
ら(籛) 圖みまはるこト。みまはり(た)みま
はり歩いて(た)しむるこト、
ら(籛) 圖はだか。すはだかのこト、
ら(保) 圖前後に同じ、
ら(瘰) 圖はだか。はだかをぬくこト、
ら(瘰) 圖病氣の名、悪性の腫物の生ずる
病氣、即ちるあれきのこト、
ら(騾) 圖馬と驢馬(た)の交接に依りて
生じたる馬、即ちらば、
ら(等) (接尾) 或る語の下に附加(た)て
數(た)の多き意を示すに用ゆ語、
まんぞら 窶、籛、籛、籛、籛、籛、籛、

(らい)

らい(來) 圖きたるこト、くるこト。此か
ら先きのこト、未來(た)將來(た)其
の時より後(た)即ちこのかた、以來(た)
或る語の上に付け加へて來(た)るこ云
ふ意を表はす語例は來月(た)或る語
の下に付け加えて、過(た)き來りし意を
表はす語、例は以來(た)など、
らい(睐) 圖みかへるこト。かへりみるこ
ト。片臨(た)を見るこト、
らい(齎) 圖あたへるこト。下したまはる
こト。たまものこト、
らい(萊) 圖草の名、あかさのこト。草の
生(た)ひしけれはるあれ地のこト。あれ
たる田地(た)雜草を除きて清(た)くなす
こトを云ふ、
らい(駭) 圖丈(た)の非常に高き大なる馬、
らい(雷) 圖いかづち。かみなり、即ち空氣
中の電氣が発電する時に生ずる音(た)轉
じてこつるき渡るこト。大なる聲(た)石
などを轉がす時に發する音のこトを云
ふ、
らい(癩) 圖病氣の名、らいびやう、
らい(賴) 圖たのむこト。たよりとするこ

らい、瀬、鎖、菅、菴、末、偏、一九五三

ら(濼) 圖水の淺き處、あさせ、
ら(鎖) 圖風又は風の吹く聲。笛(た)の
一種にて、孔(た)の三つある笛(た)總て疎
(た)き間(た)又は孔(た)などを空氣が強く通
過する時に生ずる響(た)のこトを云ふ、
らい(菅) 圖草の名、よもぎ。樹木などの
爲めに截(た)はれてる大地を云ふ、即ち
隆(た)のこト、
らい(菅) 圖花のつぼみ、
らい(薩) 圖石の多く轉(た)がり重(た)なつ
てるこトを云ふ、
らい(鏃) 圖大なる瓶(た)、
らい(菴) 圖石の數多(た)重(た)なり合ひ
轉(た)がつてる状態を云ふ。壯大なる状
を云ふ。人の氣質の大にしておちつけ
るこトを云ふ、
らい(末) 圖器具の名、すきのこト、
らい(偏) 圖大なる石。大なる石を高き處
より轉(た)がし落すこトを云ふ、
らい(偏) 圖山の高低(た)になつて居る状態
を云ひ表はす語、
らい(偏) 圖傀儡(た)の略にて、てくのば
う。つち人形のこトを云ふ、
らい(羅衣) 圖薄(た)絹(た)にて作りし衣、
らい(羅衣) 圖草の名、深山に在る老樹(た)ら

らい、瀬、鎖、菅、菴、末、偏、一九五三

らしい(来儀) 図他より来るコトを尊(ひ)と云ふ。
らしい(来客) 図らいかくに同じ。
らしい(来遊) 図来たりて遊ぶ。又は遊びに来るコトを云ふ。
らしい(雷雨) 図雷(かみなり)が鳴つて雨が降(ふる)るコト。雷(かみなり)と云ふ。
らしい(来調) 図他より貴人の許(きよ)へ来りてお目にかかるコト。
らしい(来葉) 図来葉(かき)の世、來世、らしい(来援) 図他より来りて助けを爲す。すけてのコト。
らしい(来駕) 図人の来り訪ふコトを尊(ひ)が國へ來れるコト。
らしい(来航) 図外國より船に乘りて我が國へ來れるコト。
らしい(来貢) 圖外國より貢物(きんぎょ)を持つ来るコトを云ふ。
らしい(来迎) 圖佛(ぼつ)又は如来の靈(たま)を現はして、来り迎はる。と云ふコトを云ふ。
らしい(来客) 圖來たれる客。客の來るらしい(来輪) 圖來たれる書狀。來狀。らしい(来氣) 圖かみなりの鳴(かみなり)りさうな空模様(あまのけし)のコトを云ふ。
らしい(来紀) 圖來るべき年月。

らしい(来儀) 圖他より来るコトを尊(ひ)と云ふ。
らしい(来客) 圖らいかくに同じ。
らしい(来遊) 圖來たりて遊ぶ。又は遊へ来るコト、即ち來朝。
らしい(来寓) 圖他地方より來りて假住居をなすコト、即ち寄留。
らしい(来火) 圖雷(かみなり)の落ちたるに依り、起(おこ)りし火事の稱。
らしい(来會) 圖來りくわいするコト。會場へ來るコト。
らしい(来霧) 圖山などの高く聳(た)へてるコト。霧(きり)はしきコト。
らしい(来魂) 圖岩などの大きくして立派なるコトを云ふ。
らしい(来光) 圖いなびかりの光。
らしい(来砲) 圖大砲又は小銃の丸(たま)を射(や)つ時に、火藥の管(か)を爆發(ばくはつ)させる仕掛(か)になり居る物のコトを云ふ。
らしい(来鷄) 圖かみなり鳥。
らしい(来月) 圖此の月の次(つぎ)に來る月、即ち翌月(あしたのつき)。
らしい(来雷) 圖鬼の如き形をなせる雷神(かみなり)が、背(せ)に荷負(か)ひ居るを云ふ、八つの大鼓(おほづ)に轉じて打(う)つ面(おもて)の八

らしい(来真) 圖來朝して貢物(きんぎょ)を捧(た)ぐるコトを云ふ。
らしい(来寇) 圖我が國へ攻め來りて寇(こう)を爲すコト。
らしい(来公) 圖かみなりのコトを洒落(しやれ)らしい(来今) 圖今より後。此ののち。
らしい(来舖) 圖田畑を耕(か)す具(ぐ)らしい(来禮) 圖拜禮して其の人の功績(こうせき)をほめた。ゆるコトを云ふ。
らしい(来紙) 圖手紙の上を巻く白紙(しろがみ)のト、斯く白紙にて巻きて、更に封筒(ふうとう)に入れるなり。
らしい(来賜) 圖たまもの下され物。
らしい(来耜) 圖農具の名、すきのコト。
らしい(来示) 圖他より手紙にて云ひ來りし事柄(ことわり)を敬(や)ひて云ふ語。
らしい(来子) 圖菓子器の一種の名、縁(えり)高くして外部を黒漆(くろしやく)にて塗り、内部を朱塗(しゆぞ)としたる。蓋(かぶ)のあるもの。
らしい(来歌) 圖歌の名、深山に棲(すま)むて猿(さる)の如く巧みに樹木に登り得る小歌にして、其の形(かたち)に似て足長(あしなが)且つ鋭(と)き爪(つめ)あり、激(げき)しき雷雨(かみなり)の時に、人家(や)近くへ出で來るコトあり

らしい(来日) 圖此れより先きの日、らしい(来集) 圖よりあつまる。群(ぐん)り來るコトを云ふ。
らしい(来襲) 圖來りおそふコト。
らしい(来者) 圖來るべき人、來た人。
らしい(来車) 圖他人の訪(ま)ひ來るコトを敬(や)ひて云ふ語。
らしい(来書) 圖送り來たれる手紙。
らしい(来信) 圖來たりしたより、到着(とちやく)せる手紙。
らしい(来神) 圖かみなりのコト。
らしい(来診) 圖醫士を我が家へ招(ま)きて、診察(しんさ)をとふコト。
らしい(来人) 圖來客に同じ。
らしい(来狀) 圖來た書狀。來書。
らしい(来春) 圖次に來る春。翌年(あしたのとし)の春。來年の春。
らしい(来紙) 圖電信を差し出す時に、文句(ぶんこう)を認むる一定の用紙の稱。
らしい(来世) 圖未來(あした)の世、後の世。
らしい(来石) 圖石の名、雷(かみなり)が砂地の上へ落ちたる時に、熱(あつ)の爲めに砂(すな)が溶解(とくげ)され、管(か)の如き形状(かたち)に固(かた)まりたる物を云ふ。
らしい(来石) 圖荒き砂利(すな)。

らしい(来属) 圖來りてなつき従ふコト來りて味方となるコト。
らしい(来孫) 圖支孫(しそん)の子の稱。
らしい(来懶) 圖なまける。おこたるコト。
らしい(来禮) 圖を云ふ。
らしい(来禮堂) 圖寺院にて、御佛に禮拜し及び讀經(よみ)を爲す堂。
らしい(来談) 圖人の來りて物語を爲すコト、又は來りて相談(さうだん)するコト。
らしい(来著) 圖來りつくコト、届(き)くコト。到着(とちやく)の稱。
らしい(来雷) 圖かみなり。いかつち。
らしい(来庭) 圖來朝(きんぎょ)に同じ。
らしい(来朝) 圖他國人の我が國へ來りて朝廷(ていてい)を訪(ま)ふコト。
らしい(来鳥) 圖鳥の名、らしい(来鳥)の毛コトにて、高山に好んで棲む褐色(こくしやく)の毛ある鳥、冬季に至れば其の毛色は白色に變ず。
らしい(来電) 圖電報の來るコト、又た來りたる電報のコトを云ふ。
らしい(来電) 圖かみなり。いなづま。
らしい(来同) 圖他人の意見に一致するコト。何等(なんごう)の分別(ぶんべつ)もなく、他人の議論(ぎろん)に賛成(さんせい)して事を爲すコトを云ふ。
らしい(来同) 圖多くの人々の集(あ)まり

らしい(来年) 圖今年(ことし)の次に來る年、即ち翌年(あした)。
らしい(来鳥) 圖らいとうに同じ。
らしい(来禮) 圖佛の前にぬかづき、禮(らい)を正(ただ)して拜(か)むコト。
らしい(来報) 圖到着(とちやく)したる其の通知(つうち)のコトを云ふ。
らしい(来訪) 圖人の訪(ま)ひ來るコト。
らしい(来春) 圖來るべき春。
らしい(来禮) 圖佛家の語にて、本尊(ほんぞん)の祀(まつり)られて在る前に在る高き壇(いだし)の稱。
らしい(来賓) 圖來客に同じ。
らしい(来病) 圖最も思ひ嫌(きら)ふ傳染病(えんりょうびん)の一、即ち皮膚(かわ)に赤き斑點(あざ)を生じて、其が結節(むすぶ)の状態(かたち)を爲りて、腫(は)れ而して白き痂(かさ)を生じ、終には皮膚(かわ)が爛(う)れて腐(くさ)り、又た毛髮(け)の脱(は)れる病氣にて、一名を天刑病(てんけいびん)と云ふ。
らしい(来賓) 圖おまひ來りたる客。即ち來客(きんぎょ)の稱。
らしい(来斧) 圖石器時代の武器の名、青石(あおいし)にて作られたる斧(きりぎり)の如き形を爲せる、三四寸ほどのもの。

らしい(来日) 圖此れより先きの日、らしい(来集) 圖よりあつまる。群(ぐん)り來るコトを云ふ。
らしい(来襲) 圖來りおそふコト。
らしい(来者) 圖來るべき人、來た人。
らしい(来車) 圖他人の訪(ま)ひ來るコトを敬(や)ひて云ふ語。
らしい(来書) 圖送り來たれる手紙。
らしい(来信) 圖來たりしたより、到着(とちやく)せる手紙。
らしい(来神) 圖かみなりのコト。
らしい(来診) 圖醫士を我が家へ招(ま)きて、診察(しんさ)をとふコト。
らしい(来人) 圖來客に同じ。
らしい(来狀) 圖來た書狀。來書。
らしい(来春) 圖次に來る春。翌年(あしたのとし)の春。來年の春。
らしい(来紙) 圖電信を差し出す時に、文句(ぶんこう)を認むる一定の用紙の稱。
らしい(来世) 圖未來(あした)の世、後の世。
らしい(来石) 圖石の名、雷(かみなり)が砂地の上へ落ちたる時に、熱(あつ)の爲めに砂(すな)が溶解(とくげ)され、管(か)の如き形状(かたち)に固(かた)まりたる物を云ふ。
らしい(来石) 圖荒き砂利(すな)。

らうげ、らうせ
らうげつ(明月) 固牙(カ)たる月。ほがらかなる月のコトを云ふ。
らうけん(勞謙) 固苦勞して他にへり下たるコトを云ふ。
らうこ(牢固) 固しつかりしてあるコト。堅固(カ)なるコトを云ふ。
らうこ(狼顧) 固狼(カ)がふり返つて後を見る如く、ふり返りて他人の容子を眺(カ)むるコトを云ふ。
らうご(老後) 固年をさりたるのち。
らうこう(老功) 固年久しく経験し來りて其の物事に十分に馴(カ)てるコト。老年に至るまで、奮勉(カ)を續けたる功績(カ)を云ふ。
らうごし(牢獄) 固牢屋。監獄(カ)。
らうごし(牢輿) 固めしうごを入れて運(カ)ぶ、このコトを云ふ。
らうざり(老壯) 固老人さわかもの。老子(カ)と莊子(カ)のコトを云ふ。
らうざり(老僧) 固老人の田舎者(カ)。
らうざり(老狼) 固老人の身(カ)。
らうざり(老眼) 固眼よつくコト。よるめくコトを云ふ。
らうざく(勞作) 固骨を折りてはたらくコト。力わざのコトを云ふ。
らうざりのがく(老莊學) 固老子と莊子と

らうし
が説きたる道(カ)を述べたる學問の稱。
らうし(浪士) 固一定の住所職業なくしてぶらつき歩てる人。浪人。
らうし(浪死) 固浪人して歩きつゝある中に、死するコトを云ふ。
らうし(牢死) 固牢内で死するコト。
らうし(老死) 固年ゆきて死するコト。
らうし(老師) 固老師匠。老先生。
らうじつ(老實) 固物事になれて、まめやかなるコトを云ふ。
らうしや(老若) 固老人。さしより。
らうしや(牢舍) 固らうや。ひこや。
らうしゆ(擲取) 固水中に在る物をさぐりて、取り上げるコトを云ふ。
らうしゆ(老手) 固藝術などに、熟練(カ)せる人。老手。
らうじゆ(老儒) 固老人の學者。十分に經驗(カ)せる學者。
らうじゆ(老樹) 固年數を経たる立木。
らうしん(老身) 固老ひの身。老人。
らうしん(老臣) 固年老ひたる家來。長らく仕へてゐた家來。大名の家老(カ)のコトを云ふ。
らうしん(勞神) 固精神をつからすコト。心配(カ)するコト。案じるコト。
らうじん(老人) 固年よりのコト。

らうし、らうせ 勞
らうしや(勞症) 固病氣の名、肺勞(カ)肺結核(カ)の科ト。
らうしや(老將) 固年老ひたる大將。戰(カ)場の經驗軍事に精通して大將。
らうじやく(老弱) 固年よりさわかもの。
らうじやく(狼藉) 固佛法の語、三惡日(カ)の一の名、萬事に用ひて大凶なり云ふ日。
らうじゆ(郎從) 固我が家の小者(カ)即ち郎黨(カ)の科トを云ふ。
らうじゆ(老熟) 固經驗の功を積みて、其の物事に十分達(カ)してゐるコトを云ふ。
らうじんぼし(老人星) 固南極星の科ト。
らうす(勞) 固働一心になつて仕事する。はたらく。骨を折る。
らうす(勞) 固働仕事をさせる。はたらかす。骨を折らす。自分の爲めに、つごめさす。即ちわづらはす。いたはりなぐさむ。ねさらふ。
らうす(勞) 固つかれやつれる。やみつかれるコトを云ふ。
らうす(老衰) 固年老ひて精力のおとらふるコトを云ふ。
らうせい(老生) 固老人が自分の事を他に向つて云ふに用ゆる代名詞。

らうせい(老成) 固經驗の功積みて、物事の成功するコトを云ふ。おこなぶるコトを云ふ。
らうせい(牢晴) 固晴れ渡りたる上天氣の科トを云ふ。
らうせち(老少) 固老人と若者(カ)。
らうせき(狼藉) 固器具類のちらかつてゐて、醜(カ)しき状態を云ふ。あばれ廻(カ)るコトを云ふ。此の語は狼(カ)が草を藉(カ)て臥したる其の後(カ)の、著(カ)るしく亂れてあるものなるより、出でたるなり。
らうせき(狼藉) 固亂暴(カ)をはたらく奴。不埒者(カ)。
らうせち(老少) 固老少不定。固老人なる故に死し、若者なる故に死せず云ふ。譯(カ)にあらず云ふ語。
らうそ(老僧) 固老人の僧侶。經驗(カ)の積みたる僧侶の科ト。
らうそ(老足) 固老人の歩み行くコト。はからざる歩み振(カ)の科ト。
らうたい(老體) 固老人の身體(カ)としよりのコト。
らうたい(老躰) 固尊上の人を敬(カ)ひて云ふに用ゆる語。
らうたい(老類) 固老ひてすたる、即ちおひはれるコトを云ふ。
らうせ、らうた

らうたい(老大) 固老衰(カ)と同じ。
らうたい(老黨) 固郎從(カ)と同じ。
らうたい(可愛) 固あいらしくあり。やさしくあり。いたはしくあり。
らうたいしん(老大人) 固他人の老父を敬ふて呼ぶに用ゆる語。老翁の科トを敬ふて呼ぶに用ゆる語。
らうたいこく(老國) 固國政國運共に、おこへつゝある國の科トを云ふ。
らうちやく(老女) 固武家方の奥向に仕(カ)てる侍女頭(カ)の稱。年をさりたる婦人の總稱。
らうちやく(潦漲) 固大雨にて河水などのみなぎれるコトを云ふ。
らうちやく(期暢) 固ごかなるコト。のびやかなるコトを云ふ。
らうちやく(老中) 固徳川幕府の職名にて幕政をつかさどる第一位に在る役向の稱呼。
らうちやく(郎等) 固家の子。家來。
らうちやく(勞働) 固力わざをなすコト。骨(カ)折(カ)はたらくコト。
らうちやく(老充) 固年をさりて頭のはげるコト。老人のはげあたま。
らうちやく(朗讀) 固書物又は文書などを高聲にて讀(カ)みあげるコト。
らうた、らうに

らうにん(浪人) 固浪士(カ)と同じ。
らうにやく(老若) 固老人と若者(カ)徳川幕府に於ける老中と若年寄(カ)の職名の略。
らうねん(老年) 固五十歳以上の年齢の科ト。
らうのち(老農) 固農事に十分の經驗を有(カ)る農夫。老人の農夫。
らうば(老婆) 固年のゆきたる婦人。
らうはい(老悖) 固年老ひたる爲めに分別心の乏(カ)しくなりたるを云ふ。
らうはい(老輩) 固老人仲間(カ)。
らうはい(狼狽) 固うろたへさばぐコト。あはてまはるコトを云ふ。
らうばん(牢番) 固牢獄の番人、現今の看守(カ)。
らうばしん(老婆心) 固親切なる心。
らうひ(浪費) 固必要ならざるに金錢をつかひつづるコト。むだづかひ。
らうひしや(浪費者) 固むだづかひのみする人。ばうさうもの。
らうひやく(老病) 固年よりたる爲めに身體の次第に衰(カ)へゆく病氣。
らうふ(老父) 固老人となりし父。年よりたる男子の科トを云ふ。
らうふ(老夫) 固年よりたる男子。
らうふ(老婦) 固年よりたる女子。
らうふ、らうふ

らうへい(老兵) 図年よりの兵士、
らうべり(廓廟) 図朝廷の廟、
らうべりのき(廓廟器) 図大臣宰相たるべき器量、
らうほ(老圃) 図農事に十分の経験を有せる農夫のトを云ふ、
らうほ(老母) 図老人の母のト、
らうほく(老木) 図年數を経たる木、
らうほく(老僕) 図年よりたる下男、
らうまい(根米) 図兵糧米のト、
らうまり(老妻) 図おいばれのト、
らうもん(勞問) 図いたはりたづねるト、
らうや(老爺) 図年をとりたる男子、
らうや(牢屋) 図囚人を入れ置く處、
らうゆう(老雄) 図老人の英雄、
らうらう(朗朗) 圖はらかなる狀、
らうらう(浪浪) 圖爲すトなくして、ぶらぶらしつゝある狀を云ふ語、
らうらうし(勞勞) 圖物事を爲すに極めて巧(うま)し、

らうらく(牢落) 圖ぼつさしてゐるト、
らうり(老吏) 圖久しく仕へて、事務に精通せる官吏、
らうりよく(勞力) 圖はたらく、かせぐト、
らうる(老羸) 圖年よりて、身體の弱、
らうれい(狼戾) 圖甚だしく怒のふかきト、
らうれん(老練) 圖總て物事に熟練してゐるト、
らうれんか(老練家) 圖老練してゐる人、
らうろり(牢籠) 圖甚だしく、困難するトを云ふ、

らかん(臘乾) 圖ハムのトにて即ち豚(た)の(た)の肉を燻(た)べたる物、滋養(じやう)ある食品、
らかん(羅漢) 圖アラカン(阿羅漢)の略、
らかんはく(羅漢柏) 圖木の名、アスハヒノキの一名、
らかんまき(羅漢槓) 圖木の名、高野槓(た)の一名、
らき(羅綺) 圖薄き地合のきぬもの、
らき(羅蓋) 圖傘(かさ)の一種、
らき(羅佛具) 圖佛具の名、えうらくのト、其

らうへい

らうらく

らかん

一九六〇

の條を見られよ、
らく(駱) 圖馬の毛色の名、かばらげのト、
らく(駱) 圖山に在る大なる石、堂々たる壯大なる狀を云ふ、
らく(酪) 圖一種の食品にて、牛又は羊(ひ)の乳(ち)を煮(ゆ)て製したる、ドロドロなる物(牛酪) 圖果物(くだもの)の汁(じゆ)にて、製したる酒類の總稱、
らく(絡) 圖わたのト、
らく(糸) 圖糸、
らく(網) 圖つながり、
らく(絆) 圖つらなる、
らく(樂) 圖精神の安穩(やすみ)にしてたのしみ、
らく(樂) 圖芝居道(しばい)の語にて其の興行(かぎ)が終(は)りしを云ふ、
らく(烙) 圖烙印(はくいん) 圖やきいん、
らく(落胤) 圖をさしたれのト、
らく(樂) 圖樂居(がく) 圖安らかに隱居して餘生(あまご)を氣樂に送り行く人、
らく(落英) 圖ちり落ちる花、
らく(絡繹) 圖人馬などの連(つ)なり

らく(羅蓋) 圖傘(かさ)の一種、
らく(羅蓋) 圖煙管の火皿(ひら)と吸口(すいこう)とを、
らく(らかが) 圖張りたる物、
らく(らおを) 圖葉が枯(か)れて木より離(は)れ落ちるト、
らく(楽園) 圖たのしみ場所、
らく(落葉木) 圖冬になれば其の葉の盡く枯れ落ちる木を云ふ、
らく(落雁) 圖雁(かり)の列(れつ)をなして飛びあたる雁の地上へ下(くだ)るト、
らく(落子) 圖豆粉に砂糖を加(か)へて固(かた)まらしたる物、
らく(落焼印) 圖焼印(やきいん) 圖捺(な)すト、
らく(落暉) 圖夕方の太陽、即ち入り日のト、
らく(落居) 圖安らかにちつく、
らく(落境) 圖たのしみ身分、
らく(落句) 圖漢詩の初句又結句(はつご)のトを云ふ、

らく(落花) 圖散る花、
らく(落外) 圖落中の反對、都(みやこ)のそが名を記して、自家(みづか)の印形(いんがた)を云ふ、
らく(楽観) 圖たのしがるべくと思ふ事、
らく(落花生) 圖草の名、一種の蔓草(つた)にて、花を開きて地に落れば實(み)を結ぶ、一つの花に必ず一つの實を生ず、其の實は蘭(らん)の如き形をなせる鞘(せう)の中に、二つ三つ薄き茶色の皮を被(か)りて在り、實は白くして其味美に、且つ脂肪氣(じやうあ)に富む、即ち南京豆(なんきんぢゆう)のト、
らく(落花油) 圖南京豆を絞(しぼ)りて取りたる上等の油、
らく(落花流水) 圖男女が互(たが)ひに戀(こ)ひ慕(た)ふトを云ふ、
らく(落月) 圖西に傾く月のト、
らく(落語) 圖をさしたれのト、
らく(落紅) 圖凡(たゞ)き色(いろ)をなせる花の落ちたるを云ふ、
らく(落語家) 圖はなし家、
らく(落差) 圖物の落る其の高さの度合

らくらく

らくらく

らくらく

一九六一

らくさらくせ

を云ふ

らくさい(落歳)墮年のコト 楽(ガク)し
 き年のコトを云ふ。一云ふ
 らくさち(落想)墮考(ガク)へを附ける事を
 らくさつ(落札)墮札したる札の表に落
 るコト、即ち其の物事が、私の權利に歸
 するコト。
 らくじ(落字)墮文章中、文字の脱(ゲツ)して
 もの、コトを云ふ。
 らくじつ(落日)墮入日(ガク)のコト。
 らくしよ(落書)墮をさし文(ガク) 落書(ガク)の
 物に同じ。
 らくしゆ(落首)墮物事をあざけつたり、
 又は其の事を諷刺(フウサク)したる歌を、門
 又は壁(ガク)などへ書き散(ガク)すコト、又
 はかきたるもの。
 らくしゆ(落手)墮物を受取るコト。
 らくじん(樂人)墮氣樂な人。
 らくしやう(酪漿)墮牛又は羊の乳汁(ガク)
 のコトを云ふ。
 らくじやう(落城)墮城の落るコト、攻め
 落されたる城。
 らくしやう(落掌)墮受取るコトを云ふ。
 らくしよく(落飾)墮髪を切り落して佛門
 に入るコト。
 らくせい(落成)墮土木工事の出来上(ガク)

らくせらくた

りたる事を云ふ

らくせき(落籍)墮名前を除(ゲツ)きて、今ま
 での間を去るコト、藝妓等の廢業
 を云ふ。
 らくせん(落選)墮其の選に入らぬコト、
 即ち當選せぬこと。
 らくせいしき(落成式)墮土木工事の成功
 を祝ふ儀式のコトを云ふ。
 らくた(落駝)墮獸(ガク)の名、アフリカ地
 方又はアジヤの西部地方に多く産す、
 其の形大にして馬の如く、頭長く足亦
 大長し、其の性質(ガク)極めて温順
 (ガク)にして人に馴れ易し、且つ力強き
 を以て、勞役に使用さる、又五六日間
 は一滴(ガク)の水を飲まずとも渴(ガク)を
 覺(ガク)ゆる事なきに依り、沙漠地方を旅
 行するに適す、故に人は好んで之(ガク)に
 乘りて沙漠地方を旅行す、尙ほ此の獸
 の特徴(ガク)は、脊に肉鞍(ガク)あり、即
 ち肉が宛然(ガク)鞍(ガク)の如くに高くな
 つてある、之を肉峰(ガク)とも云ふ、此
 の肉鞍を二個有するものあり、又た一
 個なるものあり、南アメリカ地方に産
 する者には肉鞍なし、之を無峰駝(ガク)
 と呼ぶ。
 らくだい(落第)墮試験に合格せぬコト、

らくたらくて

即ち及第(ガク)せぬコト

らくたい(落題)墮其の題に適(ガク)ふて居
 らぬ和歌のコトを云ふ。
 らくたく(落托)墮他方より浮浪(ガク)し來
 りて、其の土地になつてくコト。
 らくだつ(落脫)墮ぬけをつるコト。
 らくだん(落膽)墮氣を落とす、即ちがつか
 りするコト。
 らくだづみ(落駝炭)墮獸(ガク)らかき炭の
 コト、土釜炭(ガク)に同じ、其條を見よ。
 らくだいせい(落第生)墮試験に落第した
 る生徒。
 らくち(樂地)墮たのしき土地(ガク)たのしき
 らくちやう(落丁)墮書物の紙數の足らぬ
 コトを云ふ。
 らくちやく(落着)墮物事の片附(ガク)コト
 物事の解決着くコト。
 らくちゆう(洛中)墮都(ガク)の内、 京
 らくてう(落丁)墮ひきしほ(干潮)。
 らくてつ(烙鐵)墮燒きたるて 燒きた
 る鐵(ガク)の、
 らくてん(樂天)墮我れの位置(ガク)に安す
 るコト 樂事に頓着(ガク)せぬコト、
 らくてんか(樂天家)墮自分の位置(ガク)に
 安んじてゐる人。
 らくてんくわん(樂天觀)墮世の中及び人

は凡て善良なるものにして、且つ快樂

らくど(酪奴)墮葉茶の一名。
 らくど(樂土)墮ラクチに同じ。
 らくね(樂寢)墮安らかに樂々されるコト
 らくば(鞍馬)墮馬の種類にて、灰色(ガク)
 の毛をなせる馬のコト。
 らくば(落馬)墮馬上より落るコトを云ふ
 らくばい(落梅)墮笛(ガク)の音(ガク)。
 らくばく(落剝)墮おちるコト。はが
 されて取れるコト。
 らくばく(落實)墮物満(ガク)しきコト。
 らくばく(落魄)墮おちぶれるコト、れい
 らくするコト。
 らくはつ(落髮)墮髪(ガク)をそり落すコト
 らくめい(落命)墮生命(ガク)を落すコト。
 らくめう(洛陽)墮支那の洛陽より出たる
 故事にて、みや、このコト 京都(ガク)。
 らくめう(落陽)墮夕日のコト。
 らくめし(樂燒)墮陶器の名、京都にて製
 出する樂燒(ガク)の手つくれの物にて、
 色は多く白し。
 らくらい(落雷)墮かみなるの落るコト、
 らくらく(落露)墮露(ガク)しき状(ガク)を云ふ 細
 細々(ガク)しき事に心を傾(ガク)けぬコト
 まばらなる状(ガク)に云ふ語 互(ガク)ひ
 らくら、らくら

に中よからぬさまを云ふ語

らくらく(樂樂)墮安樂(ガク)なる状(ガク)に
 云ふ語。
 らくるる(落淚)墮涙(ガク)を流すコト。
 らくわ(裸花)墮萼(ガク)さ花冠(ガク)さのな
 き花の種類。稱。
 らくん(羅裙)墮うすきぬのもすそ。
 (らげ)
 らけい(螺徑)墮うねうねさ曲(ガク)りたる
 小路(ガク)の、コトを云ふ。
 (らいく)
 らこ(羅罟)墮鳥(ガク)を捕(ガク)ふる網(ガク)さ。
 魚を捕ふる網のコトを云ふ。
 らこく(羅國)墮香合(ガク)に用ゆる香料
 (ガク)の名、七種香の一、
 らこく(羅殼)墮うすく織りたるきぬ。あ
 やきぬのコトを云ふ。
 (らしん)
 らしや(羅紗)墮毛織物の名、西洋より輸
 入(ガク)せる物にて、羊(ガク)の毛にて細

かく地合よく織りたるもの

らしや(羅裳)墮うす絹のもすそ。
 らじや(羅城)墮城の外(ガク)ぐるわ。
 らしやめん(羅紗綿)墮羊(ガク)日本の女
 子か西洋人の妾となれるものを云ふ。
 らしやもん(羅城門)墮晋京都の外ぐる
 わの西南の處に在りし門のコトを云ふ
 らしゆつ(裸出)墮物が物におほひ隠(ガク)
 されて居らすに現(ガク)はれ出てるコト。
 らしん(裸身)墮はだかのコトを云ふ。
 らしんはん(羅針盤)墮方角を測り知る器
 械(ガク)の名、航海者の大切なる物、即ち
 磁石盤(ガク)の、
 (らせせ)
 らせつ(羅刹)墮佛語にて、人を食ふこと
 ふ悪き鬼(ガク)のコトにて、身體は黒く髪
 (ガク)は赤(ガク)く、眼は赤(ガク)くして獸(ガク)
 の如き牙(ガク)を有せる、恐(ガク)ろしき像
 (ガク)を描きし物。
 らせつ(羅切)墮陰莖(ガク)を断切(ガク)する
 コトを云ふ。
 らせん(羅氈)墮西洋の毛織物(ガク)の名
 にて、羅紗の一種にて、種々の模様を美
 らしや、らせん

らせん、らつ 埵、舞

しく織り出したる敷物に用ゆる物、
らせん(裸跣) 跣はだしのコトを云ふ、
らせん(螺旋) 跣田にしの殻(カ)の如く、ウ
ネウネと曲りたる物の稱(カ)ねじ巻(カ)
コの下を云ふ、

(らそそ)

らそつ(邏卒) 跣見廻りの兵士(カ) 巡查の別
名、

(らただ)

らたい(裸體) 跣はだかのコト、
らたい(わ) (裸體畫) 跣體(カ)のまゝな
る姿を巧みに描きし物、

(らちぢ)

らち(埵) 跣馬場(カ)の周圍(カ)に設けあ
る埵(カ)らつ、
らちん(羅陳) 跣ならべつらぬるコト、

(らつ)

らつ(辣) 跣おびたしくつらきコト、

らつ、らつは 刺、産

らつ(刺) 跣もさるさからふ(カ)むむコト
らつ(産) 跣もさるさからふ(カ)むむコト
らつ(産) 跣もさるさからふ(カ)むむコト
關する物、葉(カ)葱(カ)の如く細長くして
中は空(カ)なり、秋の頃(カ)に莖(カ)出で、
小(カ)さき紫色の花を咲す、其の根の周圍
(カ)に小(カ)さき卵形(カ)の根を多く生
ず、之(カ)を堀(カ)りて鹽漬(カ)して
食料に供す、

(らして)

らてい(裸程) 跣はだかのコト、
らてい(螺釘) 跣ネツ釘(カ)の曹ト、
らでん(螺鈿) 跣螺貝(カ)又たあわび貝な
ごの殼(カ)の裏(カ)に、キラキラ光(カ)る
る部分のあるを採(カ)りて、それを種々
(カ)の形に切りて、漆器細工(カ)の中
へ嵌(カ)込(カ)りて飾(カ)りなしたる物の
コトを云ふ、

(らはは)

らば(驪馬) 跣(カ)の條を見よ、
らはい(羅拜) 跣二人以上の人(カ)がならびて
拜禮(カ)するコト、
らばつ(螺髮) 跣佛法の教、佛像の髮が螺

らつは、らつ

らつば(刺) 跣もさるさからふ(カ)むむコト
又は其の人、
らつば(産) 跣もさるさからふ(カ)むむコト
關する物、葉(カ)葱(カ)の如く細長くして
中は空(カ)なり、秋の頃(カ)に莖(カ)出で、
小(カ)さき紫色の花を咲す、其の根の周圍
(カ)に小(カ)さき卵形(カ)の根を多く生
ず、之(カ)を堀(カ)りて鹽漬(カ)して
食料に供す、

(カ)の殼(カ)の如く、ちやれてゐるを云
ふ(カ)轉じてちやれ毛のコト、

(らふ)

らふ(羅布) 跣つられしく(カ)つらなりてし
かれてあるコト、
らふ(蘿蔔) 跣大根のコト、
らふ(臘) 跣年の暮(カ)に行ふ祭事(カ)歳(カ)
の曹ト(カ)臘月(カ)の略、
らふ(騰) 跣臘(カ)に同じ(カ)官職の等級(カ)
僧侶の階級のコト、

らふ(蠟) 跣金の名す(カ)の曹ト(カ)總て金屬
(カ)を鎔(カ)せし物の稱、
らふ(蠟) 跣木又は蜂(カ)などの巢(カ)より
取る、粘(カ)りくして稍や固き脂(カ)の如
きもの、火にもゆ(カ)木の名、いはた(カ)い
はたより取りし、らふ(蠟火) (カ)の略、

らふ(臘) 跣陰曆の十二月の稱、
らふ(臘) 跣十二月の三十一日、即
ち大晦日(カ)の稱、

らふ(蝨) 跣石の一種、其の質殊に
やはらかくして、容易(カ)く削(カ)り、
又は刻(カ)み得らるるもの、色種々あり
之れを磨(カ)けば一種の麗(カ)はしき光
澤(カ)を表はす、

らふ、らふせ 臘、蠟、蠟

らふそく(蠟燭) 跣一種の燈火用に供(カ)す
せらるるもの、糸、燈心(カ)紙捻(カ)等
を心(カ)とし、此れに溶(カ)したる蠟を
ぬりつけ固(カ)まらせたる、細長きもの
其の尖(カ)に火をつけて、光(カ)を發
(カ)せしむ、

らふそく(蠟燭) 跣一種の燈火用に供(カ)す
せらるるもの、糸、燈心(カ)紙捻(カ)等
を心(カ)とし、此れに溶(カ)したる蠟を
ぬりつけ固(カ)まらせたる、細長きもの
其の尖(カ)に火をつけて、光(カ)を發
(カ)せしむ、

らふ(臘) 跣陰曆の十二月の稱、
らふ(臘) 跣十二月の三十一日、即
ち大晦日(カ)の稱、

らふ(蝨) 跣石の一種、其の質殊に
やはらかくして、容易(カ)く削(カ)り、
又は刻(カ)み得らるるもの、色種々あり
之れを磨(カ)けば一種の麗(カ)はしき光
澤(カ)を表はす、

らふ(蠟) 跣木又は蜂(カ)などの巢(カ)より
取る、粘(カ)りくして稍や固き脂(カ)の如
きもの、火にもゆ(カ)木の名、いはた(カ)い
はたより取りし、らふ(蠟火) (カ)の略、

らふ(臘) 跣陰曆の十二月の稱、
らふ(臘) 跣十二月の三十一日、即
ち大晦日(カ)の稱、

らふ(蝨) 跣石の一種、其の質殊に
やはらかくして、容易(カ)く削(カ)り、
又は刻(カ)み得らるるもの、色種々あり
之れを磨(カ)けば一種の麗(カ)はしき光
澤(カ)を表はす、

らふ、らふせ 臘、蠟、蠟

らばち(螺髮) 跣佛教の語、らばちの訛り、
らばちの條を見られよ、

(らま)

らま(羅摩) 跣蔓草の名、かが芋(カ)の曹ト
を云ふ、

(らり)

らり(羅) 跣薄き絹さ、あやの織物
の曹ト、

(らる)

らる(被) 跣動詞に附加(カ)えて、自分
に仕向(カ)られる意を表はすに用ゆる
語、假令ば打被(カ)など、

(られ)

られ(羅列) 跣なりならぶ曹ト、取
り巻(カ)きならぶ曹ト、

(らん)

らん(蘭) 跣草の名、その葉は細く長くし

らばち、らん 被、蘭

らんし、らんせ 濫

らんじん(蘭人)蘭オランダ人のコト、
らんしや(蘭省)蘭皇后の宮のぬます宮殿のコトを申す語、
らんしや(濫騰)蘭物事の起りたる起原(コト)、物のほじまりのコト、
らんしや(濫賞)蘭矢鱈(コト)に褒美を與(カ)へるコト、
らんじゆ(爛熟)蘭十分に物の煮(ニ)ゆるコトを云ふ、
らんしゆつ(濫出)蘭無暗(コト)に金銀物品等を支出するコトを云ふ、
らんしやたい(蘭奢待)泰良(コト)の正倉院の黄熟香に 聖武天皇の付けられたる御名、
らんしんもの(亂心者)蘭さちがひ、
らんしんぞく(亂臣賊子)蘭君父を害して、國を亂す大惡無道の者、
らんず(濫)蘭動行ひがみたらなる、だらしなくなる、
らんずる(爛醉)蘭強く酒に酔ひたるコト
らんずる(濫醉)蘭無暗に酒を飲みて酔ふコトを云ふ、
らんずる(亂醉)蘭酒に酔(つ)て正體を亂すコトを云ふ、
らんせい(亂聲)蘭笛(コト)や鐘(コト)や太鼓(コト)などを共に奏するコト、

らんせ、らんざ

らんせい(亂世)蘭みだれたる世、
らんせい(濫製)蘭無暗(コト)に製造するコト(粗末(コト)なる製造、
らんせい(卵生)蘭卵子(コト)より子となるコトを云ふ、即ち胎生(コト)に對しての稱にて、生(コト)たる卵子より子にかへるを云ふ、
らんせん(亂戰)蘭敵(コト)味方(コト)共に入り亂れて戦ふコト、
らんせん(爛然)蘭あきらかなるさま
らんそ(濫訴)蘭一寸(コト)とした事をも訴(カ)ふるコト、
らんぞく(亂賊)蘭國を亂す奴(コト)、即ちむほん人のコト、
らんぞ(亂打)蘭矢鱈(コト)に打(カ)きつけらんぞ(懶惰)蘭なまける、おこたるコト、
らんたり(鑿刀)蘭刀の標(コト)に鈴(コト)の付てあるもの、
らんたふ(卵塔)蘭卒塔婆(コト)のコト(卵形をなせる墓(コト)の)、
らんたふ(蘭塔場)蘭墓所のコト、
らんちき(亂痴氣)蘭色情に關して嫉妬(コト)を生ずるコト、
らんとり(亂頭)蘭頭髪の亂れるコト、
らんどく(亂讀)蘭譯(コト)明(コト)らすに無暗に讀むコトを云ふ、

らんならんふ

らんない(欄内)蘭書物などに在る(わく)の内のコト、
らんない(亂入)蘭みだれ入る(コト)無暗に人の家へあはれ込(カ)むコト、
らんばや(蘭若)蘭佛法の語寺のコト、
らんばら(蘭房)蘭美人のねや、
らんばら(亂邦)蘭みだれて、おさまらぬらんばつ(亂髮)蘭みだれたる髪、
らんばつ(亂髮)蘭濫致(コト)に同じ、
らんばつ(濫致)蘭無暗に物事をしだすコト、假令は規則などを無暗に發布(カ)するコト、
らんばつ(濫伐)蘭山林に在る樹木を無暗に伐(カ)り採(カ)るコト、
らんばつ(濫罰)蘭無暗に人を罰(カ)するらんばつ(濫致)蘭前後の考なく無暗に金錢を費(カ)すコト、
らんび(亂飛)蘭鳥の多く集りて亂れ飛ぶらんび(爛糜)蘭みだれたるコトを云ふ語、
らんびつ(亂筆)蘭文字の亂(カ)れたるコト、即ちはしり書きのコト、
らんぶ(亂舞)蘭能樂(コト)の舞(コト)の間に舞(カ)ふ舞(コト)の、
らんぶ(濫布)蘭ポロ切のコト、
らんぶ(洋燈)蘭硝子(コト)にて重に作られたる燈火用の器具にて、釣洋燈(コト)置

洋燈等の種類あり、

らんぶしん(洋燈心)蘭洋燈に火を點(カ)す其の心、多く糸にて製す、
らんぶたい(洋燈臺)蘭置洋燈を載せて置く四本脚の臺、
らんぶつり(洋燈釣)蘭洋燈を釣し下ける針金(コト)の自在(コト)、
らんぼら(鸞鳳)蘭聖賢(コト)の人のコトを云ふ語、
らんぼら(亂暴)蘭あばれ廻るコト(無法(コト)なる荒々(コト)しき行爲(コト)を爲すコト、
らんぼく(亂撲)蘭矢鱈(コト)にはたくコト
らんぼら(亂暴者)蘭亂暴をなす人、
らんぼら(亂麻)蘭亂れたるあき(コト)轉じて物事の無茶苦茶(コト)になりて手のつけやふのなきコトを云ふ語、
らんぼ(欄間)蘭天井(コト)と鴨井さの間に板を張りて、其れに彫刻(コト)をなし又はスカシを施したるものコトを云ふ、
らんま(卵膜)蘭卵子を包んである薄きらんまん(爛漫)蘭花の盛んに咲き亂(カ)れたるコト(物事の明(コト)らかに表(カ)はれてるコト、即ちむきたし、
らんみや(亂脈)蘭無茶苦茶に亂れてるらんふ、らんみ

コト、

らんめん(卵麵)蘭蕎麥粉(コト)を玉子にて練りたる蕎麥切(コト)、
らんめん(藍面)蘭靑黒(コト)き色なせるらんもん(欄門)蘭屏(コト)の上部に穿(カ)られてある窓(コト)の、
らんよ(籃輿)蘭竹にてあみたる粗末(コト)な駕(コト)、重に山路(コト)に人を載せて運(カ)ぶに用ゆる物にて、山駕の、
らんよ(鸞輿)蘭天子の車駕、
らんよう(濫用)蘭無暗(コト)に用ゆるコト(濫(コト)なく用ゆるコト、
らんまん(欄欄)蘭さり分けて明らかなる状態を云ひ表はす語、
らんり(亂離)蘭みだれはなれるコト、
らんる(濫糶)蘭ぼる切(コト)つれ、
らんろ(鷲路)蘭天子の召せ給ふ御車(コト)のコトを申す、

り

(り)

り(里)蘭村(コト)。ささ。田舎(コト)道路の距離(コト)を計(カ)るに用ゆる語、三十六らんめ、り 里

町のコトを云ふ(轉じて道の長さのコト)昔時反別を測(カ)るに用ひし語。三十六町歩を一里と云ふ(昔時用ひし一區域の稱、人家五十戸を里と云ふ、

り(哩)蘭正しき道に適(カ)ふたるコト、即ちすちみち(コト)わり、わけがら(コト)をさむ(コト)のへるコト(纏(カ)つて肌(カ)のありさま、即ちきめ、例は木理など(人の容子。舉動(コト)の)分ち。區別(コト)の)む。たのみとす(コト)なただちの(コト)り(哩)蘭英里に云ふ、マイルのコトにて一哩は、約(カ)そ我が十四町餘にあたるり(哩)蘭海の里程をはかるに用ゆる語にて、即ち海里(コト)の、
り(狸)蘭いやしきコト(下品(コト)なる歌(コト)いやしき口調(コト)にて成り立ちたることば(コト)の)む。たよる。便(コト)とするコトを云ふ、
り(狸)蘭獸の名、たぬきのコト、
り(狸)蘭狸(コト)の本字、たぬき、
り(狸)蘭うち。な(コト)うらのコト、
り(狸)蘭なげく。いたむ。うれふる。かなしむコトを云ふ、
り(狸)蘭菓(コト)にて製したる袋の如きもの、即ちふ(コト)籠(コト)農具の名、すき及びくはの、
り 理、哩、狸、裡 一九六九

リ 鯉、利、李、梨、梨、癩、犁、癩、癩

リ(鯉) 鮒川魚の名、こひ。
リ(利) 國利益(るい)の科ト、もうけ
より生じ來たる利益、即ち利子
の争(り)ひ、又は戦争に勝つコト
の争(り)ひ、又は戦争に勝つコト
の争(り)ひ、又は戦争に勝つコト
の争(り)ひ、又は戦争に勝つコト

リ(離) 離はなるも、はなす。はなれるコト
リ(方角) 名、南(は)は、別(り)なる。なら
ぶ(り)あざやか。あきらか(り)なる。散
ら(り)る状態を云ふ。別れ行く隔(り)た
りゆく状態を云ふ。仲の悪しき状態を云ふ
リ(離) 離かき。まがき。か、い、
リ(離) 離水氣の多き酒。あじのうすき酒
の科トを云ふ、

リ(離) 離たるす。をさむる。幸福(は)は、
條理(り)正しき道(り)秤目(り)の名、一
分の十分の一(り)尺度の名、一分(り)の十
分の一(り)を云ふ、

リ 離、離、離、離、離、離、離、離、離、離、離、離

他の人と異りたる方法を立てたるコト
即ち流儀(り)品位(り)の科ト、例は上流
社會など(り)種類(り)たぐ(り)みち(り)す
ち(筋)たぐ(り)よ(り)ま(り)ま(り)か(り)
ゆ(り)く(り)走(り)る(り)名詞の下に附加(り)えて、
藝術の流儀を云ひ表はすに用ゆる語、
例は遠州流(り)さ(り)の類、

リ(隆) 隆高きコト。高くもちあがりて
あるコト。高き(り)ころ(り)盛(り)なり
おひ(り)た(り)つ(り)あ(り)つ(り)あり。あつし
リ(劉) 劉あめのかみの科トを云ふ、
リ(劉) 劉木具の名、まさかり(り)つ(り)れ
る(り)つ(り)ら(り)ぬ(り)の(り)べ(り)た(り)つ(り)陳(り)述(り)そ(り)な
殺(り)す(り)の(り)べ(り)る(り)し(り)く、

リ(流) 流うるはしきコト。ほ(り)か(り)か
る(り)コト(り)水(り)の(り)深(り)く(り)して(り)清(り)く(り)す(り)め(り)る(り)コト
風(り)の(り)爲(り)めに(り)樹(り)木(り)の(り)なり(り)ひ(り)く(り)コトを
云ふ、
リ(漉) 漉雨の盛んに降るコト。水の
ひにしたまるコト(り)つ(り)がる(り)したる(り)又
たる(り)う(り)ま(り)音(り)す(り)た(り)きの(り)コト、
リ(流) 流(り)意(り)を(り)つける(り)コト、注意(り)
する(り)の(り)川(り)沿(り)の(り)土(り)地(り)を(り)云(り)ふ、

リ 留、溜、溜、溜、溜、溜、溜、溜、溜、溜、溜、溜

リ(留) 留あまたれあまたれうけ(り)轉
じて(り)ひ(り)さ(り)し(り)麻(り)の(り)稱、
リ(柳) 柳馬の名、くり毛馬の稱、
リ(柳) 柳木の名、やなぎ、
リ(庭) 庭うづばりの科ト(り)家の(り)中央(り)
の(り)處(り)に(り)在(り)る(り)部(り)屋(り)の(り)稱、

リ(留) 留(り)意(り)を(り)つける(り)コト、注意(り)
する(り)の(り)川(り)沿(り)の(り)土(り)地(り)を(り)云(り)ふ、
リ(留) 留(り)意(り)を(り)つける(り)コト、注意(り)
する(り)の(り)川(り)沿(り)の(り)土(り)地(り)を(り)云(り)ふ、

リ(流) 流うるはしきコト。ほ(り)か(り)か
る(り)コト(り)水(り)の(り)深(り)く(り)して(り)清(り)く(り)す(り)め(り)る(り)コト
風(り)の(り)爲(り)めに(り)樹(り)木(り)の(り)なり(り)ひ(り)く(り)コトを
云ふ、

りうき、りうく

あがつてるコト、
 りうき(流儀) 區其々の流(りゅう)に依りて爲し來たりたる式の稱、
 りうきよく(流矯) 區島ながしの刑、
 りうきういも(琉球芋) 區さつまいものコト、
 りうきうちく(琉球竹) 區ゴサン竹の科ト
 りうきうおもて(琉球表) 區疊の表の一種にて、琉球より初めて産せしより、此名あり、
 りうきり(琉球餅) 區織物の名にて琉球にて作られたる(かすり)の科トを云ふ、
 りうきり(琉球菓子) 區小麥粉(りゅう)を、これに關子とし、湯煮(むて)豆粉をつけ食すもの、
 りうきりつむき(琉球袖) 區高等織物にて琉球にて産する上等のつむぎの科ト、
 りうきり(流寓) 區さまよひ歩きて、他郷にすむコトを云ふ、
 りうきり(隆遇) 區あつささりなし、あつさしてなし、
 りうきり(流火) 區流星に同じ、
 りうきり(硫化) 區化學上の語、硫黄(りゅう)と他の物と結合して、一つの物となるコトを云ふ、

りうく、りうし

りうくわい(流會) 區會合を爲すべく約束(りゅう)せしが、都合で中止せしを云ふ、
 りうくわん(流丸) 區不意(む)に飛んで來た鐵砲の丸(りゅう)即ちそれ丸(りゅう)の科ト、
 りうけい(流懸) 區行(りゅう)あたりばたりに、やすむコトを云ふ、
 りうけい(流蟹) 區飛びあるひてあるほたるの科ト、
 りうけい(流刑) 區刑法上の名、罪人を島へ流す刑罰(りゅう)を云ふ、
 りうけい(流血) 區流(りゅう)れ出る血(りゅう)流れてる血の科トを云ふ、
 りうげん(流言) 區根(りゅう)も葉もなき事柄を云ひふらすコト、
 りうこう(隆興) 區かんに發達(りゅう)して行くコトを云ふ、
 りうこう(流承) 區水銀(りゅう)の一名、
 りうさ(流砂) 區水の爲(りゅう)に、押(りゅう)なされたる砂(りゅう)の稱、
 りうさん(硫酸) 區硫黄(りゅう)と酸素(りゅう)と結び合つた劇薬(りゅう)の名、
 りうさん(流産) 區妊娠(りゅう)中の、小兒(りゅう)の死んで生れるコト、
 りうさん(流窟) 區しなながし、
 りうし(流漸) 區ながれ散(りゅう)かるコト、
 りうし(流失) 區ながれや、そや(征矢)の

りうし、りうせ

コトを云ふ、
 りうしつ(流失) 區流されて其の行き方の知れなくなりしコト、
 りうじゆ(留戍) 區兵士の其處に、さごまつてまもりあるコト、
 りうじよ(隆暑) 區夏のあつさ(りゅう)まなつのコトを云ふ、
 りうじよ(柳絮) 區柳(りゅう)の花に生ずる白きかるき絮(りゅう)の科ト、
 りうじゆち(隆昌) 區さかんなるコト。はんじやうするコトを云ふ、
 りうじゆつ(流出) 區ながれ出るコト、
 りうじよち(瘤腫) 區こぶはれ物、
 りうじよく(粒食) 區米を食ふコト、
 りうする(流水) 區流(りゅう)れ行く水。流れてる水、
 りうせい(隆盛) 區さかえさかんになるコト、
 りうせい(流星) 區飛(りゅう)ぶ星の科トにて、此れは星飛ぶにはあらず、夏(りゅう)より秋(りゅう)へかけて、空氣(りゅう)と氣候(りゅう)の關係で俄(りゅう)に大空に光を放(りゅう)つて、速かに走り消(りゅう)ゆるものを云ふ、
 りうせい(瘡贅) 區こぶの科ト、
 りうせつ(隆準) 區又た、りうじゆんを讀

む高き鼻の科トを云ふ、
 りうせつ(流説) 區根(りゅう)も葉(りゅう)もなき、出鱈目(りゅう)のうはき、
 りうせつ(流暖) 區流し込むやうに、汁(りゅう)氣の物をすするコト、
 りうせん(流箭) 區ながれ矢の科ト、
 りうせん(隆然) 區たかき状。さかんなる狀を云ひ表はす語、
 りうそち(柳箱) 區柳にて造りたる箱(りゅう)ふコト、即ち柳行李(りゅう)を云ふ、
 りうぞく(流賊) 區國(りゅう)を渡(りゅう)り歩いて悪事を爲す奴、
 りうぞく(流俗) 區世間(りゅう)のならばしコト、即ち風俗、
 りうたい(流體) 區液體(りゅう)の科トにて、水の如く流れ動く物を云ふ、
 りうたい(留滯) 區物の其の處に、さごまつてあるコトを云ふ、
 りうたい(柳黛) 區美人(りゅう)のうるはしき形(りゅう)をなせる眉(りゅう)、
 りうたい(流蕩) 區流れて影(りゅう)も形もなくなりたるコトを云ふ、
 りうたく(流瀆) 區しまながし、
 りうたく(流澤) 區天子のおめぐみの、一般に行きわたれるコト、
 りうたつふし(隆達節) 區和泉の堺の隆達

りうち、りうせ
 さ云ふ僧が、唄ひ出したる小唄の一種
 りうち(留置) 區さめなくコト、外出させぬコト、
 りうち(留置所) 區罪(りゅう)ある者を、假りに留め置く所の稱、
 りうちやち(流暢) 區文章や歌などの、語句(りゅう)が、スラスラさやさしくできてくるコト、
 りうちゆち(流注) 區ながれそそぐ、
 りうちよち(隆寵) 區一方ならぬ寵愛(りゅう)の科トを云ふ、
 りうちつち(流通) 區世間(りゅう)に通用するコト、
 りうちつち(流通) 區さふコト、
 りうちつち(流涕) 區なくコト、涙(りゅう)の流れるコトを云ふ、
 りうちつち(柳堤) 區柳のうえつられられてある堤(りゅう)の科ト、
 りうちつち(隆替) 區又た、りゆうかんと讀む、さかゆることをさうコト、
 りうちつち(流傳) 區物事の世間(りゅう)に傳はりひろまるコトを云ふ、
 りうちつち(流鑄馬) 區鎌倉時代に、始めて工夫(りゅう)せし武藝の一種、やぶさめの科ト、
 りうちつち(隆棟) 區高き棟(りゅう)の科ト、
 りうちつち(隆冬) 區冬(りゅう)のさいちゆう、即

ち陰曆十二月の科ト、
 りうちつち(流燈) 區粗末(りゅう)な燈籠(りゅう)を作り、火を點(りゅう)して、川へ流すコト、施餓鬼に行ふ、
 りうちつち(流動體) 區流れ動く凡ての物體の科トを云ふ、即ち水の如きもの、
 りうちつち(流掃) 區あまれく、つたはる。廣がりつたはるコト、
 りうちつち(流派) 區ある流儀(りゅう)より別れて別に一派を立たるもの、
 りうちつち(流馬) 區栗毛(りゅう)の馬の稱、
 りうちつち(流輩) 區同じ身分のさもだち(りゅう)さもからの科ト、
 りうちつち(流芳) 區よきほまれ、後世につたはるコトを云ふ、
 りうちつち(流亡) 區衣食を失ふて、故郷を離れ處々をさすらふコトを云ふ、
 りうちつち(柳眉) 區美人(りゅう)の眉(りゅう)の科トを云ふ、
 りうちつち(恰好) 區まさき眉、
 りうちつち(流風) 區後世までも残れる善良なる徳行の科トを云ふ、
 りうちつち(流弊) 區よろしからざるならばしコトを云ふ、
 りうちつち(流萍) 區水に漂(りゅう)まふ、うき草

りうへ、りうれ

りのコトを云ふ
 りちへち(膠鬲) 膠鬲風(カキ)のコト、
 りちべつ(流別) 膠出立(カキ)する人が殘
 れる人に別を告ぐるコト、
 りちべん(流眈) 膠ながしめ、即ち女のつ
 かふ、よこめのコト、
 りちまつ(流沫) 膠さばしり、水のあわの
 コトを云ふ、
 りちまちす(僕麻質斯) 膠筋肉(カキ)や關節
 (カキ)に、熱(カキ)を持つて痛む病氣のコト、
 りちみん(流民) 膠生れたる土地を離れ、
 他國で苦勞してゐる人民、
 りちより(流用) 膠(カキ)に合して、用ゆる
 コトを云ふ、
 りちらく(流落) 膠水の流れ落つるコト、
 人のなちぶれるコト、
 りちらん(瀏覽) 膠他人の物を見るコトを
 (カキ)尊ふて云ふ語、 「コト
 りちり(流離) 膠さまふコト、うるつく
 りちりやう(流曉) 膠音聲(カキ)又は音楽(カキ)
 などの音調の清(カキ)くはらかなる
 コト、
 りちれい(流例) 膠古(カキ)くよりのならば
 せ、即ちしきたり、
 りちれい(流隸) 膠親(カキ)しき人人に離れ
 て、他國に住む人のコト、

りうれ、りえん

りちれい(流濼) 膠雨(カキ)の水の流れ行く
 コトを云ふ、雨水のコト、
 りちれん(流連) 膠遊蕩(カキ)に耽(カキ)つて
 家へ歸らぬコトを云ふ、
 りちあち(隆旺) 膠火のもゆるごとく盛(カキ)
 じになるコト、
 りちん(利運) 膠めぐり合せのよきコト、
 よろしき運命のコト、

(りえん)

りえん(利益) 膠爲(カキ)になるコト、もう
 けのコトを云ふ、
 りえん(離垣) 膠かきまがき、
 りえん(梨園) 膠支那の玄宗皇帝の故事に
 出づ、芝居、役者仲間のコト、
 りえん(離宴) 膠別れの酒もり、送別(カキ)
 の酒宴のコトを云ふ、
 りえん(離離) 膠前後に同じ、
 りえん(離離) 膠離婦(カキ)に同じ、
 りえん(離離) 膠離婦(カキ)より妻へ差し
 に、其の證として夫(カキ)より妻へ差し
 入れる文書のコトを云ふ、

(りかが)

りか(離歌) 膠別れの時に讀みて送る和歌
 (カキ)のコトを云ふ、
 りかい(離解) 膠別々に細かく離すコト、
 りかい(離解) 膠はなし分るコト、はなれ
 て開(カキ)くコトを云ふ、
 りかい(理解) 膠物事の理屈(カキ)を、まき
 あかすコトを云ふ、
 りがい(利害) 膠りさ、がいさ。損さ徳さの
 コトを云ふ、
 りがい(利害) 膠(利害關係) 膠甲乙乙
 の間に、利害に關する事情のわかま
 れるコトを云ふ、
 りかち(履行) 膠かたの通り、又は云ひた
 る通りに、物事を行ふコトを云ふ、
 りかち(里巷) 膠ちまた、まち、
 りかち(利巧) 膠すばしつ、こきコト、巧(カキ)
 みに立ちまはるコトを云ふ、
 りかく(離隔) 膠はなしへだてるコト、は
 なれ遠(カキ)さがるコト、
 りかく(釐革) 膠物事をあらため、なまむ
 るコトを云ふ、
 りかく(理學) 膠世の中の森羅萬象(カキ)
 の物の理屈を、研究(カキ)する學問、特
 に物理學のコト、哲學のコト、
 りかくし(理學士) 膠理科大學を卒業せる
 人の受くる學位名、

りか、りかく

りかくしつ(離居室) 膠はなれへたりて
 ある室(カキ)のコトを云ふ、
 りかくしや(理學者) 膠理學に委しく達し
 てる學者のコトを云ふ、
 りかくはかせ(理學博士) 膠理學科に秀
 (カキ)でたる人に、官府より授けらる
 最上の學位の稱、
 りかた(利方) 膠利益になる方(カキ)、得にな
 る方のコトを云ふ、
 りかのかんむり(李下冠) 膠李(カキ)の樹の
 下で冠を正してれば幸を取りはせぬか
 さ疑(カキ)はる、さ云ふ意より出で、
 疑(カキ)のかゝる行為に就て云ふ語、
 りかふ(離合) 膠はなる、コトさ、合(カキ)コ
 トを云ふ、
 りかん(離間) 膠間(カキ)をはなす、仲をさ
 るさ云ふ意にて、他人の交(カキ)を横合
 (カキ)よりさくコトを云ふ、
 りかん(里閉) 膠村里(カキ)などの入口に設
 けられてある門の稱、
 りかんさく(離間策) 膠双方の仲をさく爲
 めの手段(カキ)方法、

(りきぎ)

りきぎ(利器) 膠すぐれたる武器、物の役に
 りかく、りき

立つ才智のコト、
 思ふまゝに爲し能ふ權勢(カキ)のコトを
 云ふ、
 りき(理氣) 膠物事の道理さ、物事の現象
 (カキ)のコトを云ふ、
 りきち(利久) 膠利久酒の略、
 りきち(犁牛) 膠まだらなる牛の稱、
 りきちしゆ(利久酒) 膠アルコホルに砂糖
 を混(カキ)じ、香氣を施したる一種の酒、
 りきし(力士) 膠すまう取のコト、力量の
 すぐれて強き人、佛敎の語、寺の門に
 立てられてある、力つよき形を爲せる
 石像のコトを云ふ、
 りきしや(力者) 膠力のつよき人、
 りきじん(力人) 膠力のつよき人、すまう
 取りのコト、
 りきむ(力) 膠働えらばる。力のある容子
 なしめす、
 りきゆり(離宮) 膠天子の遊びに行かせ給
 ふ宮殿、即ち天子の御別荘の御事を申
 す、
 りきよ(離居) 膠はなればなれになつて、
 住(カキ)ひ居るコトを云ふ、
 りきよふち(鯉魚風) 膠陰曆の九月に吹く
 風のコトを云ふ語、
 りきりやう(力量) 膠力のある度合(カキ)、

りき、りきり

りく(六) 膠三三三の数を合したる和の
 稱、即ちむつ、むたび、
 りく(陸) 膠をかぐが、地面、六に通じ用
 ゆ(カキ)はれる、なごる、
 りく(陸) 膠草の名、稻(カキ)の種類にて早稲
 (カキ)のコトを云ふ、
 りく(戮) 膠死罪に行ふコト、殺(カキ)す、屠
 (カキ)る、恥をかゝす。はづかしむる、死
 骸を葬らすに置く、即ちさらす、
 りく(勤) 膠力を一にするコト、即ち力を
 合す、互ひに力をそへあふ、
 りく(後) 膠(カキ)に同じ、
 りくあひ(陸揚) 膠船より貨物を陸上へ揚
 げるコトを云ふ、
 りくあひば(陸上揚) 膠海岸。河岸等に設
 けり、りくあ、六、陸、戮、一九七五

りくけ、りくけ

りくろん(陸運) 陸揚をなす場所の稱、陸上にて荷物を持ち運ぶコトを云ふ、即ち汽車、電車、車馬等にて貨物を運搬するコトの類を云ふ。
りくかう(陸行) 陸上を歩み行くコト、りくがふ(六合) 陸天地四方の稱、即ち世の中のコトを云ふ。
りくき(六氣) 陸六つの氣を云ふコトにて陸陽風雨晦明の稱。
りくきち(六音) 陸りくちの音便、りくきよく(六極) 陸六合(六つ)に同じ、りくくわ(六花) 陸雪の異様、りくじん(六軍) 陸天子の自から統御(統制)し給ふ軍勢のコトを申す、りくじん(陸軍) 陸上の戦争、又は陸上の防禦を爲す軍隊の總稱、りくめんしや(陸軍省) 陸軍に關する總ての事務を取り扱ふ、中央官省の名、りくじんないじん(陸軍大臣) 陸軍省の最長官の稱、りくけい(六經) 陸支那の六つの經書のコト、即ち詩經、書經、易經、禮記、春秋、樂記の稱、りくげい(六藝) 陸支那の周の世に於て、定めたる六つの藝術の稱にて、禮(レ)樂

りくけ、りくせ

りくけい(六禮) 陸人生の最も大切な六つの禮法のコト、即ち冠(冠)、婚(婚)、葬(葬)、祭(祭)、鄉飲酒(郷飲酒)、相見(相見)の稱を云ふ、りくろ(陸路) 陸路に對しての稱にて、陸上の道、りくわい(理會) 陸物の道理を合點(合點)するコトをささるコト、りくわい(理外) 陸道理のほか、りめん(離群) 陸其の群(群)より分(分)れる即ち仲間をはげれるコトを云ふ、りめんさつきよ(離群索居) 陸多くの友人の仲間(仲間)を離れて、さびしく暮すコトを云ふ、(りけげ)りけん(利劍) 陸するどきつるぎ、りげん(假語) 陸村里(村里)などにて行はるる、りげん(假言) 陸さび(さび)、りくせ(利己) 陸我れの勝手な事をして、利益を得むと計(計)るコト、てまへがつ

りくせ、りくつ

りくせき(六尺孤) 陸十四歳に爲りしみなしこのコトを云ふ、りくぞく(陸種) 陸つづくコト、引きつひてあるコトを云ふ、りくたう(陸稻) 陸稲(稲)に植ゆる稻、即ちおかのコトを云ふ、りくたう(六韜) 陸支那の周の代に、大公望が選定せり云ふ、六篇の兵書(兵書)の稱、即ち文韜(文韜)、武韜(武韜)、虎韜(虎韜)、龍韜(龍韜)、豹韜(豹韜)、犬韜(犬韜)の稱、りくたう(陸島) 陸地理學の語にて、元(元)大陸でありしものが、長き年月の間に陷落等に依りて離れて島となりたるものを云ふ、我が帝國の如きは即ち陸島に屬す、りくち(陸地) 陸をか、が、地面、りくちく(六畜) 陸六種の家畜の稱、即ち牛、馬、羊、豕、鶏の稱を云ふ、りくちん(陸沈) 陸世の中に用ひられぬコト、おさらふるコトを云ふ、りくちゆう(戮誅) 陸罪狀を調べて死刑に處するコトを云ふ、りくちよく(戮辱) 陸恥をか、すコト、はづかしむるコトを云ふ、りくつ(理窟) 陸道理、りくわけ、りくづ(陸國) 陸陸地の高低、その他の模

りくつ、りくつ

りくつせめ(理窟) 陸道理(理窟)にして、恐れ入らせるコトを云ふ、りくでん(陸田) 陸はたはた、りくとく(六德) 陸六つの徳、即ち聖(聖)、忠(忠)、仁(仁)、義(義)、智(智)、和(和)の稱、婦人の六徳のコトを云ふ、即ち柔順(柔順)、恭謹(恭謹)、儉約(儉約)、清潔(清潔)、勤勞(勤勞)、不妬(不妬)の稱、りくなんふち(陸軟風) 陸地理學の語、海岸に於て、夜間に陸上より海面上へ吹き行くツヨ吹く風の稱、りくへい(陸兵) 陸陸上にて戦ひ、又は陸上を防ぎ守る兵士の稱、りくむ(六夢) 陸六つの夢、即ちよき夢、怖(怖)るしき夢、悲(悲)しき夢、喜(喜)しき夢、思ふ事の夢、うつ、の夢の六つコトを云ふ、りくやう(六陽) 陸陰曆の四月の稱、りくり(陸離) 陸ピカピカと光りきらめきて美しきコトを云ふ、りくりゆう(陸梁) 陸はれまはるコト、飛びまはるコト、りくわく(陸光) 陸りくわくを云ふ、りくりよく(戮力) 陸力を合して物事をなすコトを云ふ、膠力(膠力)、りくつ、りくり

りくれ、りい

りくれい(六禮) 陸人生の最も大切な六つの禮法のコト、即ち冠(冠)、婚(婚)、葬(葬)、祭(祭)、鄉飲酒(郷飲酒)、相見(相見)の稱を云ふ、りくろ(陸路) 陸路に對しての稱にて、陸上の道、りくわい(理會) 陸物の道理を合點(合點)するコトをささるコト、りくわい(理外) 陸道理のほか、りめん(離群) 陸其の群(群)より分(分)れる即ち仲間をはげれるコトを云ふ、りめんさつきよ(離群索居) 陸多くの友人の仲間(仲間)を離れて、さびしく暮すコトを云ふ、(りけげ)りけん(利劍) 陸するどきつるぎ、りげん(假語) 陸村里(村里)などにて行はるる、りげん(假言) 陸さび(さび)、りくせ(利己) 陸我れの勝手な事をして、利益を得むと計(計)るコト、てまへがつ

りくせ、りくつ

りくせき(六尺孤) 陸十四歳に爲りしみなしこのコトを云ふ、りくぞく(陸種) 陸つづくコト、引きつひてあるコトを云ふ、りくたう(陸稻) 陸稲(稲)に植ゆる稻、即ちおかのコトを云ふ、りくたう(六韜) 陸支那の周の代に、大公望が選定せり云ふ、六篇の兵書(兵書)の稱、即ち文韜(文韜)、武韜(武韜)、虎韜(虎韜)、龍韜(龍韜)、豹韜(豹韜)、犬韜(犬韜)の稱、りくたう(陸島) 陸地理學の語にて、元(元)大陸でありしものが、長き年月の間に陷落等に依りて離れて島となりたるものを云ふ、我が帝國の如きは即ち陸島に屬す、りくち(陸地) 陸をか、が、地面、りくちく(六畜) 陸六種の家畜の稱、即ち牛、馬、羊、豕、鶏の稱を云ふ、りくちん(陸沈) 陸世の中に用ひられぬコト、おさらふるコトを云ふ、りくちゆう(戮誅) 陸罪狀を調べて死刑に處するコトを云ふ、りくちよく(戮辱) 陸恥をか、すコト、はづかしむるコトを云ふ、りくつ(理窟) 陸道理、りくわけ、りくづ(陸國) 陸陸地の高低、その他の模

りさい、りし

益に爲るやうに使ふコト ● 金錢を取締
(シキ)るコトを云ふ、
りざいか(理財家) 圖理財の術に達して
人のコトを云ふ、
りざい(理財) 圖財物を有利に取り
扱ふ道を、研究する學問のコトにて、
經濟學のコトを云ふ、
りざり(利爪) 圖するごきつめのコト、
りざり(理想) 圖自己の考に依りて、斯(カ)
くありたしと望む目的、人の斯(カ)あら
ば完全無缺(カクセツ)なりと、堅く信じ認
むる觀念(カニシ)
りざつ(利札) 圖利ふたの科ト、即ち公債
證書又は債券などの、利子を受け取る
時に、切り離して渡す札の稱、
りざん(離散) 圖はなればなれになるコト

(りこせ)

りし、りしや
利益なるに依り、金錢なれば金利と云
ひ土地物件なれば貸貸利と云ふが如し
りじ(離貳) 圖はなれて二つになること云ふ
意より轉じて、はなれそむくコトを云
ふ、
りじ(俚耳) 圖俗人(カク)の耳(カ)轉じて
俗人が聞くこと云ふコトを云ふ、
りじ(理事) 圖總て事務を執り行ふ人のコ
トを云ふ ● 法律の規定に依りて、設立
したる會社、商社、財團等の事務を、共
の財團等を代表して執る人のコトを云
ふ ● 官名の一つ、即ち陸軍の軍法會議
に參與(カク)する、高等文官の名にて、
豫審判事に等(カ)しき事務を執る職務
の人、
りしろ(離愁) 圖互ひに離(カ)れ別(カ)る、
時のかなしみのコトを云ふ、
りしつ(利疾) 圖するごきコト。すばしつ
こきコトを云ふ、
りしつ(痢疾) 圖腹(カ)の下の病氣のコト
● 特に赤痢のコトを云ふ、
りしふ(俚習) 圖いやしきならばせの科ト
りしやう(利生) 圖佛教の語にして、佛が
一般の人々に、萬遍(カク)なく興へらる
、利益のコト即ちりやう、
りしやう(離墻) 圖かき。まがきの科ト、

りしや、りすう 利

りしやう(離酌) 圖別れの酒盛(カク) ● 即ち
離杯(カク)の科トを云ふ、
りじゆん(利潤) 圖利益。もうけ。利子のコ
トを云ふ、
りじん(吏人) 圖やくにん。官吏、
りじん(里人) 圖村里(カク)に住居る人の
コトを云ふ、都人に對しての稱、
りじん(俚人) 圖俗人(カク)の科ト、
りじん(利及) 圖善く切れる及(カク)する
ごき切物(カク)の科トを云ふ

りす(栗鼠) 圖獸の名、鼠の種類にして、形
は鼠と異ならざるも、其れよりは大き
く、常に樹上に住ひて、樹より樹に巧み
に渡りて、木の果(カク)を食ひつゝ、生活せ
るもの、又たの名をきれづみと云ふ、
りす(利) 圖利益を得るやうにする。も
うけさせる ● 爲(カク)になるやうにする
 ● よくなるやうにさせる、
りす(利水) 圖水の流れをよくさせるコ
ト。水運の便をよくなす科ト、
りす(里數) 圖甲の地より乙の地までの
距離(カク)を數(カク)ふるに用ゆる語、即ち
みちのりの科トを云ふ、

りせい、りそり

りせい(里正) 圖村のをさ。村長、
りせい(理性) 圖其の人に具(カ)はれる理
解力(カク) ● 即ち智慧(カク)のはたらきの
コト、
りせい(釐正) 圖をさめ正(カク)す科トを云
りせき(履島) 圖沓(カク)の科トを云ふ、
りせん(隱踐) 圖ふみ行ふ。約束(カク)を守
るコトを云ふ、

(りそぞ)

(りただ)
りたち(吏黨) 圖官吏の仲間(カク)、官吏の
みかたの科トを云ふ、
りたち(利刀) 圖よくきれる刀、
りたち(利導) 圖人をよき方へみちびくコ
りたち(里道) 圖村方の道路 ● 田舎の通
路(カク)、
りたか(利澤) 圖利益にうるほふ、もうか
るコトを云ふ、
りたつ(利達) 圖よき方に達するご云ふ意
にて、即ち出世(カク)する科ト、立身す
るコトを云ふ、
りたん(履端) 圖新年の科トを云ふ、

(りちぢ)
りち(律) 圖りつと同じ、
りち(利地) 圖もうけたる土地 ● 働(カク)ら
きて得たる土地 ● 物事をなすに、便利
(カク)のよるしき土地 ● 物事をなすに、
便利のよるしき位置(カク)の稱、
りち(吏治) 圖官吏の事務を執(カク)る其の
容子。官吏の治(カク)めぶり、
りち(律義) 圖能く義理を守る科ト。心
りたう、りちき 律

りちき、りつ 律、栗

りつ(律) 圖音樂の調子(カク) ● 即ち十二律
の科ト ● 音樂の調子を合すに用ゆる笛
(カク) ● 即ち律管の科トを云ふ ● 法律。お
きて ● 軍法(カク) ● 刑法の科ト ● 漢詩の
一體にて、八句より成り立てるもの、
中の、第三句と第四句、及び第五句と第
六句の對句(カク)を爲せるものを云ふ、
即ち律詩(カク) ● 佛教の語にして、行爲
の修養と精神の修養と、言語の修養を
なして過失(カク)なきやうになし行くコ
トを云ふ ● 修(カク)む。正(カク)す科ト。手本
さすのつとまるコト ● 程度(カク)。ほどあ
ひの科ト ● のぶる。云ひたつる科トを
云ふ、
りつ(蓍) 圖雜草(カク)の生(カク)ひ茂(カク)れる
ところ、即ちくさむらの科ト、
りつ(栗) 圖木の名、くりの科ト ● おごそ
かなるコト。謹直(カク)なる科ト ● 堅
りちき、りつ 律、栗 一九七九

りゅう

りゅう(龍宮) 龍宮 龍海に在る龍王の居る云ふ場所の稱にて、即ちわたつみの宮。
 りゅう(龍骨車) 龍骨車 龍骨の骨を以て長方形の箱の内、押し器械を據へつけ、上に長き横木を渡し、其の左の端の水を吹き上げさせる仕掛になれるもの、即ち水くふう、又龍吐水(龍水)の稱も云ふ。
 りゅうこつ(龍骨) 龍骨 龍骨の骨を以て前世紀に、棲息しゐたる大獸の骨。西洋製の船の一番底に、縦に通ぶつて梁の木材の稱。まきりかはらのことを云ふ。
 りゅうこつしや(龍骨車) 龍骨車 龍骨の骨を以て、田へ水を注ぐ可く爲めに用ゆる足踏みの車の稱。
 りゅうざう(龍象) 龍佛の語、智識德行共に秀でたる、僧侶の稱。こつを云ふ語。
 りゅうじん(龍神) 龍神 龍王、即ち雨をつかさどると云ふ神の稱。わたつみ、
 りゅうせんから(龍涎香) 龍涎香 龍の香料の名、抹りゅう

りゅう

りゅう(龍足) 龍足 龍の足の紋形が一文銭に似て、より銭の稱を云ふ。
 りゅうたち(龍膽) 龍胆 龍胆の名にて、俗に云ふりんどうの科。
 りゅうたちこん(龍膽根) 龍胆根 龍胆の根を乾かししたる物にて、苦き薬品なり。
 りゅうちやちもめん(龍場木綿) 龍場木綿 龍場町の産す木綿にて酒、醤油、の綾袋に製す。
 りゅうちやちもめん(龍場木綿) 龍場木綿 龍場町の産す木綿にて酒、醤油、の綾袋に製す。
 りゅうちやちもめん(龍場木綿) 龍場木綿 龍場町の産す木綿にて酒、醤油、の綾袋に製す。
 りゅうちやちもめん(龍場木綿) 龍場木綿 龍場町の産す木綿にて酒、醤油、の綾袋に製す。

りゅう、りよ、呂、隈、侶 一九八八

りゅう、りよ、呂、隈、侶 一九八八
 にして終りの哀(りよ)ゆるを云ふ、即ち不成功の意味。
 りゅうなり(龍腦) 龍腦 龍腦の名にて、樟腦(りよ)を更に製したるものを云ふ。
 りゅうなりちん(龍腦丁機) 龍腦丁機 龍腦をアルコールにて蒸したるもの、りよちめ(龍馬)の高さが八尺以上ある、よき馬を云ふ。
 りゅうちん(龍紋) 龍紋 龍紋の一種にして地質等に厚く、其の織目(りよ)を斜(りよ)にしたる光澤(りよ)ある白絹(りよ)の稱。
 りゅうちり(龍王) 龍王 龍王の稱。

(りよ)

りよ(呂) 呂 呂の調子、即ち陰の音(りよ)の科。脊骨(りよ)の科。連(りよ)なるつらね(りよ)長(りよ)あり、長(りよ)あり、りよ(欄) 欄 欄の名、しゅう(りよ)りよ(欄)の科を云ふ。
 りよ(侶) 侶 侶の仲間、仲間(りよ)たる仲間(りよ)とす。友達とす。つれ(りよ)ゆ。ともなふ。
 りよ(閭) 閭 村里(りよ)の入口(りよ)に在る門の稱。轉じて村里(りよ)の科を云ふ。
 りよ(鋸) 鋸 鋸器具の名、やすりの科。

りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。

りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。
 りよ(慮) 慮 慮ふかき考へ、即ちおもんばかり。おもんばかる(りよ)のり。

の語に冠(りよ)らす語(りよ)一生に傑出(りよ)せる大英雄の科を云ふ。

の語に冠(りよ)らす語(りよ)一生に傑出(りよ)せる大英雄の科を云ふ。
 りよ(聖) 聖 聖の土地の小高き處、即ちをか(りよ)土を盛りたる處、即ち(りよ)墓(りよ)田畑(りよ)のぐる、即ちあぜの科。
 りよ(慶) 慶 慶の土地の小高き處、即ちをか(りよ)土を盛りたる處、即ち(りよ)墓(りよ)田畑(りよ)のぐる、即ちあぜの科。
 りよ(慶) 慶 慶の土地の小高き處、即ちをか(りよ)土を盛りたる處、即ち(りよ)墓(りよ)田畑(りよ)のぐる、即ちあぜの科。
 りよ(慶) 慶 慶の土地の小高き處、即ちをか(りよ)土を盛りたる處、即ち(りよ)墓(りよ)田畑(りよ)のぐる、即ちあぜの科。

尖(りよ)れる角(りよ)の科を云ふ。

尖(りよ)れる角(りよ)の科を云ふ。
 りよ(利) 利 利の科、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの。
 りよ(利) 利 利の科、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの。
 りよ(利) 利 利の科、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの。
 りよ(利) 利 利の科、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの、即ち(りよ)用(りよ)益(りよ)なるもの。

りよう

こえるコト、
 りよちかく(稜角) 図かご。まがりかごの
 コトを云ふ。
 りよちかん(龍顔) 図天子の御顔のコトを
 申する語なり。
 りよちきん(綾錦) 図あや織さなしたる、
 にしきのコトを云ふ。
 りよちく(龍駒) 図非常にすぐれたる名馬
 ⑤轉じて才能の衆に秀でたる青年のコ
 トを云ふ。
 りよちくわ(菱花) 図ひしの花又た金屬製
 のかがみのコトを云ふ。
 りよちこ(龍虎) 図たつこ、こら、
 りよちこ(陵戸) 図みささきの門⑤轉じて
 みささきを番せる人、
 りよちこく(陵谷) 図をかさ、たに、
 りよちこん(龍袞) 図天子の召させ給ふ御
 衣服のコトを云ふ。
 りよちしい(龍子衣) 図蛇(へ)のぬけがら、
 蛇のはかまのコト、
 りよちしち(龍舟) 図天子のおりあそば
 されてゐる舟のコト、
 りよちしつ(凌室) 図ひむる、即ち水を入
 れるこころ、
 りよちしん(陵寢) 図天皇の御墓(か)即ち
 みささきのコト

りよち

りよちしん(凌長) 図夜のあげがたのコト
 りよちしやち(龍章) 図龍(り)の模様のコ
 トを云ふ。
 りよちしゆん(龍駿) 図龍駒(り)に同じ、
 其の條を見られよ。
 りよちしよち(龍躡) 図年老(か)て病の爲
 (か)にばけたるコトを云ふ。
 りよちじやうち(龍驥虎視) 図偉大なる
 勢力のあるコトを云ふ語、
 りよちせん(龍鬣) 図天子の御ひげ、
 りよちそん(龍孫) 図たけのこ、荷(か)の異稱
 りよちたい(陵替) 図段々とおそろへてす
 たれ行くコトを云ふ、
 りよちたい(龍體) 図天子の御身體(り)を
 申す語なり、
 りよちらん(壘斷) 図ろうだんを讀む、利
 益を獨り占(か)にするコト、
 りよちち(陵遲) 図たんだんとおそろえる
 コトを云ふ、
 りよちてい(龍蹄) 図天子の御乗馬のコト
 を申す語なり、
 りよちとち(龍騰) 図龍(り)が天上するこ
 云ふ意より轉じて、勢力威權の盛んな
 るコトを云ふ、
 りよちとち(龍頭蛇尾) 図物事の始め
 が盛んにして、末のおそろへるコトを

りよう、りよち

云ふ語、
 りよちば(凌駕) 図のしりしのご、
 りよちはん(龍幡) 図たつの天上せんさす
 る状を記せし一種のはた、
 りよちはん(陵犯) 図しのぎをかす、
 りよちばんこさよ(龍蟠虎踞) 図要害堅固
 なる土地にして、容易に侵入し能はざ
 るさまを云ふ、
 りよちひつ(龍蹕) 図天子の御車のコトを
 申す語(龍駕)に同じ、
 りよちぶ(陵侮) 図しのぎあなざる、
 りよちべつ(陵蔑) 図人をこのきてあなご
 るコトを云ふ、
 りよちぼ(陵暴) 図天皇のみささき、
 りよちぼち(陵暴) 図人をしのき苦(り)し
 むるコトを云ふ、
 りよちまちす(僕麻質斯) 図筋肉(り)や關
 節(り)に熱を持つて、痛む病氣、
 りよちら(綾羅) 図あや絹さ、うすききぬ
 のコト、
 りよちりよち(稜稜) 圖こつこつさかざば
 つてる状を云ふ⑤物事の盛んなるさま
 を云ふ語、
 りよちれん(凌轢) 図物をふみつけにする
 轉じて人を馬鹿にするコト、
 りよちるん(閭閻) 図むらささのコト、

りよち

りよち(閭巷) 図まうちまた、
 りよち(旅行) 図たびへゆく⑤たびする
 りよち(旅客) 図たび人⑤たびをなしてゐる
 人、
 りよちけん(旅行券) 図旅(り)する事を
 許(か)されたる證書(り)、
 りよちめんじやち(旅行免狀) 図外國(り)
 へ行くコトを許されたる證書、
 りよち(利慾) 図慾(り)のふかきコト⑤物
 をほしがらるコト、
 りよち(綠) 図色の名、みどり⑤みどり色
 を爲せる衣服の稱⑤穀物の一種、かり
 やすのコトを云ふ、
 りよち(碌) 図あなき色⑤石の青き色を呈
 せるコトを云ふ⑤少なきさま、なすべ
 き事(り)なきさま⑤人に従ひ行く狀を表
 ばす語、
 りよち(録) 図かき記すコト、寫(り)すコト
 ⑤書き記したる物、即ち記録(り)⑤支
 配(り)す、
 りよち(録) 図書籍のコト⑤特に未來記の
 コトを云ふ⑤本箱(り)、
 りよち(醇) 図香氣(り)よくして濃き純良
 なる酒(り)のコトを云ふ、
 りよち(力) 図ちから⑤いきほひ⑤てから

りよち

いさほし(筋肉) 図(り)のこつ(り)勵(り)む。
 つさめる、骨折(り)仕事に従事するコ
 ト⑤甚だしきコト、
 りよち(切) 図あまりたる數(り)⑤つさめ
 げむコトを云ふ、
 りよち(岩) 図(り)しき山脈のコト⑤山
 や崖(り)の險(り)しく登(り)ゆる狀を云
 ふ、
 りよちいん(綠蔭) 図おいしげりたる木蔭
 (り)のこつ、
 りよち(旅寓) 図たびへ出てすまつてる
 りよちえふ(綠葉) 図みどりの葉、即ちあ
 らの葉のコトを云ふ、
 りよちえき(力役) 図ちからわざ⑤あらば
 たらきのコト、
 りよち(力行) 図つさめ行ふ、はげみ
 行ふコトを云ふ、
 りよち(力耕) 図地面をたがやすコト
 りよち(力攻) 図力を盡して攻(り)る
 コトを云ふ、
 りよち(力學) 図學問に精(り)を出し
 てはげむコト、
 りよちかん(力諫) 図つさめていさめるコ
 りよちがん(綠眼) 図みどり色を呈せる眼
 玉(り)あなきさま、
 りよち(力求) 図むりにもさむるコト

りよち

⑤むりだのみのコト、
 りよち(力担) 図つさめてふせぐコト
 りよち(力業) 図ちからわざ、あらば
 たらきコト、
 りよち(力工) 図ちからわざ⑤あらば
 たらきコト、
 りよち(綠草) 図あなをなま生(り)へ
 しげつてる草(り)のこつ、
 りよち(力争) 図一心にあらそふコト
 りよち(力作) 図つさめばたらき、あ
 らしごさのこつ、
 りよち(力守) 図いつしやうけんめい
 になつてまもるコト、
 りよち(綠樹) 図葉のあなをなま生
 (り)へ、しげつてる樹(り)、
 りよち(綠車) 図支那の故事にて、天
 子の御孫(り)の召させらる車の稱、
 りよち(綠頤) 図水をまわさぬ純粋(り)
 (り)の酒のこつ、
 りよち(力人) 図力(り)のすぐれてあ
 る人のこつ、
 りよち(力食) 図はたらきて食(り)
 りよち(綠色) 図みどりいろ、
 りよち(綠水) 図あなをみきつてゐる水
 りよち(力請) 図むりにたのみれがふ
 コトを云ふ、

りよく

りよくせん(力戦) 図力(リキ)のつづく限り
 たたかふコト、
 りよくたい(綠苔) 図あをあなして若
 (コ)のゴト、
 りよくた(力闘) 図ちからをだしてた
 かふ(コ)ふるひたかふ、
 りよくち(綠竹) 図勢(リキ)のよろしきあ
 を竹のゴトを云ふ、
 りよくち(綠茶) 図紅茶(カキ)に對しての
 稱にて、普通茶(カキ)の稱、
 りよくち(綠地錦) 図綠(リキ)の地に、
 美しき模様(カキ)を表はした錦、
 りよくて(力擲) 図力をこめてなぐりつ
 けるコトを云ふ、
 りよくてん(綠天) 図青天(カキ)のゴト、
 芭蕉(カキ)の異名、
 りよくはつ(綠髮) 図みじりの黒き髮のゴ
 トを云ふ、
 りよくはん(綠鬢) 図ローハのゴト、
 りよくひん(綠鬚) 図青々(カキ)してうるき
 草のゴトを云ふ、
 りよくち(綠毛龜) 図龜(カキ)の一種に
 て、甲(カキ)に毛(カキ)の生じてる物なり、
 りよくもんじ(綠紋紙) 図綠(リキ)のあ
 りのある紙にて琉球の産物、
 りよくや(綠楊) 図青葉(カキ)のしげつて

りよく、りよち

あるやなぎ(柳)のゴト、
 りよくりん(綠林) 図あなき林、即ち青葉
 のしげつてる林(カキ)の群(カキ)のゴ
 トを云ふ故事、 「ひのゴト
 りよくわい(旅懷) 図たびさきにてのおも
 りよぞわい(慮外) 図思ひの外(カキ)なるコ
 ト(カキ)しつれい(失禮) 自しつれい、
 りよくわく(慮獲) 図さりこにする、いけ
 ざりにするコト、
 りよくわん(旅館) 図やざや、
 りよけん(旅券) 図たびするコトを許(カキ)
 されたる書附(カキ)、 「のゴト
 りよざち(旅裝) 図たびだちをするしたく
 りよじ(旅次) 図たび先にて泊(カキ)るコト、
 りよしち(慮囚) 図生(カキ)ざりにされたる
 人、即ちさりこのコトを云ふ、
 りよしち(旅愁) 図たびのうれひ、
 りよじん(旅人) 図たびびさ、
 りよじや(旅情) 図道中の心持のゴト、
 旅のをもひ、
 りよしち(旅宿) 図たびのやざり、はた
 ざのゴトを云ふ、
 りよざん(旅團) 図軍隊編成の名にて、二
 個聯隊より成るもの、
 りよちゆ(旅中) 図道中(カキ)たびへ出

りよて、りりつ

一九九二

てる中のゴトを云ふ、
 りよてい(旅程) 図旅のみちのり、
 りよてん(旅店) 図やざや、
 りよはく(旅泊) 図たびでさまるコト、
 りよはん(同伴) 図ともなかも、
 りよひ(旅費) 図道中の入用、
 りよち(旅用) 図たびのいりよう、
 りより(團里) 図村里(カキ)いなか、
 りよりや(慮探) 図人をながかして物を
 かすめざるコト、
 りよりよく(膂力) 図絶大なる力(カキ)、

(りら)

りらち(聲老) 図さしより、老人、
 りらく(里落) 図むらさき、村里、
 りらく(籬落) 図かきまがき、
 りり(凜凜) 図いさましくあり、勢ひつよ
 くあり、威光そなはれるなり、
 りり(離離) 圖仲のあしきさま、物のちら
 ばれる状(カキ)ちりちりばらばらにな
 れる状を云ひ表はす語、
 りりつ(利率) 図元金(カキ)に對する利息の

(りり)

りり(淋) 図さびしきコト、陰氣(カキ)なる
 コト(カキ)し。さむくあり、
 りり(淋) 図なが雨のゴト、漉(カキ)て水の如き
 もの、ダラダラ(カキ)たる状を云ふ
 ①水の流れ入るコト、即ちそまぐ、
 りり(癡) 図病氣の名、りんびやうのゴト、
 りり(癡) 図なぐり殺すコト、はたぐ、
 りり(輪) 図車のわ、車(カキ)總て圓(カキ)く平
 (カキ)に圓(カキ)みたる事を云ふ、④めぐる。
 曲(カキ)む、⑤花の數、又は車の數をかぞふ
 るに用ゆる語、
 りり(倫) 図道理、すぢみち、即ち義(カキ)①
 踏(カキ)み守るべき正しき道(カキ)ともがら。
 たぐる、②のり。てほん、③つれ、④比(カキ)べ
 る。えりわける、
 りり(綸) 図魚を釣(カキ)に用ゆる糸、①(カキ)
 に付けある紐(カキ)、即ち印綬(カキ)②太く
 して長き綸(カキ)③琴糸(カキ)のゴト、④さ
 のへおさむるすぶる。⑤糸の如き物
 にて、グルグル(カキ)巻きつゝむコトを云
 ふ、
 りり(淪) 図水に没(カキ)むコト、又はしづま
 るコト、①細かき波の稱、即ちさなみ、
 りり(吝) 図無暗(カキ)に惜(カキ)むコト、しづ
 きコト、しはきコト、即ちやぶさか、
 りり(恪) 図音と同意義なり、

りん 淋、癡、輪、倫、恪 一九九三

歩合(ヒ)のゴトを云ふ、

(りれ)

りれき(履歷) 図其の人が是れまで爲し來
 り、又は修め來りし事柄のゴト、①物事
 のいはれいれんのゴト、
 りれきしよ(履歷書) 図履歷を委しく認め
 たる文書のゴトを云ふ、

(りろ)

りろん(理論) 図物事のわけがらを調べ論
 するコト、又は物事の理由を委しく調
 べ論じたるもの、
 (りん)
 りん(隣) 図ほすばうるのゴト、即ちおに
 火きつれ火のゴト、
 りん(隣) 図さなり。さなる。そば、ちかく
 ①たすく。教へる。力を添ゆ、②水の渦
 (カキ)を巻きつゝ流れ行くさまを云ふ、③
 物の動くさまを云ふ、
 りん(鄰) 図前條に同じ、
 りん(隣) 図瞳孔(カキ)のゴト、①眼(カキ)む、目

りれき、りん 隣、隣、鄰、隣

りん 隣、隣、隣、隣、隣

を怒らす、①美しき模様(カキ)の状を云ひ
 表はす語、
 りん(隣) 図美しき光澤(カキ)のある玉、又は
 玉の美しき光のゴトを云ふ、②轉じて美
 しき模様のある状を云ふ、
 りん(隣) 図うるこ。こけら、③轉じて魚類
 のゴトを云ふ、
 りん(隣) 図うすき石のゴトを云ふ、④石が
 こすれて薄(カキ)くなるコト、⑤岩石の
 間を水が勢ひよく流れゆく状を云ふ、
 りん(隣) 図山や崖(カキ)のけはしく、そびえ
 立てるを云ふ、⑥けはしき崖の重(カキ)な
 り合へる山のゴトを云ふ、
 りん(隣) 図獸の名、貌(カキ)麋(カキ)に似て
 丈(カキ)頗る高く、體亦た大きく、頭に肉
 角(カキ)あり、尾は長く牛の其れの如く、
 足には馬の如く蹄(カキ)ありて、全身は
 黃褐色に黒き斑(カキ)ある美しき毛を以
 て覆はるもの、即ちきりんのゴト、
 りん(隣) 図樹木の集りて並び生じてる處
 即ちはやし、⑦總て物の集りて一團(カキ)
 ひとなつてるコトを云ふ、⑧盛人なるさ
 ま、⑨樹木のゴトを云ふ、
 りん(隣) 図三日以上つゞきて止まずに降
 れる雨、即ちなが雨、⑩幾日も續きて雨
 の降れる状を云ふ語、

りん 隣、隣、隣、隣、隣

りんし

ふ①一時的、まにあはせ②不意だしの意、
りんしつ(隣室)隣室なりざしき、
りんしつ(痲疾)痲病氣の名にて、りんびやうのコトを云ふ、
りんしふ(隣集)隣集(多)の如く物の澤山にあつまつてゐるコトを云ふ、
りんじふ(臨終)臨終いまは、即ち死にきほのコトを云ふ、
りんしき(鄰舍)隣室なりの家。近處の家のコトを云ふ、
りんしや(臨寫)臨寫手本を置きて、書畫文書等を寫すコトを云ふ、
りんじさい(臨時祭)臨時祭の時にのそみて行ふ祭(マツ)のコト例祭に對しての稱、
りんしやち(臨床)臨病人の寢床(マツ)の傍(マツ)に赴きてあるコトを云ふ、
りんじやち(倫常)倫常五倫五常の道と云ふコトにて、人道のコトを云ふ、
りんじゆん(嶼嶼)嶼嶼はしくそびへ立てる山のコト③山や崖(マツ)などのけはしきコトを云ふ、
りんしよち(林鍾)臨十二律中の第六番目の稱、轉じて陰曆六月の稱、
りんしよく(吝嗇)吝嗇しふきコト、即ちけちんばう、物をおしむコト、

りんす、りんせ

りんす(綾子)縞絹織物の名、其の質薄くして、一種の光澤(マツ)と一種の粘(マツ)り氣のある美しきもの、
りんせい(輪生)輪植物類の輪形(マツ)になりて生ずるコトを云ふ、
りんせい(林政)臨山林の經營、及び保護(マツ)等に關する行政のコト、
りんせい(稟性)稟性いしつ、うまれつきのコト、天性、
りんせち(林梢)臨林に生じてる樹木の梢(マツ)のコトを云ふ、
りんせき(吝惜)吝物をおしがる、しばんばうなるコトを云ふ、
りんせき(臨席)臨席の場へ出る、其の席へのぞむ、
りんせき(隣席)隣室なりへのや、
りんせつ(隣接)隣室なりへのや、
りんせん(綸宣)臨天子の仰せ、即ちみこさのりのコトを云ふ、
りんせん(臨戰)臨戰場に赴くコト③戰場近くへ進み行くコトを云ふ、
りんせん(林泉)臨木と泉(マツ)、
りんぜん(凜然)凜つまく身に、たゆる④いさましきさまを云ふ、
りんぜん(凜然)凜つまく身に、たゆる④いさましきさまを云ふ、

りんせ、りんて

恐れて戰(マツ)えるさまを云ふ、
りんそち(林藪)臨林(マツ)まよふのコト、
りんそく(隣族)臨魚の種類、
りんそん(隣村)臨室なりむら、
りんたち(倫道)臨人倫(マツ)の道、即ち入の行ふ正しき道のコトを云ふ、
りんたち(林塘)臨林と池(マツ)のコト、
りんたち(龍騰)臨草の名、龍(マツ)に似たるものにて、秋の頃に筒状(マツ)を爲せる紫色(マツ)を呈せる花を咲かすもの、賞観用とし栽培する、
りんち(臨池)臨支那の故事、手習(マツ)するコトを云ふ、
りんち(隣地)臨室なり地面、
りんちち(輪軸)臨車(マツ)の心棒(マツ)の心棒、
りんちち(臨場)臨其の場所(マツ)へ赴(マツ)むき、のぞむコトを云ふ、
りんちち(臨蟲)臨身體(マツ)に、けの生(マツ)てる虫、即ち蛇の種類、
りんちち(林中)臨はやし(マツ)のなか、
りんちち(輪直)臨當直(マツ)に同じ、即ち順に来る宿直のコト、
りんてつ(輪蹄)臨車の輪(マツ)馬の蹄(マツ)の蹄を云ふ③轉じて車馬、
りんてち(臨鳥)臨林の中にすんでゐる、

りんと、りんば

いろく(鳥)の鳥のコトを云ふ、
りんでき(淪溺)臨水におぼれしづむコトを云ふ、即ち沈溺(マツ)、
りんでち(臨帖)臨折本(マツ)なしたる習字の手本のコトを云ふ、
りんとん(輪轉)臨くるくるまはるコト③車の輪のまはるコトを云ふ、
りんとん(輪轉機)臨印刷器機の一つ、同一の物を迅速に、多數印刷するに用ゆるものにて、重に新聞雜誌等の印刷に應用するものにて、一回轉毎に、兩面の印刷、又は同時に二色(マツ)以上の印刷を爲し得らるる仕掛なれるもの、
りんとち(輪燈)臨佛(マツ)の前に吊(マツ)して置く輪形(マツ)の燈火(マツ)のコトを云ふ、
りんどく(輪讀)臨順番に書物を讀(マツ)みまはるコトを云ふ、
りんばち(隣邦)臨室なりのに、
りんばち(鄰保)臨近處の人々のコトを云ふ、
りんばく(林薄)臨はやしと、くさむらさりんばん(輪番)臨まはりばん、順番(マツ)の、
りんばかり(盤秤)臨厘の目のみ、もられてある、極く小さきはかりのコト、極く

りんば、りんむ

少量の物をはかる具、
りんばくわん(淋巴管)臨醫學名にて、身體中の不用物を、血に作るべく靜脈へ送る管(マツ)の稱、
りんび(隣比)隣魚類の隣(マツ)の如く、重なり合つて正しく列(マツ)べるコトを云ふ、
りんびやち(痲病)臨細菌の侵入に依りて發する、一種の傳染的生殖器病、
りんぶ(稟賦)臨うまれつき、
りんぶつ(隣物)臨魚類のコトを云ふ、
りんべい(廩米)臨倉(マツ)にたくはへられである米のコト、
りんべち(林表)臨林のをもて、即ち林のほそり、林のそば、
りんべん(隣片)臨うろこの一ひら③轉じて隣(マツ)の如き状を爲せる小さきかけらのコトを云ふ、
りんぼ(臨華)臨故事にて、書畫類を見て其れを寫(マツ)すコトを云ふ、
りんぼく(林木)臨林の木、
りんぼつ(淪没)臨水に沈(マツ)むコト③かくれて表(マツ)はれぬコト、
りんぼん(臨本)臨書畫(マツ)の手本③手本を見て書き習(マツ)ふコト、
りんむくわん(林務官)臨山林に關する行

りんめ、りんか

政事務を、取り扱ふ高等官の名、
りんめい(綸命)臨天子の仰(マツ)せ、即ち勅命のコトを云ふ、
りんもち(盤毛)臨りんさ、毛(マツ)と云ふコトにて、極(マツ)くわづかのコトを云ふ、
りんちち(霖潦)臨霖雨に同じ、長あめ、
りんちち(淪落)臨世に用ひられぬコト、おちふれるコトを云ふ、
りんちち(林樹)臨山の林(マツ)のあるみれ(マツ)の、
りんり(淋漓)臨水氣の物が、ポタポタと落ちる状を云ふ、例ば流汗淋漓など、
りんり(倫理)臨人の行ふべき、正しき道のコト、
りんり(鄰里)臨室なりむら、
りんり(淋漓)臨ながれ出るコト③ぼとぼとこをちる(血などの)、
りんりつ(林立)臨林(マツ)に木の立つてるやうに物の立てる状(マツ)を云ふ、
りんりん(凛凛)臨寒さなどの、銳(マツ)く身に染(マツ)む状(マツ)に云ふ③いさましくり、しき状を云ふ、
りんりん(隣隣)臨車が地をすつて行く音(マツ)のコトを云ふ、
りんりがく(倫理學)臨人のなまむべき正しき道を研究(マツ)する學問、

るいは、るゐる

るゐは(蘇馬)図やせてる馬①(わ)つてゐる馬。つかれてる馬、
 るゐは(蘇德)図おさるえつつかえるおやせおさるえつつかえるコト、
 るゐは(蘇拜)図蘇遷(わ)に同じ、
 るゐひやり(類病)図似寄たる病氣、
 るゐへい(蘇兵)図つかれたる兵士、
 るゐへき(墨壁)図とりてのべ(土)土を積みてとりてなしたる物、
 るゐべつ(類別)図其の種類に依りて、其に區別(わ)するコト、
 るゐめつ(類滅)図さももにほろびなくなるコトを云ふ、
 るゐやく(類業)図似寄りたる調合(わ)の仕方(わ)にて製したる薬、
 るゐらう(蘇老)図年より元氣の衰へ身體(わ)のつかれるコトを云ふ、
 るゐらん(類卵)図卵(わ)をかされるコト、轉じて危(わ)ふきさ云ふ意、
 るゐり(蘇裡)図土又は石などを運(わ)ぶに用ゆる業裝(わ)のふで、もつ、
 るゐる(蘇果)図かさなり合ひたる状態(わ)を云ひ表はす語、
 るゐる(蘇然)図つかれおさるへたる状態(わ)なり連(わ)なつてる状態(わ)思ふやうに爲らすして、不平を抱ける

(るげ)

るげい(流刑)図島流しの刑罰(わ)、
 るげん(蘇言)図委(わ)しく説き明すコト、細々しき説明、
 るげん(蘇人)図せむしの人、

(るろ)

るろい(流罪)図流刑(わ)に同じ、
 るろ(蘇路) 指(わ)を屈して物の數(わ)をかぞへるコトを云ふ、
 るろゆつ(蘇述)図細々しく述(わ)るコトを云ふ、

(るす)

るす(留守)図主人の不在を守るさ云ふ意より轉じて、他へ行きて家に在らざるコトを云ふ、
 るす(留守)图主人の他行中、其の家番をするコトを云ふ、
 るすばん(留守番)图留守番人、
 るそん(蘇宋)图ソンの國より、輸入せし陶器の曹を云ふ、
 るちん(蘇陳)图しく述べ立つるコト、
 るちゆう(流注)图腫物(わ)の名、筋肉の内部に生する一種の腫物の稱、
 るつづ(蘇つづ) 能く流るコトを云ふ、

るす、るつう

るつは(甘地)图土にて清りたる壺(わ)、金銀銅鐵を鑄(わ)すに用ゆ具、

(るてで)

るてん(流轉)图佛敎の語、生きかはり死にかはりして、因果の無窮につらき廻(わ)るコトを云ふ語、

(るに)

るにん(流人)图島流にされたる人、

(るぶぶ)

るぶ(流布)图世間に廣(わ)まるコト、世間に評判になるコトを云ふ、

(るら)

るらち(流瀆)图さまよふ(わ)ぶらつきまわる(わ)さまよふコト、
 るらちん(流瀆人)图爲す事のなくしてさまよひ歩ひてる人の稱、

るつは、るらう

(るり)

るり(琉璃)图佛敎の語、七寶の一なる玉の稱、紺色(わ)を爲せる玉の稱、紫に紺を帯びたる色を云ふ、
 るりいろ(琉璃色)图光澤(わ)のある紫紺色(わ)の曹を云ふ、
 るりこん(琉璃紺)图前條に同じ、
 るりくわち(琉璃光)图佛の名、薬師如来(わ)の稱、

れ

(れい)

れい(令)图命令、即ちいひつけ。おほせ。申しつけ。のり。てほん、おきて。よろしきコト。すぐれてあるコト、一縣の長官、即ち縣令。云ひつける意を表はすに用ゆる語、即ちして又はせしむ、
 れい(苓)图草の名、甘草(わ)の曹、
 れい(玲)图衣服の名所、ふりの曹、特に婚姻の時に用ゆる禮服の上着(わ)の稱、

るり、れい、令、苓、玲

(るちぢ)

るちん(蘇陳)图しく述べ立つるコト、
 るちゆう(流注)图腫物(わ)の名、筋肉の内部に生する一種の腫物の稱、

(るつづ)

るつづ(蘇つづ) 能く流るコトを云ふ、

れい、鈴、冷、溜、鈴、玲、11001

れい(零) 函数量の無きコト。何にもなきコト。ばしたのあまりのこり。四物の落(お)るコト。雨のふるコト。しづかに降る小雨(あ)り。ぬか雨のこたを云ふ。
 れい(聆) 函十分に聴く。十分さまさるコト。命令を守り従ふコトを云ふ。
 れい(伶) 函さまさるコト。かしこきコト。
 れい(翎) 函鳥のはれのこたを云ふ。
 れい(齡) 函年輪。さしよはひ。
 れい(厲) 函あらしき。即ちあらし。ばげしきコト。きつきコト。おこそかにして、きびしきコト。おこそかにして、物(もの)のばをつける。わざはひ。災難(わざ)り。崇(た)り。やむ。わづらふ。かたはさなる病氣、特に癩病(れび)のこた。ふるひたつ。ばげむ。む。取り扱ふ。しいたぐ。む。たらしくあり。む。こくあり。みにく。あり。あしくあり。
 れい(癩) 函あしき病氣。えやみ。癩病(れび)。なやます。殺(ころ)す。勳(い)に通す。ばげむ。ばげます。
 れい(勵) 函はげむ。つこむ。す。む。
 れい(瀾) 函あらしき。し。轉じてさく。みかく。こする。
 れい(糶) 函しらすにある米、即ち玄米(げんまい)。くる米のこた。あらし。
 れい(蠟) 函魚の名、うなぎのこた。
 れい(鵲) 函鳥の名、うぐいすの一種。
 れい(驪) 函折(ま)る。まける。ひしぐ。
 れい(黎) 函人民のこた。色々、もろもろ。
 れい(黎) 函草の名、あかさのこた。
 れい(黎) 函七寶の一、るりのこたを云ふ。
 れい(黎) 函總て色の黒きコト、又は黒き色の物のこたを云ふ。
 れい(禮) 函人生の大道たる五常の一にて他に對して敬意を表す其の仕方(かた)の規定、のり。じぎするコト。敬意を表すべく爲めに贈る物品(もの)かたじけなき意を表す言葉。
 れい(禮) 函魚の名、うなぎ。國訓にてはものこたを云ふ。
 れい(醴) 函酒の一種あまさけのこた。
 れい(蠶) 函ひさご。ひやうたんのこた。木くひ虫(こ)轉じて虫が木の心を、かむコト、例は白蟻(しらぎ)が木髓(もくずい)を喰ふなど。
 れい(隸) 函つきひたがふコト。手下(てあ)部下(てあ)家來(けらい)。召使(めいし)。しらす。けみす。書體の一種隷書(れいし)の略、
 れい(颯) 函烈風。はやてのこた。
 れい(例) 函ためし。ならばせ。ひきたり。おほよそ。あらかた。あらし。普通(つうず)のなみなみ。いつものさうり、即ち例の通り。例を引きて示せば、即ちたさへば。
 れい(靈) 函たましひ、なきたま。生命(せいめい)。鬼神(かみ)かみ。明らかにして、くはしきコト。不思議なるコト。よろしきコト。よきコト。威光(いこう)。みいつ。たふさきコト。天地人又は日月星のこたを云ふ。
 れい(賜) 函れんじまご。ひさし。のきのこた。
 れい(戾) 函もさるコト。そむくコト。曲(まが)るコト。不正(せい)罪過(ざい)。
 れい(振) 函楽器に用ゆる器具、ばちのこた。
 れい(唳) 函大なる鳥の鳴くコト。特に鶴(つる)。

及び雁の鳴くコト、又は其の鳴き聲。
 れい(令) 函娘の敬語、令嬢。
 れい(靈) 函ふしきになつこた。
 れい(禮) 函(れ)を表はす精神(せいしん)、
 れい(伶) 函歌舞音楽の伎(わざ)を爲す人、即ちやくしやのこた。
 れい(霖) 函ふるしき雨、喜雨、
 れい(冷) 函ひやかなる雨、
 れい(露) 函くしく雄大なる光(ひかり)さ云ふ意にて、太陽のこた。
 れい(疫) 函はやり病。えやみ。
 れい(液) 函くしく不思議なる液(えき)。(神水(かみづ)のこたを云ふ。
 れい(麗) 函うるはしくつやあるコト。あてやかなるコト。
 れい(靈) 函靈舎に同じ、
 れい(界) 函精神力のはたらく範圍(はんい)内、精神界のこたを云ふ、
 れい(階) 函悪しき事の生ずるさざし、しるしのこたを云ふ、
 れい(開) 函開じてあけるコト、
 れい(行) 函きびしく行ふコト、
 れい(勵) 函はげみ行ふコト、
 れい(強) 函くしきはたらきを有(あ)る強き犬のこたを云ふ、
 れい(格) 函定例常に用ゆる格式、
 れい(令) 函人のかなづる音楽、
 れい(禮) 函儀式と音楽(がく)のこた。
 れい(轉) 函精神教育のこたを云ふ、
 れい(汗) 函ひやあせ、
 れい(冷) 函寒きコト。ひやかなるコト、
 れい(感) 函ふしきなる感應(かんじ)。
 れい(冷) 函一定の儀式に用ゆる器具(ぐ)のこたを云ふ。類の總稱。
 れい(器) 函すすしき時候、
 れい(靈) 函たつきき氣、ふしきなる氣、くしき氣例は神の靈氣など、
 れい(靈) 函みのがめのこた、
 れい(癩) 函熱病などを起(おこ)さしむる悪しき氣、
 れい(疫) 函疫病(えきび)神のこた、病の鬼(おに)のこたを云ふ、
 れい(禮) 函禮を行ふおきて、即ちのり、禮の作法(しやくさ)。
 れい(靈) 函靈地(れい)靈區(れい)に同じ、其の條を見られよ、
 れい(冷) 函物のつめたくなれるコト、又たつめたくするコト、
 れい(靈) 函靈魂(れい)を納(な)めたる椽(けら)即ち棺(くわん)のこた、
 れい(禮) 函禮儀を守(も)りて、うやもふコたを云ふ、
 れい(靈) 函靈地に同じ、
 れい(靈) 函神佛へそなへたてまつる物、即ちくぶつ(くぶつ)のこた、
 れい(禮) 函禮儀を守りて人をさりなすコたを云ふ、
 れい(冷) 函不親切なる取扱(てあ)ひ、粗末(そまつ)なる取扱ひのこた、
 れい(灰) 函もどりたがふ、
 れい(灰) 函火氣の失(あ)し灰、
 れい(靈) 函あやしくして殊に不思議(ふしぎ)なるコたを云ふ、
 れい(例) 函さだめの外(ほか)、
 れい(官) 函音楽を以て仕官せる人、即ち樂人のこた、
 れい(官) 函ひくき役人、
 れい(敬) 函禮儀を守りて敬(けい)ふコたを云ふ、
 れい(令) 函人の女房の敬語、

れいけ、れいこ

れいけい(令兄) 密人の兄を呼ぶ敬語、
 れいびつ(令月) 密よき月、
 れいびつ(冷月) 密陰曆の七月の稱、
 れいびつ(例月) 密つきなみ、
 れいけん(禮檢) 密禮儀作法の科ト、
 れいけん(零絹) 密少しばかりのきぬ、
 れいけん(令娟) 密年若(か)くして容貌(か)の美しきコトを云ふ、
 れいけん(靈験) 密神佛のあらたかなる驗能(か)即ちしるしのコト、
 れいげん(黎殿) 密人民の科ト、
 れいげん(例言) 密書物(か)の始めに書く序文の類を云ふ、
 れいけつせい(冷血性) 密血の冷(か)かなる性質(か)の動物(か)の科トを云ふ、
 れいけつどうぶつ(冷血動物) 密其の血液(か)の温度(か)が、時候(か)の温度より冷(か)やかなる動物の事(か)を云ふ、蛙(か)蛇(か)などの類(か)のもの、薄情(か)なる性質(か)の人(か)を嘲(か)つて云ふ語、
 れいご(令語) 密同情(か)に乏(か)しき言葉(か)、人をひやかす言葉、
 れいご(圍語) 密ひさや即ち牢屋(か)、
 れいご(令公) 密府縣の知事(か)をたつ

れいこ、れいし

れいこく(冷刻) 密人情なくして、むごくきびしきコトを云ふ、
 れいこく(例刻) 密定(か)まりし時刻、定刻、
 れいこん(靈魂) 密人間のたましい、
 れいさい(例祭) 密年々定めて行ふ神社の祭禮、臨時祭に對しての語、
 れいさい(零時) 密はした(か)おちこぼれ、
 れいさい(零細) 密甚だこまかきコト、
 れいさい(令妻) 密人の妻を呼ぶ敬語、
 れいさい(禮裝) 密禮服を着用したる其の狀(か)禮服を着るコト、
 れいざり(靈像) 密たつき像(か)の科ト、
 れいざつ(零冊) 密そろつてぬ書物即ち本の科トを云ふ、
 れいざん(靈山) 密神佛の祀(か)られてある山、
 れいざり(令藏庫) 密藏の内を、理化學上の方法を以て、冷却(か)し置きて、物品を入れ其の物の腐敗(か)を防(か)ぐ仕掛(か)になつてゐるもの、
 れいし(荔枝) 密熱帯(か)地方に産する木にて、其の丈(か)二三丈に及ぶコトあり、
 れいし(羽根) 密の形を爲して、其の綠色(か)は四時變(か)するコトなし、實(か)は其の形狀龍眼肉(か)の如く、其

れいし、れいす

の外皮に龜の甲に似たる紋あり、之を乾(か)して諸國へ輸出す、一種の香氣ある食料、
 れいし(齡齒) 密人の年齢、
 れいし(靈祀) 密魂を祀(か)るコト、
 れいし(靈芝) 密萬年茸(か)の科ト、
 れいし(令姉) 密他人の姉(か)の敬語、
 れいし(令子) 密人の子供を賞(か)びて云ふ語、
 れいし(令旨) 密おほせ、おむれ、
 れいし(令嗣) 密他人の世繼(か)を賞(か)びて云ふ語、
 れいじ(靈時) 密神を祭るにわ、即ち祭場祭壇(か)の科トを云ふ、
 れいじ(靈寺) 密靈驗のあらたかなる寺の科ト、
 れいじ(令兒) 密令子に同じ、
 れいじ(零時) 密おほせの言葉、
 れいじ(零時) 密十二時より一時までの間の時を云ひ表はす語、
 れいじ(例時) 密常に定めたる時、
 れいし(靈秀) 密不思議にすぐれるコト、
 れいし(禮式) 密禮の行ひ方の定め、
 れいし(麗質) 密きれいなる質、うるはしき生(か)れつきのコトを云ふ、
 れいしつ(令室) 密人の女房をたつきびて

云ふ語、

れいじつ(今日) 密よき日柄、
 れいじつ(例日) 密定(か)まりたる日、
 れいしゆ(禮謝) 密謝意を述ぶるコト、
 れいしゆ(靈宮) 密貴人の靈魂(か)が祀(か)られてある處、即ちおたまや、
 れいしゆ(禮者) 密新年の回禮者の科ト、
 れいしゆ(冷酒) 密ひや酒、かんをせぬ酒(か)、
 れいしゆ(體酒) 密あまざけ、
 れいしゆ(黎首) 密人民の科トを云ふ、
 れいしよ(隸書) 密書體(か)の名、楷書のや、てんしよ(か)みたるもの、
 れいしよ(黎庶) 密人民、たみくさ、
 れいしん(令辰) 密めでたき日、よるこぼしき日、いはひ日のコト、
 れいけん(嶺峯) 密山のみれ、
 れいけん(麗人) 密美しき人の科ト、
 れいけん(例人) 密みなみの人、
 れいじん(冷人) 密音楽(か)を奏(か)する人のコトを云ふ、樂人(か)、
 れいじん(隸人) 密下男、下僕、
 れいしやち(勵獎) 密はげまして、物事を進歩(か)するコトを云ふ、
 れいじやち(令狀) 密官の命令(か)を傳(か)ふる書狀、
 れいじやち(裁判所) 密判事の發する、

召喚(か)、拘引の命令書の科トをも云ふ、

れいじやち(禮狀) 密れいのがみ、
 れいじやち(黎杖) 密あかさにて、作りたる杖(か)の科トを云ふ、
 れいじやち(禮讓) 密禮儀を守りてへり下るコトを云ふ、
 れいじゆち(靈獸) 密不思議なる動物(か)を有(か)てゐるもの科ト、
 れいじゆち(隸從) 密も、家來、
 れいしゆく(厲齋) 密いかめしきコト、きびしきコトを云ふ、
 れいじゆつ(靈術) 密ふしきなるで、
 れいしよち(例證) 密例を引きたる證據(か)、
 れいしよく(厲色) 密いかめしき顔色をなすコト、
 れいしよく(麗色) 密の科トを云ふ、
 れいしよく(麗色) 密うるはしきいろ、
 れいしよく(糧食) 密粗末なる食品を食ふコト、即ち粗食の科ト、
 れいす(令) 密勅云ひ付ける命令を下す、
 れいす(冷水) 密水の科ト、

れいずる(靈瑞) 密不思議なるきざし。不思議なるしるしのコト、

れいすち(零數) 密數のなきコト、
 れいすち(冷水浴) 密水の風呂(か)へ入るコト、即ち身體の強健(か)を保(か)つべく爲めに、朝起るこ共に水の中へ入つて身體を洗(か)ふコトを云ふ、
 れいすち(零時) 密冷水摩擦(か)密身體の衛生を重(か)んずべく爲めに、毎朝起ると同時に、冷水を手拭(か)に浸(か)して全身(か)を擦るコト、
 れいせい(冷靜) 密物事に騒(か)がぬコト、
 れいせい(令婿) 密人の婿をたつきびて云ふ、
 れいせい(厲聲) 密聲をあらげけるコト、
 れいせい(勵聲) 密聲をあげまして、勇氣(か)をつけるコトを云ふ、
 れいせい(勵精) 密勵みて精を出す、
 れいせち(令者) 密魚類を入れる筥(か)、
 れいせち(冷笑) 密あざけり笑ふ、
 れいせち(冷憎) 密いたはる心なく、無暗にきびしきコトを云ふ、
 れいせき(靈跡) 密神聖にして冒すべからざる、あらたかなる古跡(か)、

れいし

れいし、れいす 令

れいす、れいき

れいせ、れいた

れいせき(礫石) 固さいしのコト、
 れいせつ(禮接) 固禮儀を守りて厚くそり
 なすコトを云ふ、
 れいせつ(禮節) 固禮儀と作法、
 れいせん(冷泉) 固山より湧(き)出る冷
 たき源泉(冷)の、
 れいせん(禮錢) 固謝意を表する爲めに
 出す金錢の、
 れいせん(靈籤) 固みくじの、
 れいせん(靈前) 固神のみたまの御前、
 人の靈魂の祀りある、
 れいせん(冷然) 固冷淡なる状態を云ひ表
 (冷)はす語、
 れいそく(靈測) 固小さき心にて、大なる
 事をくわだてんとするコトを云ふ、
 れいそく(令息) 固人の息子の、
 れいぞく(隷屬) 固他の部下(下)に附くコ
 ト、他の仲間に従ふコト、
 れいそん(令尊) 固人の父を、たつとびて
 云ふ語、
 れいそん(令孫) 固人の孫(子)を、たつとび
 れいたい(冷待) 固粗末なるそりなし、
 れいたい(禮待) 固手あつきそりなし、
 れいだい(禮代) 固禮の印として贈る物、
 れいだい(靈垂) 固精神の、即ち魂魄
 の安じ居るところを云ふ意味、

れいた、れいて

れいだい(靈代) 固死したる人の魂魄の代
 (り)として祭るべきもの、遺髪(髪)の類、
 れいだい(例題) 固練習の爲めに設(け)け
 られたる問題、
 れいだち(令堂) 固他人の家を敬ふて呼ぶ
 語、即ちお宅、尊宅(宅)、
 れいたく(給簿) 固出すの、
 れいたく(麗澤) 固學生が互ひに學問を、
 はげみ合ふコトを云ふ、
 れいたん(冷淡) 固人情(情)の薄きコト、
 不親切(切)の、
 れいち(靈地) 固神社佛閣などのある神々
 (地)しき土地(地)の、
 れいち(令嬢) 固他人の娘を、うやま
 ひて云ふ語、
 れいち(靈場) 固神社佛閣(場)の在る
 ところの、
 れいち(靈龍) 固神佛のたつき、お
 めぐみのコトを云ふ、
 れいてい(令弟) 固人の弟を、たつとびて
 れいてい(零丁) 固おちぶれるコト、
 れいてん(例典) 固さだめ、のりおきて、
 れいてん(令典) 固よきおきて、正しき規
 則(規)、よきの、
 れいてん(禮典) 固禮作法を示したる書
 物、禮式の事に關するおきて、

れいて、れいは

れいてん(零點) 固點數(數)のなきコト、
 れいてが(禮手紙) 固謝禮(禮)の意味を
 申し述べ贈る手紙(紙)、
 れいと(麗都) 固うるはしゆふして風雅(雅)
 じやかなるコトを云ふ、
 れいど(零度) 固度數(數)を數(數)へ始む
 る度のコトを云ふ、即ち寒暖計(計)な
 るの一度より以下の、
 れいとく(令徳) 固よろしき徳、
 れいとく(靈徳) 固不思議なる徳(徳)、
 れいねつ(冷熱) 固ひやかなる、あつ
 さと熱心(心)なる、冷淡(冷)なる
 のコトを云ふ、
 れいねん(例年) 固いつもの、毎年(年)こ
 しなみの、
 れいのち(靈能) 固ふしぎなる精神のはた
 れいはい(禮拜) 固神社佛閣に参拜(参)す
 るコトを云ふ、
 れいはい(零聲) 固すたれるコト、
 れいはい(禮牌) 固死者の戒名(名)を記
 して祭(祭)るもの、位牌(牌)、
 れいはち(禮砲) 固國の禮式に依りて、敬
 意を表すべく爲めに、發(發)する大砲、
 れいはち(靈寶) 固神社又は佛閣(閣)等に
 在る寶物のコトを云ふ、
 れいはち(令望) 固他人のほまれ、他人の

れいは、れいふ

名譽(譽)の、
 れいはち(禮貌) 固禮儀の正しき容子(容)、
 れいはふ(禮法) 固禮作法、
 れいはん(冷飯) 固ひやめしつめたき飯、
 れいはん(零飯) 固こぼれ落ちたる飯粒(粒)の、
 粗末(末)な飯(飯)を云ふコト、
 れいはん(令範) 固よきてほん、正しきの
 り、守るべきしきたり、
 れいはち(禮賓) 固酒を飲(飲)むま
 云ふコトの、
 れいひ(麗麗) 固うつくしきコト。はでや
 かなるコトを云ふ、
 れいひん(靈敏) 固不思議にさききコト、
 れいひん(冷評) 固あはひのなき批評
 ①ひやかしのコトを云ふ、
 れいひ(靈符) 固神佛のたつきおふだ、
 こふうの、
 れいふち(冷風) 固すしき風、
 れいふく(禮服) 固禮儀の時に用ゆる一定
 の衣服、
 れいぶつ(靈佛) 固靈驗(驗)のあらたかな
 る御佛(佛)の、
 れいぶつ(禮物) 固謝意を表すべく爲めに
 贈(贈)る物品の、
 れいぶん(令聞) 固よろしき評判(評)、

れいふ、れいま

れいぶん(例文) 固定例とし用ゆる文章、
 れいぶん(令夫人) 固身分ある人の奥方
 (方)を、うやまひて云ふ語、
 れいへい(例幣) 固年々に定りたる例式と
 して、朝廷より神に奉られる幣物(幣)、
 れいへい(冷傳) 固使はれる人、即ち奉公
 人、
 れいへい(禮聘) 固禮を厚くして人をまね
 くコト、又は役をまかすコト、
 れいへち(浮標) 固みなのしるしの、
 即ちみをつくし、
 れいべち(靈猫) 固じやこ猫の、
 れいべち(靈廟) 固おたま、
 れいへい(例幣使) 固毎年例として、
 天子が神(神)へささげ給ふ幣物(幣)を
 持参(参)し行く天子のお使、
 れいぼち(禮帽) 固禮儀の時に用ゆる一定
 のかぶり物、
 れいぼく(靈木) 固神の守(守)らせたもふ
 木、即ち神木の、
 れいぼく(零墨) 固ちぎれちぎれになつて
 る文書の、
 れいぼく(冷策) 固下僕(僕)、下男、
 れいまい(令妹) 固人の妹(妹)を、たつと
 びて云ふ語、
 れいまる(禮参) 固神社佛閣へお禮に参

れいふ、れいり

るコトを云ふ、
 れいみん(黎民) 固人民國民、
 れいむ(靈夢) 固あらたかなる夢(夢)、
 佛のお告(告)げに依る云ふ奇夢(夢)、
 れいめい(黎明) 固夜明けの、
 れいめい(令名) 固よきうわさ、即ち評判
 れいめい(靈妙) 固くしくたへなる、
 れいもつ(禮物) 固謝意を表す爲めに贈る
 品物、おくりもの、
 れいやう(羚羊) 固支那に棲(棲)む獸(獸)の
 角(角)は薬用(用)を爲る、
 れいやく(靈藥) 固不思議に効(効)く藥、
 れいよ(零餘) 固物のあまり、即ちはした
 のコトを云ふ、
 れいよ(令容) 固はまれの、
 れいよう(禮容) 固禮儀正しきかほつき、
 禮儀正しきかたち、
 れいよう(麗容) 固うるはしきかほかたち
 うつくしき容子、
 れいらち(令耶) 固他人の息子(子)を、た
 つとび云ふ語、
 れいらく(醜陋) 固あまざけの、
 れいらく(零落) 固おちぶれる、
 れいり(伶俐) 固性質(質)のかしこきコト
 才智の優(優)れたる、

れつこ、れつし

れつこ(列國)國つらなつて國、列ち
國國のこト、各國のこト、
れつこち(列侯)諸大名のこトを云ふ、
れつこく(列國會議)列國會議、各國の使
臣が會合して、國際問題につきて開く
會議のこトを云ふ、
れつこ(列座)國ならび坐す、其の席につ
らなるトを云ふ、
れつこ(劣才)國智慧のたりないこト、
れつこ(列裁)國草木類をならべ、植(さ)
るこトを云ふ、
れつし(烈士)國勇(ゆう)ましく正しき人、即
ち節儀(せうぎ)を重んずる士、
れつじ(列次)國ならびたる順序、
れつじ(烈日)國暑さの烈(れつ)しき日、
れつじ(列車)國つらなれる車、汽車の
こトを云ふ、特稱、
れつじゆ(列樹)國木の並(なら)んでるこト、
即ち並木(ならぎ)のこト、
れつしん(烈震)國はげしき地震、即ち家
屋を倒し、地盤(ぢばん)を裂(さ)く地震、
れつじゆ(劣情)國いやしき情、おそり
たる心根(こころ)のこト、
れつじゆ(劣弱)國つたなくして弱(じやく)
きこトを云ふ、
れつしゆ(列宿)國天に在る諸々(しよ)の

れつし、れつこ、列

星のこトを云ふ、
れつじゆん(列順)國行列(けつじゆん)の順序、
れつす(列)國動ならぶつらなる、
れつせい(列星)國星(せい)の天につらなつ
てるこトを云ふ、
れつせい(列聖)國歴代の天皇、
れつせい(列世)國代々、世々(せい)、
れつせい(冽清)國水の冷(れつ)たくして、す
み切つてるこトを云ふ、
れつせい(列席)國其の席に列(れつ)なつて
るこト、又たつらなるこト、
れつそ(烈祖)國著(しやく)るしき事業を成功
せし先祖のこトを云ふ、
れつそ(列祖)國代々つらなりし先祖、
れつそ(列宗)國列代に同じ、
れつそつ(列卒)國狩獵(しやく)にて匿(かく)れて
ある獸(けもの)を追出す役向の人、せ、
れつたい(列代)國先祖(れつたい)代々、
れつたり(列島)國つらなつてる島、なら
びである島、
れつち(列置)國ならべ置(ち)くこト、
れつちよ(烈女)國操(せう)り正しき女子、
れつてん(列傳)國多くの人の傳記をつら
ね記すこト、又は記せしもの、
れつど(劣駕)國おさつてるにぶきこト、
れつどち(劣等)國おさつてるこト、最下

れつば、れふく、獵、獵、獵 二〇二二

の等級のこト、
れつばい(列排)國つらなりならぶこト、
れつばん(列藩)國もろ(ろ)の藩(はん)、
れつびん(列品)國ならんでる品々、
れつびん(劣品)國おさつてる品物、
れつぶ(烈夫)國烈士に同じ、
れつぶ(烈婦)國いさましくすぐれてる女
即ち貞操なる女子、
れつぶち(烈風)國はげしき風、
れつべひ(烈炳)國さかんなるこト、あき
らかにやけるこトを云ふ、
(れふぶ)
れふ(獵)國かりのこト、即ち山野にて鳥
獸類を捕ふるこト、海又は川にて魚類
を捕ふるこト、あざるこト、むごたら
しく取り扱ふ、即ちしいたぐ(れふ)み行
く、こえ行く、
れふ(獵)國大地をふみ行くこト、山など
をこえ行くこトを云ふ、
れふ(獵)國かみの毛、馬のたてがみ、鬣
(は)のこト、たてがみの如き形を云ふ、
意より轉じて、鬣(は)の尖(せん)のこト、
及び松葉(まつば)のこトを云ふ、
れふく(獵狗)國狩(しよ)に用ゆる犬、

(れも)

れふけん(獵犬)國前條に同じ、
れふけん(獵獸)國狩(しよ)をするこト、
れふし(獵師)國かりうごのこト、
れふしや(獵者)國狩をする人、
れふす(獵)國鳥獸の類を捕ふ、
れふせん(獵船)國すなごりをする船、
れふば(獵場)國かりげのこト、魚類を捕
(と)ふる場處のこトを云ふ、
(れも)
れもん(檸檬)國木の名、密柑(みつかん)の種類
にて、其の葉及び其の實(じ)も密柑に
似たれども、實(じ)は稍(せう)細長(こほろ)くして、
一種の愛すべき芳香を放ちて、味(あじ)は
酸(さん)くあり、
れもんゆ(檸檬油)國れもんの實(じ)の皮
を蒸溜(じょうりゅう)して製したる水の如き油
にて、芳香殊に強く、薬用とし、又は清
涼劑(れいじやう)の材料として珍重(ちんじゆう)さる、
(れん)
れん(連)國つらぬ。つらなるこト、仲間
つれ(連)血筋(けつじん)のつらなれるこト、即
ち縁者(えんしや)洗(せん)ふこト、すゞぐこト
れん(蓮)蓮、練、煉、練、廉、廉

(れん)

れん(練)國絹糸(けん)又は絹織物を煮(ゆ)
きて、軟(な)らかくして光澤(くわうさつ)を出す、
即ち練(れん)練て物事に精を出して巧み
になるやうにす、白色の絹織物の稱(な)
える。えらぶ、白くして殊に光澤(くわうさつ)あ
る状を云ふ、
れん(廉)國いさぎまきこト、操(せう)の正
しきこト、威光(いこう)の具はれるこト、
直段(ちくだん)の安きこト、物事を察し見る
こトを云ふ、
れん(廉)國家具の名、すだれ、
れん 蓮、練、煉、練、廉、廉

(れん)

れん(練)國つかる。つける。ひたす。ぬる
るこト、薄(うす)く張りたる水、
れん(練)國又たけんさも讀む、器具の名
かまのこト、
れん(練)國濼に同じ、其の餘を見よ、
れん(練)國草の名、うるしのこト、
れん(練)國草の名、うるしのこト、
れん(練)國化粧道具を入れ置く箱(かばん)、即
ちくしげ。練は、
れん(練)國衣服を以て死體を覆(おほ)ひ、
(れん)こトを云ふ、
れん(練)國草の名、やぶかうじのこト、
れん(練)國取り入れる、即ちなまめる、
略(りやく)し取る、あつめる。あつまる、
ちむむしまるこト、
れん(練)國あはれむ。あはれに思ふ、か
あいがる。いつくしむ、
れん(練)國こひ。こひしこふ、
れん(練)國櫛箱(しゆげい)鏡箱(きやうげい)、
れん(練)國ひく。ひきつる、多くの物が
連(れん)なりてかゝる、病氣の名、手足が
引きつれてゆがみかゝる病氣、
れん(練)國したふ。こがる。女の顔の
美しきこト、
れん(練)國切りたる獸類の肉、
れん(練)國車。人を乗せる飾(かざり)のある
車。てぐるま、車に乗る、曳(ひ)きつ、運(こ)
れん 練、濼、濼、飲、饑、戀 二〇二三

れん、れんか 聯

れん(聯) 圖つらなるコト。つらぬるコト
 ならんでるコト。漢詩の一體、律詩の
 對句(偶)のコトを云ふ。
 れんい(戀意) 圖こひしきふ心。
 れんい(連漪) 圖さなみ、ちいさき波。
 れんいん(連姻) 圖縁のつづいてるコト。
 れんいん(連陰) 圖日々天氣の晴(い)すし
 て曇(い)つてるコト。
 れんいん(連印) 圖二人以上の人か或る事
 に連(つ)なりて判を捺すコト、又は捺し
 たる判のコトを云ふ。
 れんち(連雨) 圖毎日降り續く雨。
 れんちん(連雲) 圖雲の連(つ)り合ふて、
 たなびいてるコトを云ふ。
 れんえん(連延) 圖長くつらなれ考コト。
 れんえん(激漣) 圖光(せい)の映(うつ)りたる
 波(なみ)が、きらめきてあるコトを云ふ。語
 れんをく(連屋) 圖ながやのコト。「ト
 れんか(廉價) 圖直段(ち)の安きコト。
 れんか(連歌) 圖和歌の上下の二句を、二
 人して詠(い)むコト、又は斯く詠みたる
 歌。
 れんか(聲下) 圖天皇(みかど)のあらせまつる
 大部のコトを云ふ、おひさまと。

れんか、れんく

れんかち(連術) 圖國々國々の同盟。
 れんかち(鍊鋼) 圖れりたる鐵、即ちばが
 れのコトを云ふ。
 れんかち(廉恪) 圖すなほにして物事に能
 く氣をつけるコト。
 れんかし(連歌師) 圖連歌に秀(た)で、長
 (び)じてる人のコトを云ふ。
 れんがふ(聯合) 圖規則(き)を立てて、組
 合(あ)を設け、共同して事を爲すを云
 ふ、又た連合とも書く。
 れんがふん(聯合軍) 圖二國以上の軍隊
 を合して出来上りたる軍。
 れんがふないかく(聯合内閣) 圖二個以上
 の政黨に依りて、成立ちたる内閣の稱。
 れんき(連木) 圖すりこぎのコト。
 れんき(連及) 圖連なつて及ぶ、即ちか
 かりあひのコトを云ふ。
 れんきん(廉謹) 圖心正(ち)しくして、つ
 つしみぶかきコトを云ふ。
 れんきやち(練行) 圖佛法に歸依(き)して、
 佛道を修業するコトを云ふ。
 れんく(聯句) 圖詩のついで句のコト。人々
 集(あ)まりて一句つづつ作(つく)り之を集
 (あ)めて一編の詩をなせるもの。
 れんくち(蓮藕) 圖蓮(あ)の根(ね)。
 れんくち(廉隅) 圖物のかど、即ちすみ

れんく、れんけ

れんくわんば(連環馬) 圖騎兵戦術の名。
 騎兵が互ひに馬を鎖(くわ)にて繋ぎ置き
 て一齊に敵陣へ攻め入るコトを云ふ。
 れんくわん(連環) 圖くまりのコト。
 れんくわん(煉瓦) 圖煉瓦石をた
 だして焼きたるもの、建築用(けんちゆう)の
 材料となる大切なる物にて、其種類三
 四種あり。
 れんくわん(煉瓦) 圖煉瓦石をた
 だして焼きたるもの、建築用(けんちゆう)の
 材料となる大切なる物にて、其種類三
 四種あり。
 れんくわん(煉瓦) 圖煉瓦石をた
 だして焼きたるもの、建築用(けんちゆう)の
 材料となる大切なる物にて、其種類三
 四種あり。
 れんけい(連撃) 圖つらなりつづいてるコ
 ト、つなぎつらぬるコト。
 れんけい(連係) 圖つらなりかかるコト。
 れんけつ(聯結) 圖互ひにつらなつて、結
 びついでるコト、むすびつけるコト。
 れんけつ(廉潔) 圖欲(ほ)の少なくして行
 (な)むの正しきコト。
 れんげつ(連月) 圖毎月(ごと)月々、
 れんげつ(蓮華座) 圖佛の坐らせる臺にて

蓮(あ)の花の形に作られたるもの。
 れんげさち(蓮華草) 圖原野(はら)に生ずる
 美(う)くしき花を咲(は)す草、春の初め
 に芽を生じ、長さ五六寸に成長して、茎
 (こ)の先(は)に紅紫(あかむら)の小花を咲す、
 刈(き)取りて肥料(けいり)となす、ゲンゲン
 花のコト。
 れんご(連呼) 圖つづけさまに呼ぶコト。
 れんご(蓮子) 圖はすの花に生ずる實(み)。
 れんご(連語) 圖二句以上の語が、連りて
 一語をなせるもの、掛、
 れんご(聯恭) 圖四五人集つて一局の恭を
 交々(あや)一石づつ、コトを云ふ。
 れんごち(聯互) 圖物と物とが、長く連(つ)
 なりつづいてるコトを云ふ。
 れんごち(簾鉤) 圖簾(れん)を巻き上げて、
 落ちぬやうにさめて置く、かぎ。
 れんごち(聲殿) 圖天子の御車(みくるま)を申
 す。手ぐるまこしきコトを云ふ。
 れんごん(蓮根) 圖蓮の根にて、蜂(はち)の巢
 (す)の如き形をなせるもの、食料となる
 れんごくと(聲殿下) 圖天子のあませ給
 ぶ都(みやこ)のコトを云ふ。
 れんざ(連鎖) 圖つらなりたる鎖(くわ)の物
 の連り合てるコトを云ふ。
 れんざ(蓮座) 圖はすのうてなコト、

れんざ(連座) 圖まきぞへのコト。
 れんざい(連歳) 圖毎年、年々。
 れんざい(連載) 圖新聞又は雜誌(し)など
 に、一つの事をつづけて書き載るコト。
 れんざち(盒箱) 圖化粧に用ゆる道具を入
 れて置く箱のコトを云ふ。
 れんざち(聯想) 圖或る事につきて、他の
 事を思ひおこすコトを云ふ。
 れんざく(連作) 圖同一の場處に、毎年同
 一の物を、種々(あ)へつけるコトを云ふ。
 れんざつ(廉察) 圖明らかに見分ける。
 れんざつ(憐殺) 圖あわれみさつする。
 れんざつ(憐殺) 圖殊に同情心(あはれ)を寄
 せるコト。いたくあはれむコト。
 れんざん(連山) 圖山の連(つ)なり續(つ)ひ
 てるコトを云ふ。
 れんし(廉士) 圖れんちを重ぜる人。
 れんし(孿子) 圖双子(ご)のコト。
 れんし(歛死) 圖死人のかげれを、取りを
 さめるコトを云ふ。
 れんじ(連子) 圖窓(まど)に設(た)けられたる
 格子(か)の、格子窓(か)のコト。
 れんじ(連枝) 圖貴人の、兄弟(あ)姉妹(あ)
 のコトを云ふ語。
 れんしち(練修) 圖學藝(がく)を勉強(べんきやう)す
 るコト。さらふコトを云ふ、

れんじつ(連日) 圖日々、即ち毎日のコト。
 れんじふ(練習) 圖教(し)えられたるコト
 を忘(わ)れぬ爲めに繰(くり)返しさらふ
 れんじや(聲車) 圖天子のお召しあそばす
 御車(みくるま)のコトを申す。
 れんじや(連射) 圖つづけさまに銃を放つ
 コト。つづけるコト。
 れんじゆ(連珠) 圖つづけてつなぎ合した
 る玉を云ふ。
 れんじよ(連署) 圖連名に同じ。
 れんじよ(憐恕) 圖同情してさびめ立てせ
 めコトを云ふ。
 れんじよ(連如) 圖水のしたより落る状(あ)。
 れんしん(連進) 圖つづけさまに進み行く
 コト。進(すす)むなりて進み行くコト。
 れんじまど(連子窓) 圖格子のはめてある
 窓のコトを云ふ。
 れんじやち(戀情) 圖こひしきふ、切なる
 情(なさけ)のコト。愛情。
 れんじやく(連借) 圖連名にて金子をかり
 るコトを云ふ。
 れんじやく(連尺) 圖物を荷負(か)ふ具、二
 つの板(いた)に繩(ひ)をつなぎて、脊(せ)に
 へ下げるやうにせし物。風呂敷(ふろしき)な
 どに品物を包みて、肩(かた)より腋下(あしもと)に

れんけ、れんさ

れんさ、れんし

れんし

れんし、れんせ
れんじゆく(練熟) 箇物事に十分なれ達し
てゐるコト
れんじゆつ(練恤) 箇あはれみで物などを
めぐむコトを云ふ
れんじよち(連勝) 箇勝ちつづけるコト
れんじよち(連稱) 箇つづけてさなへ呼ぶ
コト
れんじふがん(練習艦) 箇海軍軍人が、練
習の用に供する軍艦のコトを云ふ
れんじふより(練習用) 箇練習の用に使ふ
もの、總稱
れんせい(廉正) 箇廉潔にして正直なるコ
ト
れんせい(廉政) 箇みす内に於てみそなは
る、政事、院政(院に同じ)
れんせい(練精) 箇れりみがくコト
れんせい(連聲) 箇人の呼びなつる尾につ
いて呼ばはるコトを云ふ
れんせち(連宵) 箇毎夜、毎晩
れんせき(憐惜) 箇あはれみておしむコト
太(く)おしむコトを云ふ
れんせつ(廉節) 箇みさほの正しきコトを
云ふ
れんせつ(連接) 箇つらなりつづいてゐる
きんせん(連戦) 箇戦ふ度
れんせん(連然) 箇涙(れん)を流すさま
れんせん(連錢馬) 箇馬の毛色の稱、あ

れんそ、れんた
しけの馬のコトを云ふ
れんぞく(連續) 箇つづひである
れんぞく(連打) 箇つづひさまにうつコト
れんたい(聯隊) 箇陸軍の軍制(れん)の名に
て、即ち三大隊十二中隊より成れる一
隊のコトを云ふ
れんたい(連連) 箇聯及(れん)に同じ、即ち
つらなりおよんでゐるコト
れんたい(連帶) 箇二人以上の人が、或る
事件に連(れん)なつて、共に其の責任を負
つ(れん)コトを云ふ
れんたい(連退) 箇二人以上の人が、一所
になつて退(れん)ぞくコト
れんたい(廉臺) 箇貴人の座所のコトにて
一室の内に一段(れん)高き處を設けて、す
だれを垂(れん)れたるさ、このコトを云
ふ
れんたい(連臺) 箇昔、人を載せて川を渡
すに用ひし道具、即ち板に棒(れん)を二本
つけて、其上に人を載せて擔(れん)き行き
しもの
れんたい(連臺) 箇はすのうてな
れんたい(憐悼) 箇死者をあはれみいたむ
コト、なげきいたむコト
れんたい(連道) 箇天子の御事(れん)の通
つ(れん)せらる道筋(れん)の稱

れんた、れんて
れんたく(練擇) 箇えらぶコト、よりぬく
コトを云ふ
れんたく(練達) 箇物事に熟達(れん)せる
コトを云ふ
れんたん(練丹) 箇れりやくのコト
れんたん(練炭) 箇れり炭のコト、即ち石
炭(れん)を粉末として、練(れん)りかためた
る炭(れん)たごんのコトを云ふ
れんたい(聯隊旗) 箇聯隊の旗にて、即
ち軍旗のコト
れんち(廉耻) 箇節義(れん)を重(れん)する正
しき精神のコトを云ふ
れんち(蓮池) 箇蓮の生する池はす、
れんちやく(戀着) 箇ほれるコト
れんちやく(爲め心の迷) 箇えるコト
れんちやく(廉中) 箇みす、すなはちの垂(れん)
れてゐる内(れん)を轉じて大名(れん)華族
の(れん)などの妻女(れん)を貴びて云ふ語
れんちやく(連中) 箇組合(れん)、仲間(れん)
道づれのコトを云ふ
れんちやく(廉直) 箇正直にして廉潔(れん)
なるコトを云ふ
れんてい(廉貞) 箇廉潔にして操(れん)
の正しきコトを云ふ
れんてい(北斗星) 箇
第五位にある星の名
れんてち(連朝) 箇毎あさのコト

れんてつ(練鐵) 箇十分にきたえたる鐵
れんどう(練童) 箇容貌(れん)の美しき子供
(れん)美少年(れん)
れんない(廉内) 箇すだれの内、即ちみす
の内のコトを云ふ
れんなく(饑肉) 箇しむらのコト
れんなく(蓮肉) 箇はすの實(れん)
れんなく(煉乳) 箇煉(れん)り固(れん)まらせ
たる牛乳、即ちミルクのコト
れんねん(連年) 箇まいごし
れんばい(連誹) 箇連歌の誹句のコトを云
ふ
れんばい(連敗) 箇つづひさまにまける
れんばち(連峰) 箇山の峰(れん)の連(れん)なつ
てゐるコトを云ふ
れんばち(聯邦) 箇二國以上の國が、互ひ
に條約(れん)を結(れん)びて、其の政事を共
同(れん)にてなすコトを云ふ
れんばち(連房) 箇部屋(れん)のつづひてゐ
るコト
れんばく(簾箔) 箇みすのコト
れんばつ(連發) 箇つづひさまに大砲など
を放(れん)つコトを云ふ
れんはん(聯翩) 箇鳥などが相連りて飛び
行くさまを云ふ
れんはん(連判) 箇二人以上の人が、共に
其の責任(れん)を負ふべく判(れん)を按(れん)コ
ト

れんば、れんは
ト、又は捺したる判のコト
れんはんじやく(連判狀) 箇二人以上の人
々が或る事實(れん)につきて、其を守(れん)
り又た其れを履行(れん)すべく、其の事
實(れん)を記載(れん)したる帳面を作り、
其れに連名して判(れん)を捺(れん)したるもの、
れんばつじやく(連發銃) 箇一度に彈丸(れん)
を發(れん)して置(れん)ひて、續(れん)けさまに打
つ仕掛(れん)になれる銃のコトを云ふ
れんはんちやく(連判帳) 箇連判狀に同じ
れんはん(殮殮) 箇かりがりのコト
れんはん(憐憫) 箇あはれみかけるコト
なげきふかきコトを云ふ
れんぶ(廉夫) 箇正直なる男子
れんぶ(連府) 箇大臣を敬ふて云ふ語
れんべい(廉平) 箇潔白にして正しき
れんべい(練兵) 箇兵士を訓練(れん)するコ
ト、即ち戦ひ方をならすコト
れんべい(聯袂) 箇袂をつられるさまを云ふ意
にて、一所に、共にさまを云ふコト
れんべい(簾屏) 箇すだれを用ひて、しき
りさなしたるコトを云ふ
れんべい(練兵場) 箇兵士に戰術(れん)
を教育する廣き場所のコト
れんば(連歩) 箇美人のやさしき、あるき
つきのコトを云ふ

れんは、れんり
れんぼ(戀慕) 箇こひしき、ほれるコト
を云ふ
れんま(練麻) 箇れりたる麻(れん)糸、
れんま(練磨) 箇れりみがくコト
れんま(學問及
び技藝に精を出して勉強するコト)
れんみん(憐愍) 箇憐憫(れん)に同じ
れんむ(練武) 箇武術(れん)をれりみがくコ
トを云ふ
れんめい(連名) 箇名を連(れん)れて書くコ
ト、又は書きたるもの
れんめい(廉明) 箇正直にして暗(れん)き事
のなきコトを云ふ
れんめい(連盟) 箇多くの人々が、共に
ちかひをたつるコトを云ふ
れんめん(連綿) 箇引きつづけて絶(れん)ざ
るコトを云ひ表はすに用ゆる語
れんや(連夜) 箇毎晩(れん)さまを云ふコト
れんやく(煉藥) 箇れりたる藥、即ちれり
藥(れん)
れんよ(叢輿) 箇天子の御車(れん)
れんよち(連用) 箇つづけて用ゆるコト
れんらく(連絡) 箇つらなり合つてゐるコト
つらなり合つてゐるコト
れんり(廉吏) 箇れん直(れん)なる役人
れんり(連理) 箇樹(れん)の枝が、他の樹の枝
と連(れん)なりて、又(れん)を爲せるものを
れんは、れんり

ろくき、ろうき、

ろくきよ(籠居)窓家ののみさぢこもりて
外出(し)せぬコトを云ふ。
ろくきん(鏝金)窓金を以てちりばめ飾

ろうこ、ろうし

ろうこ(蠅舂)窓虫の名、けらのコト、
ろうこ(漏鼓)窓時刻(れこ)を知らせる爲め
に、鳴(か)す太鼓(か)の稱。

ろうし、ろうた

ろうし(樓上)窓田畑(り)の畝(ぢ)の上の
コトを云ふ。
ろうし(樓下)窓田畑(り)の畝(ぢ)の下

ろうた、ろうも

ろうた(漏脱)窓ぬかしおさすコト。も
れおさすコトを云ふ。
ろうた(壁斷)窓物事を獨り占めにす

ろうや、ろか

ろうや(朧夜)窓おぼる月夜のコト、
ろうや(籠絡)窓人を我が手にくるめ、
むコト。まるめるコト、

ろかい、ろく

ろかい(權權無)窓權もなければ權
(じ)もなしと云ふ意より來りて、たより
なし。詮方(た)なくあり、

ろく、ろくか 六、陸、勒、助、鹿、麓、漣

ろく(六) ①一と五を合したるがづ、
 ②陸(陸) ③六に同じ ④當然(当然) ⑤まじめ
 ⑥總て形状の正しくさゝのへるコト、
 ⑦(助) ⑧地脈(地脈) ⑨土地のすぢ ⑩殘分、
 ⑪即ちのこり、あまりのこト、
 ⑫(勒) ⑬(助) ⑭(鹿) ⑮(麓) ⑯(漣)
 ⑰(漣) ⑱(漣) ⑲(漣) ⑳(漣) ㉑(漣)
 ㉒(漣) ㉓(漣) ㉔(漣) ㉕(漣) ㉖(漣)
 ㉗(漣) ㉘(漣) ㉙(漣) ㉚(漣) ㉛(漣)
 ㉜(漣) ㉝(漣) ㉞(漣) ㉟(漣) ㊱(漣)
 ㊲(漣) ㊳(漣) ㊴(漣) ㊵(漣) ㊶(漣)
 ㊷(漣) ㊸(漣) ㊹(漣) ㊺(漣) ㊻(漣)
 ㊼(漣) ㊽(漣) ㊾(漣) ㊿(漣)

ろくか、ろく、

秀ひでたる六人の稱、即ち在原業平、
 文屋康秀、小野小町、僧正遍昭、喜撰法
 師、大伴黒主の六人、
 ①ろくか(鹿) ②(鹿) ③(鹿) ④(鹿) ⑤(鹿)
 ⑥(鹿) ⑦(鹿) ⑧(鹿) ⑨(鹿) ⑩(鹿)
 ⑪(鹿) ⑫(鹿) ⑬(鹿) ⑭(鹿) ⑮(鹿)
 ⑯(鹿) ⑰(鹿) ⑱(鹿) ⑲(鹿) ⑳(鹿)
 ㉑(鹿) ㉒(鹿) ㉓(鹿) ㉔(鹿) ㉕(鹿)
 ㉖(鹿) ㉗(鹿) ㉘(鹿) ㉙(鹿) ㉚(鹿)
 ㉛(鹿) ㉜(鹿) ㉝(鹿) ㉞(鹿) ㉟(鹿)
 ㊱(鹿) ㊲(鹿) ㊳(鹿) ㊴(鹿) ㊵(鹿)
 ㊶(鹿) ㊷(鹿) ㊸(鹿) ㊹(鹿) ㊺(鹿)
 ㊻(鹿) ㊼(鹿) ㊽(鹿) ㊾(鹿) ㊿(鹿)

ろくさ、ろくし

表す語、
 ①ろくさい(鹿背) ②(鹿背) ③(鹿背) ④(鹿背)
 ⑤(鹿背) ⑥(鹿背) ⑦(鹿背) ⑧(鹿背) ⑨(鹿背)
 ⑩(鹿背) ⑪(鹿背) ⑫(鹿背) ⑬(鹿背) ⑭(鹿背)
 ⑮(鹿背) ⑯(鹿背) ⑰(鹿背) ⑱(鹿背) ⑲(鹿背)
 ㉑(鹿背) ㉒(鹿背) ㉓(鹿背) ㉔(鹿背) ㉕(鹿背)
 ㉖(鹿背) ㉗(鹿背) ㉘(鹿背) ㉙(鹿背) ㉚(鹿背)
 ㉛(鹿背) ㉜(鹿背) ㉝(鹿背) ㉞(鹿背) ㉟(鹿背)
 ㊱(鹿背) ㊲(鹿背) ㊳(鹿背) ㊴(鹿背) ㊵(鹿背)
 ㊶(鹿背) ㊷(鹿背) ㊸(鹿背) ㊹(鹿背) ㊺(鹿背)
 ㊻(鹿背) ㊼(鹿背) ㊽(鹿背) ㊾(鹿背) ㊿(鹿背)

ろくし、ろくす 勒

ろくしゆ(鹿首) ①(鹿首) ②(鹿首) ③(鹿首) ④(鹿首)
 ⑤(鹿首) ⑥(鹿首) ⑦(鹿首) ⑧(鹿首) ⑨(鹿首)
 ⑩(鹿首) ⑪(鹿首) ⑫(鹿首) ⑬(鹿首) ⑭(鹿首)
 ⑮(鹿首) ⑯(鹿首) ⑰(鹿首) ⑱(鹿首) ⑲(鹿首)
 ㉑(鹿首) ㉒(鹿首) ㉓(鹿首) ㉔(鹿首) ㉕(鹿首)
 ㉖(鹿首) ㉗(鹿首) ㉘(鹿首) ㉙(鹿首) ㉚(鹿首)
 ㉛(鹿首) ㉜(鹿首) ㉝(鹿首) ㉞(鹿首) ㉟(鹿首)
 ㊱(鹿首) ㊲(鹿首) ㊳(鹿首) ㊴(鹿首) ㊵(鹿首)
 ㊶(鹿首) ㊷(鹿首) ㊸(鹿首) ㊹(鹿首) ㊺(鹿首)
 ㊻(鹿首) ㊼(鹿首) ㊽(鹿首) ㊾(鹿首) ㊿(鹿首)

ろくす、ろくち

①ろくす(録) ②(録) ③(録) ④(録) ⑤(録) ⑥(録)
 ⑦(録) ⑧(録) ⑨(録) ⑩(録) ⑪(録) ⑫(録) ⑬(録)
 ⑭(録) ⑮(録) ⑯(録) ⑰(録) ⑱(録) ⑲(録) ㉑(録)
 ㉒(録) ㉓(録) ㉔(録) ㉕(録) ㉖(録) ㉗(録) ㉘(録)
 ㉙(録) ㉚(録) ㉛(録) ㉜(録) ㉝(録) ㉞(録) ㉟(録)
 ㊱(録) ㊲(録) ㊳(録) ㊴(録) ㊵(録) ㊶(録) ㊷(録)
 ㊸(録) ㊹(録) ㊺(録) ㊻(録) ㊼(録) ㊽(録) ㊾(録)
 ㊿(録)

ろくち、ろくは

はさす六つの塵(ち)を云ふ意にて、色、
 ①ろくち(勒) ②(勒) ③(勒) ④(勒) ⑤(勒) ⑥(勒)
 ⑦(勒) ⑧(勒) ⑨(勒) ⑩(勒) ⑪(勒) ⑫(勒) ⑬(勒)
 ⑭(勒) ⑮(勒) ⑯(勒) ⑰(勒) ⑱(勒) ⑲(勒) ㉑(勒)
 ㉒(勒) ㉓(勒) ㉔(勒) ㉕(勒) ㉖(勒) ㉗(勒) ㉘(勒)
 ㉙(勒) ㉚(勒) ㉛(勒) ㉜(勒) ㉝(勒) ㉞(勒) ㉟(勒)
 ㊱(勒) ㊲(勒) ㊳(勒) ㊴(勒) ㊵(勒) ㊶(勒) ㊷(勒)
 ㊸(勒) ㊹(勒) ㊺(勒) ㊻(勒) ㊼(勒) ㊽(勒) ㊾(勒)
 ㊿(勒)

ろくば、ろくめ

ろくばりせき(六方石)図水晶(ろくばり)の一
名、其の形状よりして云ふ、
ろくふ(六府)図昔時宮中に置かれたる六
つの府、即ち左右の近衛府、左右の兵衛
府、左右の衛門府の稱、
ろくふ(六腑)図體內に在る六つの臟腑、
即ち胃、膽、大腸、小腸、膀胱、三焦の稱、
但し漢法醫の規定なり、
ろくふ(六部)図諸國の神社佛堂を拜(ろく
み歩)き廻(ろく)る人のコト、順禮、
ろくふ(六奉行)図幕府時代に武家
方に設けありし六つの奉行、即ち二人
の武者奉行、二人の旗奉行、二人の長持
奉行のコトを云ふ、
ろくばり(祿俸)図ふち。俸給、
ろくまい(祿米)図俸給として受る米、
ろくまく(肋膜)図肋骨の内側(ろくまく)を覆
ひ包むる薄き皮の稱、
ろくまくえん(肋膜炎)図病氣の名、肋膜
に熱を有(ろく)ちて強く痛むもの、
ろくみ(六味)図六つの味(ろくみ)、即ち酸(ろく
辛(ろく)甘(ろく)苦(ろく)鹹(ろく)淡(ろく)の
六つを云ふ、
ろくめい(鹿鳴)図詩經(ろくめい)より出たる故
事にて、自分の高き人を響應するコト、
ろくめん(六面)図六つの面、又は六つ面

ろくる、ろくわ

ろくる(轉轡)図くるまきのコト、しやち
まんりきのコト、傘の骨を一所に集め
て、傘を開いたり閉めたりする用を爲
すもの、稱、
ろくろく(陸陸)圖十分なるさま。ありあ
まつてる状態を云ひ表はす語、
ろくろく(碌碌)圖やくにたためさま、
らぶらしてゐるさまを云ふ語、
ろくろく(轆轤)圖車の過き行く齒音(ろく
の状(ろく)を云ひ表はす語、
ろくろく(漉漉)圖もれしたる。流れ出
る状態を云ひ表はす語、
ろくろく(轆轤)圖圓形形の陶器を製
するに用ゆるたい、
ろくろく(轆轤)圖説りてろくろくく
びさも云ふ、首の殊に長くして、自由に
伸び縮みし能ふと云ふもの、
ろくろかん(轆轤)圖鉈の一種、圓き
形状の物を細工するに用ゆるもの、
ろくろく(六六魚)圖六六、三十六の
鱗(ろく)ありと云ふ意よりして鯉(ろく)の
コトを云ふ、
ろくわ(蘆花)圖あしのはな、
ろくわ(爐火)圖あろりの火、
ろくわ(濾過)圖水氣の物をこすコト、

ろくわ、ろこん

ろくわ(露臥)圖はだかにてれるコト、道
路にれるコトを云ふ、
ろくわい(蘆葺)圖草の名、此の草の汁を
しぼり薬を取る、苦きもの、
ろくわち(曙光)圖ひさみのひかり、眼、
の光のコトを云ふ、
ろくわく(鹵獲)圖いけざるコト、分捕(ろく
)るコトを云ふ、
ろけき(露撒)圖封をせず開きたるまゝに
てくばる嫩文(ろく)の
ろけん(露顯)圖かくれたる事のあらはれ
知れるコトを云ふ、
ろけん(露見)圖内しよう事を人に知られ
たるコトを云ふ、
ろこん(露根)圖草木の根に土なくして、
其の根の見へてるもの、稱、
(ろけい)
ろこ(路訖)圖四方に面(ろこ)あるつやみ、
ろこつ(露骨)圖あたまのいただきの骨、
ろこつ(露骨)圖むきだし、かさりけのな
きコトを云ふ、
ろこん(露根)圖草木の根に土なくして、
其の根の見へてるもの、稱、

(ろくろ)

ろぞ(露坐)圖屋根のなき處に坐(ろぞ)るコ
ト、野天張(ろぞ)のコトを云ふ、
ろさい(遜齊)圖托鉢(ろさい)のコト、乞食(ろ
)の別名、
(ろしご)
ろし(路次)圖道々(ろし)みちすがら、
ろじ(露次)圖のじゆくするコト、
ろしち(蘆洲)圖あしの茂ひしげつてる淺
瀬(ろし)のコトを云ふ、
ろしや(蘆舎)圖小さき住宅、我が住宅を
人にへりぐだりて云ふ語、
ろじやち(路上)圖みちのうへ、みち、
ろしゆ(魯酒)圖いきほのぬるき酒、
ろしゆ(露宿)圖のじゆく同じ、
ろしゆつ(露出)圖あらわれ出るコト、
ろしん(路寢)圖表(ろしん)書院のコト、表ざ
しき(座敷)のコト、
ろじん(路人)圖道を歩み行く人、たび人、
ろじん(露及)圖霜(ろじん)をばらひたる刀の
コト、ぬきみ(抜刀)のコト、
ろさ、ろしん

(ろせせ)

ろせい(櫓聲)圖ギューギューと云ふ、櫓
をこぐおと、舟唄(ろせい)、
ろせいのゆめ(盧生夢)圖人生のはかなき
コトを云ひ表はしたる故事にて、かん
たんのゆめに同じ、
ろせき(鹵瘠)圖土地のやせてるコト。出
來のあしき土地、やせ地、
ろせつ(漏泄)圖水氣の外(ろせつ)へしみ出づ
るコト、もれるコトを云ふ、
ろせん(露洗)圖すすあし、ばだし、
(ろそぞ)
ろぞく(露粟)圖植物の名、トウモロコシ
に似たる物にて、是より砂糖をせいす、
(ろただ)
ろたけ(露臺)圖屋根のなき部屋、すすみ
臺などのコトを云ふ、
(ろちぢ)
ろちい(露たい)

(ろてて)

ろち(露路)圖茶道の語にて、茶屋へかよ
ふ道のコトを云ふ、
ろち(露地)圖家と家との間の道、せまき
道のコトを云ふ、
ろちやちこつ(顛頂骨)圖頭骨の一部にて
頭のでつべんの左右に在る平(ろち)つた
き骨の稱、
ろちよく(魯直)圖ばかしやうじきのコト
ろちりめん(紹縮編)圖織物の名、絹糸を
ちぢませて、絹の如く織りし物にて、夏
向の女の衣服となるもの、
(ろてい)
ろてい(路程)圖みちのほど、道のり、
ろてき(蘆荻)圖あしをなきコト、
ろてん(露店)圖やれのなき店、大道店(ろ
)せ、
ろてん(露點)圖物理学上の語にて、空氣
が非常に冷(ろてん)て液體に化せんとする
時の、温度のコトを云ふ、
(ろとう)
ろとう(露頭)圖むきだしあたま。かぶり
物をかぶらずに頭をあらはせるコト、
ろち、ろこつ

ろさう、ろひら 只

ろとら(爐頭) 圍いろりのほまじり、
ろとら(路頭) 圍みちばたのコト、
ろとん(魯鈍) 圍おろかなるにおきコト、

(ろな)

ろなち(無調) 圍古語もちろんに同じ、
ろなは(船繩) 圍舟の繩をあやつる繩の稱、
ろのま(爐間) 圍風爐、又はろりの設け
られある部屋のコトを云ふ、

(ろはは)

ろは(只) 圍ただと云ふ意を表はす語、
ろば(驢馬) 圍馬の一種、うさぎ馬、
ろばち(路傍) 圍みちばた、みちのそば、
ろばん(露盤) 圍塔(心)をなせる柱
の稱にて、塔の上に出出(カ)てるもの、

(ろひび)

ろひ(露費) 圍道中のつひえ、たびをする
入よう路用(カ)のコト、
ろひらき(爐開) 圍茶道の語にて、舊曆の
十月一日に、風爐をこちて、爐を開き用
ゆるコトを云ふ、

ろふ、ろほ

(ろふぶ)

ろふ(露布) 圍封筒に入れざる手紙のコト
捷戦(カ)を知るコト、
ろぶち(爐縁) 圍あるりのへり、
ぐるりのわくのコト、

(ろへべ)

ろへち(路標) 圍みちしるべの建石(カ)、
又は棒杭(カ)のコト、
ろべそ(船舳) 圍船の孔にはめて船を支
れある小きさほその稱、
ろへん(路邊) 圍あるりのそば、
ろへん(路邊) 圍みちばたみちのそば、

(ろほほ)

ろほ(蹠歩) 圍さぎ鳥が、歩むことき、のろ
き歩み方のコトを云ふ、
ろほ(盧簿) 圍行幸の行列のコト、天子の
みゆきのぎやうれつ、

(ろめ)

理由を天子に申し上げ奉るコト、
ろん(論) 圍議論すべき問題、
ろん(論) 圍議論する場處、
ろん(論) 圍議論して是非を断定す
るコトを云ふ、

ろん(論) 圍議論して定めるコト、
ろん(論) 圍議論する相手、
ろん(論) 圍議論する事からのかん
もくのコトを云ふ、

ろん(論) 圍論(カ)を立て、其の非
をなせるコトを云ふ、
ろん(論) 圍相手の説をさきやぶる、
ろん(論) 圍論(カ)の説を論じ、
ろん(論) 圍論法(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、

ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、

ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、

ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、

ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、
ろん(論) 圍論(カ)を論じ、

ろんた、ろんり

ろめい、ろんけ 論

ろめい(露命) 圍つゆの如くきゆる命、は
かなきいのちのコト、

(ろよ)

ろよう(路用) 圍旅をする入用、

(ろれ)

ろれつ(呂律) 圍もの云ひの容子のコト、
音聲の調子(カ)のコト、
ろれつ(羅列) 圍凡て物の正しくならん
るコトを云ふ、

(ろん)

ろん(論) 圍意見を述べて説き明すコト、
或る事實(カ)に就きて云ひ争ふコト、
考へ、意見、意志、
ろん(論) 圍議論の主意大がんとく、
ろん(論) 圍議論する人、
ろん(論) 圍議論する人、
ろん(論) 圍議論する人、
ろん(論) 圍議論する人、
ろん(論) 圍議論する人、
ろん(論) 圍議論する人、

わ

わ(吾) 圍われ。私。自分のコト、
わ(蛙) 圍又た、あま音す、虫の名、かへる
のコト、淫奔(カ)なるコトを云ふ、
わ(倭) 圍美しきコト、たなやかなるコト、
やさしきコト、美しき侍女、こしもさ
のコトを云ふ、
わ(窪) 圍くぼむ。くぼみてあるコト、
かさコトを云ふ、
わ(窩) 圍へこむ。くぼむ。くぼんであるな
り、十分ならぬさま、又は高からざる
状を云ふ語、
わ(蒿) 圍草の名、ちさのコトを云ふ、
わ(窩) 圍くぼみたる所の稱、深(カ)から
ざる穴(カ)のコトを云ふ、
わ(渦) 圍水の輪狀(カ)をなして廻(カ)つ
てあるもの、即ちうづ、うづまくコト、
うづまきのコトを云ふ、
わ(和) 圍又たくわ音す、やはらぐコト、
調(カ)なふ。おり合ふコト、仲直(カ)
をなすコト、精神の、ゆたかにしてす
こやかなるコト、時候の、ごかなるコト

わ 吾、蛙、倭、窪、窩 二〇一七

トを云ふ、

ろん(論) 圍其れから其れへと議論
をしてゆく、其の物までも論じゆく、
ろん(論) 圍議論すべき材料の骨子
(カ)なるもの、稱、

ろん(論) 圍議論のほか、
ろん(論) 圍議論して是非を定むる
るまでなまきコト、法外、
ろん(論) 圍議論して是非を定むる
るんけつ(論結) 圍議論のくぎり、
ろん(論) 圍人の手柄を相談し合
て定めるコトを云ふ、

ろん(論) 圍罪(カ)の輕重を調べて定め
る、
ろん(論) 圍有無を調べて定るコトを云ふ、
ろん(論) 圍争(カ)いさかひ、
ろん(論) 圍策論又は策略を述(カ)
べたてたる文章のコトを云ふ、

ろん(論) 圍論意に同じ、
ろん(論) 圍議論をする人を云ふ、
ろん(論) 圍議論のわけを證據だ
てるコトを云ふ、

ろん(論) 圍或る事實(カ)につきて
自分の意見を述べて論定するコト、又
は論じたる文章のコトを云ふ、
ろん(論) 圍はげしく議論をしあ
ふコト、舌戦(カ)、

ろん(論) 圍物事の是非を定めて其
ろん(論) 圍物事の是非を定めて其

ろんき、ろんそ

わうし、わうし
黄色(ワウシ)の花を咲かすもの。
わうこんぶつ(黄金佛) 函純金にて造りたる佛(ワウ)の尊像(ワウ)。
わうざ(王佐) 天子を佐(ワウ)けて政事(ワウ)を執(ワウ)る役人。
わうし(王師) 函天子の率(ワウ)あらるるいくさのワウ。
わうし(王子) 函天子の御一族中に生れられた男子の稱。
わうし(横死) 函災難(ワウ)に依りて不意(ワウ)に死すワウ。
わうし(奥旨) 函おくふかき考(ワウ)え(ワウ)ふかきおぼしめし。「のたれ死(ワウ)」。
わうし(枉死) 函道路にて死すワウ。即ち(ワウ)の天子の男の御子。
わうし(王事) 函天子の行(ワウ)なほせられ御事(ワウ)。
わうじ(往時) 函むかし。
わうじ(往事) 函すぎさりたること。
わうし(押收) 函差し押(ワウ)える。其物(ワウ)を取りよぐるワウ。
わうし(王室) 函帝王のお家。
わうじつ(往日) 函先日(ワウ)さきの日。
わうし(王者) 函人に王たる人。
わうし(往者) 函以前(ワウ)まへかぎ。
わうしん(王臣) 函王の家来。

わうし、わうせ
わうし(御手) 函いそがはしくはたらく熱心(ワウ)に事務を執(ワウ)る。
わうし(御將) 函將(ワウ)の駒(ワウ)の駒(ワウ)の駒(ワウ)。
わうじやう(王城) 函王宮に同じ。
わうじやう(往生) 函死すワウ。據處(ワウ)なく得心するワウ。此の世を去りて佛(ワウ)の傍(ワウ)にて安樂に暮(ワウ)しゆくワウ。ワウを云ふ。
わうじやく(厄弱) 函人の身體(ワウ)の常に弱(ワウ)きワウを云ふ。
わうせい(王政) 函王の行ふ政事。
わうせい(王制) 函帝王のもうけられたる制度、おきてのワウ。
わうせい(旺盛) 函頗る盛(ワウ)なるワウ。
わうせい(往聖) 函古(ワウ)の聖人。
わうせい(横政) 函よこしまなる政事。むごき政治のワウ。
わうせき(往昔) 函むかしのワウ。
わうせつ(横截) 函横(ワウ)にたち切るワウ。
わうせい(王政維新) 函天下の大政(ワウ)が、悉く天皇の御手より出でて、萬事(ワウ)が能く新たに改まりたるワウを云ふ。
わうせい(王政復古) 函古(ワウ)は天皇御自身に、天下の大政をしろしめされてゐたもふた、然るに中世に至りて

わうせ、わうた 應 110110
大政が武門の手に歸した其れが又た古の通り天皇御自身にて、政事を統(ワウ)たもふやうになつたワウを云ふ。
わうせりくわんねんぶつ(往生觀念佛) 函心にすまねども、是非(ワウ)なく承知(ワウ)するワウを云ふ。
わうざ(應) 函動しようちする。引きふけるワウかな。
わうぞく(王族) 函王者の御一族。
わうそん(王孫) 函王者のおまご。草の名つくばれ草の異稱。
わうた(往代) 函往昔(ワウ)に同じ。
わいた(横道) 函よこみち。それみち。横着(ワウ)なるワウを云ふ。
わいた(王道) 函王者の行ふ道。ただしきおきて。
わいたく(王澤) 函王者のめぐみのワウ。
わいたつ(横奪) 函うばいさる。よこどりをするワウを云ふ。
わいたん(横斷) 函よこにたち切るワウ。
わいたど(御歌所) 函天皇陛下の御詠歌(ワウ)に關する事務(ワウ)をつかさどり且つ臣民より詠進(ワウ)する歌(ワウ)を管理する宮中(ワウ)の一局の稱。
わいたちきつじつ(黃道吉日) 函婚姻祝事其の他凡て物事を爲すに良(ワウ)しきさ

はりなしと云ふ日のワウを云ふ。
わうちやく(横着) 函するワウ。正(ワウ)しからぬ(ワウ)知らぬ體(ワウ)で不正な事を爲すワウを云ふ。
わうど(黃土) 函あか土にて製造したる繪具(ワウ)のワウを云ふ。
わうど(王土) 函天子の治(ワウ)めたまへる領分の土地の稱。
わうてき(横笛) 函横(ワウ)に持ちて吹く笛(ワウ)よこぶえ。
わうなん(横難) 函思ひもよらぬ災難(ワウ)のワウを云ふ。
わうによこ(王女御) 函皇女若しくは王女の女御(ワウ)と爲(ワウ)せ給へる御方のワウトを申す。
わうねん(往年) 函過ぎ去りたる年、即ち昔(ワウ)のワウを云ふ。
わうばく(横葉) 函木の名、きはだのワウ。
わうはふ(王法) 函王者の設けたる法律、規則(ワウ)のワウを云ふ。
わうばん(横飯) 函飯(ワウ)を盛(ワウ)りて客に侷(ワウ)むるワウ。昔時正月に一家中の人々が集りて、祝ひたる酒宴の稱。
わうばくしゆり(黄檗宗) 函禪宗(ワウ)の一派の名にて、隱元禪師(ワウ)の開祖(ワウ)にかゝるもの。

わうひ(王妃) 函王のおきさき。
わうひ(横費) 函むだなつひへ。むだづかひのワウを云ふ。
わうふ(王父) 函死せし祖父(ワウ)を云ふ。
わうふく(往復) 函往(ワウ)と歸(ワウ)るをゆきかへりのワウ。手紙のやりさりのワウを云ふ。
わうぶん(横文) 函横(ワウ)に書く文書と云ふ意にて、歐文(ワウ)のワウを云ふ。
わうふく(往復切符) 函汽車電車などの乗車切符の一種にして、往(ワウ)も復(ワウ)も一枚の切符にて、其の用を足すもの。此の種の切符には賃金の割引あり。
わうふく(復葉書) 函葉書書の一種にて、發信用(ワウ)と返信用(ワウ)との二枚を一つに連(ワウ)ねたるものにて、特に返事を必用とする時に用ゆるもの。
わうへい(横柄) 函たかぶるワウ。えらばるワウを云ふ。
わうへん(横返) 函ゆきかへり。ゆきき、わうぼ(王母) 函死せし祖母(ワウ)を云ふ。
わうばちち(往日) 函曆の語にて、凶日の名、之(ワウ)に當たれる日は、外出の旅立(ワウ)。出陣などは見合してなまぬ(ワウ)しと云ふ。此の日は一年に十一日

あり。
わうめん(王民) 函帝王の支配を受けつゝある人民と云ふワウ。
わうめい(王命) 函王の發する命令。
わうやう(汪洋) 函水面などの廣々として大なるワウを云ふ。
わうらい(往來) 函ゆくさかへる。ゆきかへりゆ(ワウ)ゆききする道。道路のワウ。やりさりする手紙の文案(ワウ)を示したる書物のワウ。
わうらいどめ(往來止) 函道路(ワウ)を改修(ワウ)する場合の時、一時往來の通行を止(ワウ)むるワウ。
わうりち(横流) 函河流などのあふれて外(ワウ)へ出で流(ワウ)るを云ふ。「地(ワウ)わりやう(王領) 函王者の支配する領分(ワウ)わりやう(横領) 函よこどり(ワウ)かすめてさるワウ。
わうわち(汪洋) 函總て廣々(ワウ)として、水の深き状を云ふ語。
わうわち(往往) 函時々(ワウ)。折折(ワウ)よりと云ふ意を表はす語。
(わか)が
わか(和歌) 函漢歌、即ち詩(ワウ)に對してい

わけが、わこい

わけがら(譯柄) 圖すじあひ。物事のすぢみちのこト。
わけき(分葱) 圖葱の種類にて、葱(葱)より小さく細く、軟らかき物、春先に食料となる。
わけぎ(輪袈裟) 圖袈裟の一種にて、巾(巾)二寸ほどにて、環の如くに作り、頸へかけて胸へ垂れ置くもの。
わけどり(別) 圖取り別け、さくべつ。
わけどり(分取) 圖物を分けて取る。
わけへだて(別隔) 圖彼れと此れと殊に區別するこト。かた手打の取りあつかひのこトを云ふ。
わけまへ(分前) 圖分配(分) 高、盛りだが、わけみち(譯道) 圖わけがらに同じ。
わけもの(箱物) 圖食物を入れる小箱(小箱)の一種にて、薄き板を輪狀に曲けて作られたる物、(曲物)。
わけめ(分目) 圖分ちたるこト。勝敗の分るるさき、即ち天下分目の合戦など。

(わい) (わい)

わこ(和子) 圖小兒(小兒)のこトを美(美)しく云ふ語。
わこ(和語) 外國語に對して、我が國の言

わこく、わさは 業、技、態、禍、災

わこく(和國) 圖我が日本國のこト。
わこせ(我御前) 圖男子が、女子をたしみて呼ぶに用ゆる語。
わこし(和琴) 圖やまこ、あつまこ、あつこし(和事師) 圖男女人間の痴情についての關係を演ずる役者。
わこん(和魂) 圖大和魂の略語。

(わろ) (わろ)

わさ(輪差) 圖輪狀(輪) に結びたる紐(紐)のこトを云ふ。
わさ(業) 圖又た事の字をも書く、しわざ、しごと、なす事、つごめさする事柄(事柄)、職業(職業)、人(人)のつごめさ。わざ(技) 圖習ひ覚えたる様々の仕方(仕方)、技術(技術)のこトを云ふ。
わさうた(謠歌) 圖何んの(何ん) (り) じ、ろもなくて、世に流行(流行)せる俗歌(俗歌)、即ちいやしき流行歌(流行歌)の稱。
わさうち(早瓜) 圖早成(早成)の瓜類。
わさと態(態) 圖、ささら、わざわさ。
わさはひ(禍) 圖思はぬ事より生ずる難儀不意の心配、災難(災難)。
わさはひ(災) 圖禍に同じ。

わさは、わさみ

わさはひほし(炎惑) 圖彗星(彗星)。
わさひ(山葵) 圖深山に生ずる草にて、其の葉根ともに食味(食味)の調理に用ひらる、多くは畑に作らる。
わさびと(俳優) 圖役者のこト。
わさびおろし(山葵卸) 圖金(金) 又は陶器にて製したる細かき尖(尖) りたる、粒粒(粒粒)の一面に在る物にて、山葵や大根を摺り卸すに用ゆる具。
わさびすまし(山葵漬) 圖すまし汁の中へ山葵を摺り卸し味を、きかせたる汁。
わさびじやうゆ(山葵醬油) 圖味淋(味淋) 醬油を等分ほどに合し、其の中へ山葵を摺り卸して用ゆるもの。
わさひだいのん(山葵大根) 圖大根の一種にて、辛味(辛味)の殊につよき物にて、卸し大根に用ゆるものなりと云ふ。
わさきの(早物) 圖野菜(野菜) 物の早く出たるもの、野菜のはしり。
わさきの(技物) 圖又た業物とも書く、能く切(切) れる又物のこト。
わさわざ(態態) 圖特に、殊更(殊更) にさ云ふ意を表はす語。
わさん(和産) 圖日本にて出来たる物の總稱。我が國の製出品。
わさん(和算) 圖洋算の對にて、日本の算

術(術)のこトを云ふ。
わさん(和讃) 圖佛教(佛敎)の文句を我が國の語に譯(譯)して唄ふこトを云ふ。

(わし) (わし)

わし(鷺) 圖鳥の名、鷹(鷹)に似たる鳥にて其の形殊に大きく、嘴(嘴)は鋭(鋭)くして性質は猛悪(猛悪)なり、力(力)強(強)く常に深山に棲(棲)ひて、小鳥小獸(小鳥小獸)を捕(捕)へ食ふ。
わし(私) 圖われ、わたくしのこト。
わじ(和字) 圖我國にて作りたる文字、即ち假名(假名)、漢字に對しての稱(國字)。
わじり(和酬) 圖他人より送られたる詩歌に對し、自分が亦た詩歌を作りて返し送るこト。
わじつかみ(鷺摺) 圖大手を廣(廣)げて、無作法に物をつかむこト。
わしふ(和習) 圖我が國のならばせ、即ちしきたり。
わじまぬり(輪島塗) 圖漆器(漆器) 細工の一種にて、能登(能登)の輪島地方より産する物にて、椀盆菓子器など多し。
わじゆち(和上) 圖眞言宗(眞言宗)にて云ふ語にて、和尙(和尙)のこト。
わさん、わしや 鷺、私

わじゆく(和熟) 圖仲のよきこト、むつまじきこト。
わじゆん(和潤) 圖やはらぎうるほう(ほう) 物かやはらかく、ふやかなるこトを云ふ。
わじゆん(和順) 圖すなほ、おとなし順氣、即ち氣候のおだやかなるこトを云ふ。
わしよ(和書) 圖和文にて書きあらはせしわしん(和親) 圖したしくて仲よきこト。國と國とのしたしみのこト。

わす(和) 圖他人の作りたる詩や歌に答へべく作る。
わす(和) 圖動仲なほりする、むつまじくなる。やわらぐこト。
わす(忘) 圖動覚(覚) えて、ぬ(ぬ) 物を或る所に置ひて氣のつかぬ(つかぬ) 知つてた事を思ひ出せず、過す。
わすれがち(忘勝) 圖わすれやすきこト。
わすれをさ(忘草) 圖うきをなくさめ忘するこト。煙草(煙草)の別名。草の名。
わすれささ(忘咲) 圖かえり咲のこト。
わすれしも(忘霜) 圖別れ霜のこト。
わすれみづ(忘水) 圖野原(野原)の中を、ち

(わす) (わす)

わすれ(腸) 圖はらわたのこト。
わた(海) 圖雅語にて、海(海)のこトを云ふわた(綿) 圖まわた。きわたの總稱。
わたい(私) 圖わたくしのなまり。
わたい丸(綿丸) 圖綿を入れたる衣服。
わすれ、わたい 腸、海、綿 二〇三六

(わせ) (わせ)

わせ(早稻) 圖稻(稻)の一種にて、一番先に實(實)の熟(熟)するものなれども、其の粒(粒)は小さし。
わせい(和製) 圖我國にて製したる物品のわせだ(早稻田) 圖早稻(早稻)の作つてある田のこト。
わせつ(話説) 圖話(話) 物語のこト。
わせん(和船) 圖日本形の船(船)。
わせん(和戦) 圖仲なほりする、戦ふさのこトを云ふ。

(わた) (わた)

わた(腸) 圖はらわたのこト。
わた(海) 圖雅語にて、海(海)のこトを云ふわた(綿) 圖まわた。きわたの總稱。
わたい(私) 圖わたくしのなまり。
わたい丸(綿丸) 圖綿を入れたる衣服。
わすれ、わたい 腸、海、綿 二〇三六

わたい、わたく、蟻、私

わたいれきもの(綿入衣物)図綿を入れたる衣服わた子のコト、
わたいればおり(綿入羽織)図綿を入れたる羽織、書生羽織のコト、
わたうち(綿打)図綿をうつを職とする人
◎綿をうつコト、
わたうちゆみ(綿打弓)図綿弓(きび)に同じ
わたか(腸香)図魚の名、鮒(うなぎ)の一種にて長さ五六寸位にして、酢漬(すく)となして貴(う)なる、近江の琵琶湖(びわこ)の産が最も味(あじ)美なり、
わたかみ(綿織)図織(か)の肩に當る部へ肌觸(か)のせぬやうに、綿をあてたるものを云ふ、
わたかまり(奸邪)図又た邪曲(よこしま)も書く、よこしまなる心を抱てるコト、
わたかまる(蟻)自働グルグルに巻ひてる輪(か)のやうになつてる、即ち蛇(へび)などの、
わたくし(私)図正しからぬ、おほやけならぬ内しようこ、秘密(ひそか)◎我のかつてなこ◎自分のみ利益となるコト◎味方(かた)にのみ利益を得んとするコト、
わたくし(私)図自分と云ふ代名詞、わたし、拙者(せつしや)、

わたく、わたし

わたくり(綿織)図綿の中に包(か)まれある種(か)をくり取るコト、
わたくしごと(私事)図自分のコト◎公(こう)ならぬコト◎よこしまなるコト、
わたくしさま(私様)図私事に同じ、
わたくしもの(私物)図自分一身のコト◎自分の所有物のコト、
わたくりくるま(綿織車)図綿花をくりて其の中に在る種を取り去る器具(か)、
わたけ(綿毛)図獸(け)の極く軟(な)かな毛のコトを云ふ、
わたこ(綿子)図わたを入れたる衣服の稱、
わたさし(渡座)図雅語にて、やをとり、やごがひ、引越(ひき)のコト、
わたし(私)図自分(わ)我(わ)、
わたし(渡)図川(が)をわたりゆくコト、
わたし(渡場)図船渡(ふね)のある場所のコトを云ふ、
わたしあふ(渡合)自働斬りあふ◎たたかふ。はたし合ふ、
わたしいた(渡板)図物と物との間に渡しかけてある板(か)◎甲(か)より乙(に)へ行くべき其間に、渡しかけて在る板、
わたしあぬ(渡金)図テッキユウの事、即ち魚類(う)を突(つ)に用ゆる火の上へ渡し

わたし、わた、渡、轍 二〇三八

かけて置く轍(か)の細き棒(か)、
わたしせん(渡錢)図渡船に乗るちんせん
わたしちん(渡賃)図前條に同じ、
わたしふね(渡船)図人(ひと)を乗せて渡す舟、
わたしちり(渡守)図わたし舟の船頭(か)の稱、
わたす(渡)他動此方より彼方へ物をさづける◎船にて水上を、此岸(か)より彼岸(か)へ送りやる◎此方より彼方へ橋(か)などをかける、
わたせ(渡瀬)図川の瀬(せ)の渡るによるしき處のコトを云ふ、
わたせぬ(綿種)図綿の中に包まれてある種子(か)のコトを云ふ、
わたせぬ(腸膏)図魚を料理する家にて、其腸(か)を入れて置く桶(か)のコト、
わたせぬ(轍)図車の通り行きたる後(か)に、残れる齒(か)の痕(か)のコトを云ふ、
わたどの(渡殿)図雅語にて、細き廊下(か)と云ふコト、
わたに(腸煮)図料理の一種にて、鮑(か)の内(か)腸(か)を一所に、味淋醬油(か)にて煮きたるもの、
わたぬき(腸抜)図腸(か)を取り去りて、薄鹽(か)を施したる魚(か)のコトを云ふ、
わたぬき(綿抜)図綿入衣物の綿(か)を去りて

裕(ゆ)と成したる物、

わたのそこ(海底)図雅語にて、海の底、
わたのはら(海原)図雅語にて、廣々とした海(か)と云ふコト、
わたぼろし(綿帽子)図眞綿(か)を薄くのはして、帽子(か)の形になしたる物、即ち婚姻(か)の夜に、新嫁(か)の被(か)るカツキワタの稱、
わたや(綿屋)図わたを賣る家、わたをこしらへる處、
わたゆみ(綿弓)図綿を打つ道具にて、鋼(か)又は竹にて製したる弓形(か)の物、
わたり(徑)図さしたるコト、
わたり(渡)図わたるコト◎わたしたる略◎外國より海をわたつて來たりしコト即ち外國より來(か)るコト、
わたりせ(渡瀬)図歩るひて渡られるべき淺瀬(か)のコトを云ふ、
わたりいた(渡板)図舟より岸へかけ渡して往來(か)する板、
わたりぞめ(渡初)図新に出來た橋を最初に渡るコト、
わたりどの(渡殿)図長き廊下のコトを云ふ
わたりどり(渡鳥)図春さか秋さかに定つて來る鳥(か)のコト、即ち燕(か)や雁(か)など

わたの、わたり、徑、渡

ごの種類を云ふ、

わたりびと(渡人)図彼處(か)此處(か)へ渡り奉公(か)する人◎他處より入り込んで來た働人(か)、
わたりの(渡物)図外國より我國へ來た品物、舶來品(か)、
わたりがせき(渡碇)図先(か)から先へこ働(か)ひて歩くコト、
わたりはち(渡奉公)図主人を取りかえて、奉公して歩くコト、
わたる(渡)自働川(か)を越(か)え行く◎或る土地より此の土地へ移り來る、一方より一方へつづつひてる◎物事に廣く通ずる物事を能く知つてる、
わたわだ(渡戰)圖なづをづ、わなわなの誑(か)、こわがるコト、
わたん(和談)圖仲なほりの相談を云ふ、

わたり、わちか

(わちか)

わちか(輪違)圖絞處(か)の名稱にて、二つの輪(か)が打ち違ひになりて、半分づつ重(か)なつてるもの、稱、

(わつづ)

わつづ(和殿)圖其方(か)と相手(か)の人に向つて云ふ對等(か)の代名詞、

(わたり)

わたり(語頭)圖話(か)のこぐち、
わたの(和殿)圖其方(か)と相手(か)の人に向つて云ふ對等(か)の代名詞、
わため(輪止)圖車の阪路を上り下りする時に、輪(か)の走り下(か)らぬやうに引き止る具、

わつつか、わさめ

わさる、わに 鰐、鰐

わたる(輪取)自動輪のやうに開き形にな

(わな)

わな(網)又た(罟)とも書く、繩(ワ)を輪状(ワ)にして、獸(ワ)や鳥(ワ)の脚(ワ)にからみつけて捕(ワ)ふるもの(ワ)計(ワ)を用ひて、人を陥(ワ)いれ困らすコト、

(わに)

わに(鰐)動物の名にて、がく魚のコト即ち熱帯地方の水邊(ワ)に棲(ワ)む、恐るしき水陸動物にて、人類を容易に咬み殺す、其の形はトカゲに似て殊に大きく、其の小なる物にても、五六尺、大なる物に至りては一丈からあり、全身に堅牢(ワ)なる甲(ワ)ありて、尾長く短かき足あり、嘴(ワ)亦た長くして、殊に

わにあ、わひ 詫

わにあし(鰐足)人の歩きつきの事を云ふ、即ち大外輪(ワ)に歩くのを外(ワ)ワニ足と云ふ、大内輪に歩くのを内ワニ足と云ふなり、

(わぬ)

わぬ(輪抜)器業(ワ)の一種にて、輪の内をおとりぬける器(ワ)の稱、わぬし(吾主)器おぬし、其方(ワ)と云ふコト、

(わび)

わび(詫)器あやまるコト、過(ワ)をわびするコト、

わひる、わふく 侘

わひし(侘)器しづかなり、さびしくありまづし、なんきなり、

(わぶ)

わぶ(侘)自動物事を案じわすらふ、心をたゆる、心配する(ワ)静(ワ)かに住む、さびしく暮らす、

(わら)

わら(和)器あやまるコト、過(ワ)をわびするコト、

わふつ(和佛)器日本とフランスと、わふち(和縁)器車の輪のふちのコト、わぶん(和文)器歐文に對しての辭にて、我國の文章、即ち國文、

(わへ)

わへい(和平)器おだやかなるコト、わへら(和羅)器はなしのくせのコト、

(わほ)

わほく(和睦)器なかなほりするコト、わほん(和本)器洋綴(ワ)本に對しての語にて、日本風に仕立たる本(ワ)のコト、

(わみ)

わみやう(和名)器我が國にてつけたる物の名のコトを云ふ、

(わむ)

わむすび(輪結)器紐(ワ)の結び方の一種

にて、圓く輪を作りたる結び方、

(わや)

わやち(和洋)器日本と西洋と、わやち(和樣)器日本流、日本のさま、わやく(和譯)器西洋の語を、我が國の語に云ひあらはすコト、又は云ひあらはしたるもの、

(わら)

わらち(藁)器稲(ワ)及び麥の莖(ワ)を干(ワ)しかわしたる物、わらち(藁打)器わらを軟(ワ)らかにする爲め、杵(ワ)にてはたくことを云ふ、わらち(藁石)器藁を軟(ワ)らかく打つに用ゆる石の莖(ワ)、

わやう、わらし 藁

仮名遣發音索引

あノ部

アイイン あひん(合印)
 アイウチ あひうち(相擊)
 アイオイ あひおひ(相生)
 アイガモ あひがも(相鴨)
 アイクチ あひくち(合口)
 アイシヨウ あひしやう(合性)
 アイタガイ あひたがひ(相互)
 アイダグイ あひたぐい(間食)
 アイズ あひづ(合圖)
 アイズチ あひづち(合槌)
 アイシユウ あいしふ(愛執)
 アイジヨウ あいじやう(愛情)
 アイシヨウ あいしやう(哀傷)
 アイシヨウ あいせふ(愛妾)
 アイトウ あいたう(哀悼)
 アイジヨウ あいちよ(愛女)
 アイヨウ あいやう(愛養)
 アイロウ あいらふ(藍眼)
 アイロウ あいから(藍菫)
 アイコウ あいから(愛幸)

アイゴウ あいがう(哀號)
 アイキヨウ あいけう(愛嬌)
 アイキヨウ あいけふ(隘狹)
 アイソウ あいさう(愛想)
 アエグ あへぐ(敬)
 アエテ あへて(敬)
 アエナシ あへなし(無敬)
 アエモノ あへもの(齷物)
 アエル あへる(齷)
 アオガイ あそがひ(青貝)
 アオジ あそぢ(青地)
 アオイ あそひ(青)
 アオビヨウ あそべうし(青表紙)
 アオミウバン あそみやうばん(青明簪)
 アカガイ あかがひ(赤貝)
 アカガリ あかがり(赤革)
 アカコウジ あかかうじ(赤柑子)
 アカガシロ あかがしは(赤桐)
 アカダイ あかだい(赤鯛)
 アカシ あかぢ(赤地)
 アガノウ あがなふ(贖)
 アガノウ あがなふ(贖)
 アカハジ あかはぢ(赤恥)

アキイエ あきいへ(明家)
 アキシヨウ あきしやう(厭性)
 アキノオホギ あきのあふぎ(秋扇)
 アクカンジヨウ あくかんじやう(惡感情)
 アクギヨウ あくぎやう(惡行)
 アクゴウ あくごふ(惡劫)
 アクゴウ あくごふ(惡業)
 アクソウ あくさう(惡毒)
 アクソウ あくさう(惡相)
 アクシヨウ あくしやう(惡性)
 アクシユウ あくしふ(惡習)
 アクタウ あくたう(惡黨)
 アクジヨウ あくぢやう(惡女)
 アクビヨウ あくびやう(惡病)
 アクヒヨウ あくひやう(惡評)
 アクミヨウ あくみやう(惡名)
 アクリヨウ あくりやう(惡羅)
 アゲツロウ あげつらふ(論)
 アケハロウ あけはらふ(明拂)
 アコウ あかう(阿衡)
 アコウ あかう(榕樹)
 アライイ あらいひ(朝飯)
 アサウラゾウリ あさうらざうり(鷹草)

假名遣發音索引

あ

アサガレイ あさかれひ(朝餉)
 アサジ あさち(淺茅)
 アザノウ あさなふ(料)
 アサモウデ あさまふて(朝參)
 アサユウ あさゆふ(朝夕)
 アシカハ あしかは(足革)
 アシスモウ あしすまふ(足相撲)
 アシタライ あしだらひ(足盥)
 アシノコウ あしのかふ(足甲)
 アシヨウ あしゆり(亞相)
 アシライ あしらひ(接遇)
 アシロウ あしらふ(接遇)
 アジキナシ あぢきなし(味氣無)
 アジホウ あぢはふ(味)
 アズマジ あづまぢ(東路)
 アソビアイテ あそびあひて(遊相手)
 アタイ あたひ(價)
 アタリフルマイ あたりふるまひ(當振舞)
 アツヨウ あつえふ(厚葉)
 アツカワ あつかは(厚皮)
 アツカイニン あつかひんにん(扱人)
 アツゲシヨウ あつげしゆら(厚化粧)
 アツトウ あつたら(壓倒)
 アツビタイ あつびたい(厚額)
 アツロウ あつらふ(誂)
 アテガイ あてがひ(施行)

アトウ あたら(阿蓬)
 アトバライ あとばらひ(後掃)
 アトバライ あとばらひ(後掃)
 アビジゴク あびぢごく(阿鼻地獄)
 アブミズリ あぶみづり(釣釣)
 アブラシヨウ あぶらしゆら(油障子)
 アマオホイ あまおほひ(雨覆)
 アマゴイ あまごひ(雨乞)
 アマソウゾク あまさうぞく(雨裝束)
 アマジ あまぢ(天路)
 アマツサイ あまつさへ(剝)
 アマボウシ あまぼふし(厄法師)
 アメモヨウ あめもゆら(雨模様)
 アヤジ あやぢ(綾地)
 アラソイ あらそひ(爭)
 アラヌオモイ あらぬおもひ(圖)
 アラワ あらは(陽)
 アラワス あらはす(現)
 アラワス あらはす(著)
 アライ あらひ(洗)
 アライゴイ あらひごひ(洗縫)
 アラリヨウジ あられりぢ(荒療治)
 アリナライ ありならひ(有智)
 アリノトウ ありのたふ(蟻塔)
 アリエウ ありら(亞流)
 アリドウシ ありどほし(虎刺)

アワゴク あはてけ(粟音)
 アワサケ あはさけ(粟酒)
 アワシ あはし(淡)
 アワセオウド あはせわちど(合黄土)
 アワイ あはひ(間)
 アンコウ あんかう(安康)
 アンコウ あんかう(飯膳)
 アンゴウ あんかう(暗帳)
 アンガイ あんぐわい(案内)
 アンカイ あんくわい(暗晦)
 アンシユウ あんしゆ(安輯)
 アンシユウ あんしゆ(暗職)
 アンシユウ あんしゆ(安住)
 アンシユウ あんしゆ(庵住)
 アンチヨウ あんちゆ(安帖)
 アンボウ あんぼう(罷注)

い、る、部

イイズシ いはずし(飯酢)
 イイツコナイ いひそこなひ(言損)
 イイダコ いひだこ(飯蛸)
 イイツトウ いひつたふ(言傳)
 イイツライ いひつらひ(言論)
 イイナラワセ いひならはせ(言習)
 イイビツ いひびつ(飯糰)
 イイマエ いひまへ(言前)
 イイヨウ いひゆう(言様)
 イイカイ いひかい(言甲斐)
 イウキタ いひきく(抱擁)
 イエガマエ いへがまへ(家構)
 イエジ いへぢ(家路)
 イエジ いへぢ(家地)
 イエズト いへづと(家苞)
 イオウ いわう(以往)
 イオウ いわう(疏黄)
 イカケジ いかけぢ(沃縣地)
 イギヨウ いぎゆう(異郷)
 イギヨウ いぎゆう(異郷)
 イギヨウ いぎゆう(異郷)
 イギヨウ いぎゆう(異郷)
 イギヨウ いぎゆう(異郷)
 イギヨウ いぎゆう(異郷)

イキヨウ いけい(威脅)
 イキヨウ いけい(威脅)
 イグイ いぐひ(居食)
 イクヒ いぐひ(生日)
 イコウ いかう(衣桁)
 イコウ いかう(以降)
 イコウ いかう(意向)
 イコウ いかう(移香)
 イコウ いかう(遺稿)
 イコウ いかう(遺香)
 イコウ いかう(維綱)
 イザヨイ いざよひ(十六夜)
 イシジ いしば(石地)
 イシバイ いしばひ(石灰)
 イシユウ いしゆ(蜃集)
 イシズク いぢづく(意地盡)
 イシヤタホシ いしやたふし(醫者倒)
 イジヨウ いぢゆう(異條)
 イジヨウ いぢゆう(異常)
 イジヨウ いぢゆう(遺詔)
 イジヨウ いぢゆう(畏懼)
 イジヨウ いぢゆう(以上)
 イシヨウ いしゆう(意匠)
 イシヨウ いしゆう(衣裳)

イジヨウ いぢゆう(異狀)
 イチイ いちひ(黃麻)
 イソジ いそぢ(磯路)
 イソジ いそぢ(五十路)
 イソウ いさう(意想)
 イゾウ いさう(彙蔵)
 イソウロウ いさうらう(食客)
 イタビヨウシ いたべりし(板表紙)
 イタマエ いたまへ(板前)
 イチジン いちぢん(一陣)
 イチジヨウ いちぢゆう(一定)
 イチズ いちづ(一圖)
 イチジヨウ いちぢゆう(一條)
 イチジヨウ いちぢゆう(一帖)
 イチゴウ いちかう(一毫)
 イチゴウ いちかう(一合)
 イチブシジユウ いちぶしじゆ(一伍十什)
 イチユウ いちゆう(一友)
 イチモクリウセン いちもくりせん(一目瞭然)
 イチヨウ いちゆう(一機)
 イチヨウ いちゆう(公孫樹)
 イチヨウ いちゆう(移膝)
 イチヨウ いちゆう(異朝)
 イチヨウ いちゆう(一葉)
 イチヨウ いちゆう(一葉)

假名遣發音索引

カイボウ かいぼろ(海防)
 カイヒヨウ かいへう(海豹)
 カイヒヨウ かいへう(開票)
 カイヒヨウ かいへう(界標)
 カイロウ かいらう(老海)
 カイロウ かいらう(借老)
 カイロウ かいらう(開立)
 カイロウ かいらう(海王星)
 カイロウ かいらう(怪雨)
 カイロウ かいらう(廻航)
 カイロウ かいらう(回航)
 カイロウ かいらう(外交)
 カイロウ かいらう(會合)
 カイロウ かいらう(回想)
 カイロウ かいらう(快走)
 カイロウ かいらう(遠走)
 カイロウ かいらう(會葬)
 カイロウ かいらう(會堂)
 カイロウ かいらう(外筭)
 カイロウ かいらう(回答)
 カイロウ かいらう(外朝)
 カイロウ かいらう(詠嘆)
 カイロウ かいらう(快報)

カイホウ くいほう(懷抱)
 カイホウ くいほう(快方)
 カイボウ かいほう(外邦)
 カイボウ かいほう(外防)
 カイボウ かいほう(外貌)
 カイイ かいい(會意)
 カイロウカ かいらうか(外交家)
 カイロウ かいらう(會商)
 カイロウ かいらう(廻航)
 カイロウ かいらう(廻航)
 カイロウ かいらう(廻航)
 カイロウ かいらう(廻航)
 カイロウ かいらう(廻航)
 カイロウ かいらう(廻航)

カイドウ かいとう(海棠)
 カイトウ かいとう(解答)
 カイジヨウ かいじやう(鑑伏)
 カイジヨウ かいじやう(開場)
 カイジヨウ かいじやう(開帳)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)
 カイズ かいづ(海圖)

カエリガク かいりがけ(歸掛)
 カエリガク かいりがけ(返掛)
 カエリモウシ かいりまうし(返甲)
 カエシ かいし(返)
 カエリ かいり(歸)
 カエリ かいり(回)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)
 カエリ かいり(返)

カクコウ かくこう(角行)
 ガクギョウ かくぎやう(學級)
 ガクギョウ かくぎやう(學業)
 ガクツウ かくつう(學窓)
 カクツウ かくつう(客裝)
 カクサツ かくさつ(格殺)
 カクシメ かくしめ(隠縫)
 カクシメ かくしめ(鶴筈)
 カクシヨウ かくしやう(隔障)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)
 カクシヨウ かくしやう(客商)

カクシヨウ かくしやう(掛醬油)
 カコウ かくこう(歌稿)
 カコウ かくこう(河溝)
 カゴウ かくこう(家號)
 カコウ かくこう(下降)
 カコウ かくこう(住肴)
 カコウ かくこう(雅號)
 カコウ かくこう(改號)
 カコウ かくこう(海藻)
 カコウ かくこう(街市)
 カコウ かくこう(廢廠)
 カコウ かくこう(代)

假名遣發音索引

Table of phonetic notations and their corresponding meanings in Japanese, such as 'ゴウホウ ちちばら (號砲)', 'コウコウ かりかり (航行)', etc.

假名遣發音索引

Table of phonetic notations and their corresponding meanings in Japanese, such as 'コウキヨウ くらわら (廣狹)', 'コウコウ かりかり (抗衛)', etc.

假名遣發音索引

ゴホウ こほふ(語法)
ゴホウ こほふ(護法)
ゴホウジン こほふじん(護法神)
ゴボンノウ こぼんのう(子煩悩)
ゴマノウ こまなう(護摩堂)
コマエ こまへ(小前)
コミジン こみぢん(粉微塵)
コモウ こまう(虛妄)
コモリドウ こもりたう(籠堂)
ゴヨウシヨウニン こようしやうにん(御商人)

コゴウ こんがう(金剛)
コンゴウ こんがふ(混合)
コンゴウカイ こんがうかい(金剛界)
コンジヨウ こんじやう(懇情)
コンシヨウ こんせう(今宵)
コンジヨウ こんせう(紺青)
コントウ こんたう(昏倒)
コントウ こんたう(懇到)
コンボウ こんぼう(希望)
コンボウ こんぼう(昏聩)
コンボウ こんぼう(困乏)

サイシヨウ さいせう(再醮)
サイシヨウ さいちよ(才女)
サイシヨウ さいちやう(祭場)
サイジヨウカキさいでうがき(西條柿)
サイノウ さいなう(採納)
サイノウ さいはう(細胞)
サイノウ さいはう(西方)
サイレイビシ さいはいびし(幸莖)
サイリウ さいりふ(摧拉)
サイリウ さいりやう(宰領)
サイリヨウ さいりち(材料)
サウライ さいらひ(侍)
サウオウ さいわう(藏王)

サクシヨウ さくせう(昨宵)
サクシヨウ さくちよ(削除)
サクチヨウ さくてう(昨朝)
サクビヨウ さくびやう(錯誤)
サクビヨウ さくびやう(作病)
サクモウ さくまう(作毛)
サクモウ さくまう(炸鱈)
サクソウ さくそう(櫻草)
サクリフ さくりふ(削立)
サクリヨウ さくりやう(作料)
サグシユウ さぐしやう(提重)

サジヨウ さじやう(鎖鏡)
サシリヨウ さしれう(指針)
サシヨウ させう(些少)
サシヨウ させう(坐礁)
サジン さぢん(砂塵)
サスライ さすらひ(流離)
サソイ さそひ(誘)
ザツヨウ ざつえう(雜術)
ザツコウ ざつかう(刷行)
ザツコウ ざつかう(雜考)
ザツシヨウ ざつしやう(殺生)
ザツシヨウ ざつしやう(殺傷)
ザツトウ ざつたう(察當)

ザントウ ざんたう(殘黨)
ザントウ ざんたう(山刀)
ザントウ ざんたう(算當)
ザントウ ざんたう(聖刀)
ザンドウ ざんたう(殘盜)
ザンジヨウ ざんぢやう(贊助)
ザンジヨウ ざんぢよ(奨勵)
ザンジヨウ ざんぢよ(剷除)
ザンシヨウ ざんしやう(參朝)
ザンボウ ざんぼう(三方)
ザンボウ ざんぼう(山砲)
ザンボウ ざんぼう(殘亡)
ザンボウ ざんぼう(讓勝)
ザンボウ ざんぼう(誦勝)
ザンボウ ざんぼう(算法)

サレツカイ さるつかひ(猿道)
サレコウベ されかち(鯛鮓)
サロウ さらふ(櫻)
ザンヨウ ざんやう(殘陽)
ザンゴウ ざんがう(整潔)
サンコウ さんかう(参向)
サンコウ さんかう(参考)
サンコウ さんかう(三更)
ザンコウ ざんかう(三行)
サンコウ さんかう(殘肴)
サンカクホウ さんかくはふ(三角法)
サンキヨウ さんきやう(産業)
サンギヨウ さんぎやう(産業)
サンゴトウ さんごたう(珊瑚島)
ザンゾウ ざんざう(殘像)
サンシユウ さんしゆ(参集)
サンシヨウ さんしやう(参照)
サンシヨウ さんじやう(惨状)
サンドウ さんだう(参堂)

しノ部

シアイニン しばひにん(仕合人)
シウジヨ ぢうぢよ(醜女)
シウチヨウ ぢうぢやう(續腸)

シウチヨウ ぢうぢやう(會長)
シウチヨウ ぢうぢやう(續腸)
シウチヨウ ぢうぢよ(愁慄)
シウノウ ぢうなふ(收購)
シウホウ ぢうはう(酬報)
シウヨウ ぢうやう(秋陽)
シウヨウ ぢうやう(秋養)
シウヨウ ぢうやう(修養)
シウリヨウ ぢうりやう(舟梁)
シウリヨウ ぢうりやう(秋涼)
シユウ ぢうい(師友)
シユウ ぢうい(自由)
ジユウコウ ぢうい(自由港)
シウカイドウ ぢうかいだう(秋海棠)
シウギヨウ ぢうぎやう(修行)
シウギヨウ ぢうぎやう(醜業婦)
シウソウ ぢうざう(秋霜)
シウソウ ぢうざう(修造)
シウソウ ぢうざう(收購)
シウソウ ぢうざう(周匝)
シウシユウ ぢうしゆ(修茸)
シウシユウ ぢうしゆ(舟楫)
シウシユウ ぢうしゆ(修習)
シウシユウ ぢうしゆ(收拾)
シウシユウ ぢうしゆ(蒐輯)

シウシユウ ぢうしゆ(聚集)
シウシヨウ ぢうしやう(周章)
シウシヨウ ぢうしやう(繡匠)
シウシヨウ ぢうしやう(愁慄)
シウシヨウ ぢうじやう(醜狀)
シウトウ ぢうたう(周到)
ジエウコウドウ ぢうい(自由道)
シウユウ ぢうい(周遊)
シウユウ ぢうい(舟遊)
シウコウ ぢうかう(周航)
シウコウ ぢうかう(舟行)
シウコウ ぢうかう(醜行)
シウコウ ぢうかう(修交)
シウコウ ぢうかう(秋郊)
シウゴウ ぢうかう(醜校)
シウゴウ ぢうかう(秋毫)
ジウゴウ ぢうがう(柔剛)
シウゴウ ぢうがう(周洽)
シキウ ぢうじ(梓柩)
シキウ ぢうじ(鷓鴣)
ジギヨウ ぢうぎ(事業)
シガクコウ ぢうがく(私學校)
シカンガクコウ ぢうかん(士官學校)
シキソウ ぢうき(色租)

假名遣發音索引

さし

二八

シキジヨウ せきじやう(色情)
シキドウ せきだう(食堂)
シキジヨウ せきじやう(式場)
シキウ せきふ(支給)
シキウ せきふ(至急)
シキヨウ せきやう(四境)
シキヨウ せきやう(鷓鴣)
シキヨウ せきやう(市況)
シキリチヨウ せきりちやう(仕切帳)
シケンリヨウ せけんりら(試験料)
シコウ せかう(紫甲)
シコウ せかう(指甲)
シコウ せかう(恣行)
シコウ せかう(私交)
シコウ せかう(私考)
シコウ せかう(至幸)
シコウ せかう(至孝)
シコウ せかう(志向)
シコウ せかう(思考)
シコウ せかう(詩稿)
シコウ せかう(四郊)
シコウ せかう(肆行)
シコウ せかう(至剛)
シコウ せかう(詮議)

シゴウ せごう(試毒)
シゴウ せごう(事項)
シコウ せかう(侍講)
シコウ せかう(時効)
シコウキョウ せかうきやう(紙腔琴)
シシユウミン せしゆみん(市住民)
ウシヨ せしよ(兒女)
ウシヨ せしよ(侍女)
ウシヨ せしよ(市場)
ウシヨ せしよ(視場)
シシユウ せしゆ(詩集)
シシユウガク せしゆがく(四十雀)
シシユウクニチ せしゆくにち(四十九日)
シシユウハツテ せしゆはつて(四十八手)
シシマイ せしまい(獅子舞)
シシヨウ せしやう(支障)
シシヨウ せしやう(師匠)
シシヨウ せしやう(死傷)
シシヨウ せしやう(紙障)
シシヨウ せしやう(詞章)
シシヨウ せしやう(司掌)
シシヨウ せしやう(史生)

シシヨウ せしやう(梓匠)
シシヨウ せしやう(史上)
シシヨウ せしやう(詩情)
シシヨウ せしやう(自省)
シシヨウ せしやう(事情)
シシヨウ せしやう(辭讓)
シシヨウ せしやう(時向)
シシヨウ せしよ(指笑)
シシヨウ せしよ(噱笑)
シシヨウ せしよ(待妾)
シセントウダ せせんたう(自然陶汰)
シソウ せさう(思想)
シソウ せさう(四葬)
シソウ せさう(四三)
シソウ せさう(死相)
シソウ せさう(死草)
シソウ せさう(爾曹)
シソウ せさう(辭藻)
シソウ せさう(自創)
シソウ せさう(時裝)
シタガイ せたがい(下交)
シタジ せたじ(下地)

假名遣發音索引

し

二九

シチヨウ 志ちえり(七曜)
 シチジヨウ 志ちじやう(七情)
 シチヨウ 志ちてり(翅鳥)
 シチヨウ 志ちてり(思潮)
 シチヨウ 志ちてり(慈鳥)
 シチジヨウ 志ちじやう(七生) [伽藍]
 シチドウ 志ちだう(七堂)
 シチドウガラン 志ちだうがらん(七堂)
 シチジヨウ 志ちじやう(七條)
 シチホウ 志ちほ(七寶)
 シチメンドウ 志ちめんたう(七面倒)
 シチメンチヨウ 志ちめんてう(七面倒)
 シチメンドウクサシ 志ちめんたうくさし(七面倒臭)
 シチヨウ 志ちやう(視聽)
 シチヨウ 志ちやう(次長)
 シチヨウ 志ちやう(紙帳)
 シチヨウ 志ちやう(弛張)
 シチヨウ 志ちやう(支那)
 シチヨウ 志ちやう(市廳)
 シチヨウ 志ちやう(枝條)
 シツキヨウ 志つぎやう(實況)
 シツキヨウ 志つぎやう(實境)
 シツギヨウ 志つぎやう(實業)

シツギヨウガクコウ 志つぎやうがくかう(實業學校)
 シツソウ 志つさう(漆瘡)
 シツソウ 志つさう(濕瘡)
 シツソウ 志つさう(疾走)
 シツシユウ 志つしやう(實習)
 シツシヨウ 志つしやう(漆匠)
 シツシヨウ 志つしやう(實性)
 シツシヨウ 志つしやう(實正)
 シツシヨウ 志つしやう(實狀)
 シツシヨウ 志つせり(失笑)
 シツボウ 志つぼ(失望)
 シツボウ 志つぼ(七寶)
 シツボウ 志つぼ(死亡)
 シツボウヤキ 志つぼやき(七寶燒)
 シツブツコウカン 志つぶつかうかん(實物交換)
 シツボクリヨウリ 志つぼくれり(卓袱料理)
 シツロウ 志つら(裝置)
 シテンオウ 志てんわり(四天譚)
 シダイシチヨウ 志たいしてふ(時代思潮)
 シトウ 志たう(至當)
 シトウ 志たう(私黨)
 シドウ 志たう(祠堂)

シドウ 志たう(指導)
 シドウ 志たう(至道)
 シドウ 志たう(市道)
 シトウ 志たう(市道)
 シトウ 志たう(自黨)
 シドウ 志たう(珊瑚)
 シドウキン 志たうきん(祠堂金)
 シナカワ 志なかは(品革)
 シナロウ 志ならふ(爲習)
 シニカワル 志にかはる(死變)
 シネンジヨウ 志ねんじやう(自然生)
 シヒヨウ 志へり(師表)
 シヒヨウ 志へり(四表)
 シボウ 志は(紫袍)
 シボウ 志は(香訪)
 シボウ 志は(恣放)
 シボウ 志は(四方)
 シボウ 志は(私報)
 シボウ 志は(四寶)
 シボウ 志は(四望)
 シボウ 志は(子房)
 シボウ 志は(脂肪)
 シボウ 志は(姿貌)
 シボウ 志は(實望)
 シボウ 志は(死亡)

シボウ 志ば(自暴)
 シボウシキ 志ばしき(自暴自棄)
 シボウ 志は(師法)
 シボクジラ 志はくぢら(鹽鯨)
 シボク 志は(潮路)
 シマバエ 志まばへ(編繩)
 シマイ 志まひ(仕舞)
 シマイエ 志まひや(仕舞湯)
 シマイオキ 志まひおき(仕舞置)
 シミズ 志みづ(清水)
 シメシアラセ 志めしあはせ(喋合)
 シメジ 志めぢ(濕地)
 シモウ 志まう(四孟)
 シモウ 志ま(二毛)
 シヤコウ 志やかう(社交)
 シヤコウ 志やかう(麝香)
 シヤクエウ 志やくいふ(爵邑)
 シヤクゴウ 志やくがう(緯線)
 シヤクドウ 志やくたう(若道)
 シヤクホウ 志やくはう(釋放)
 シヤキヨウ 志やけり(邪教)
 シヤホウ 志やは(射法)
 シヤヒヨウ 志やひや(謝豹)
 シヤヨウ 志やや(斜陽)
 シヤリトウ 志やりたう(舍利塔)
 シヤリヨウ 志やれん(射獵)

シエオウ 志ゆあふ(手押)
 シエウエウ 志ゆえい(從遊)
 シエウキヨウ 志ゆけり(宗教)
 シエウソウ 志ゆさう(成裝)
 シエウサツ 志ゆさつ(銃槍)
 シエウソウ 志ゆさう(銃創)
 シエウシヨウ 志ゆせり(終背)
 シエウトウ 志ゆたう(充當)
 シエウチヨウ 志ゆちてう(終朝)
 シエウリヨウ 志ゆりやう(終了)
 シエウオウ 志ゆわ(縱橫)
 シエウオウムゲ 志ゆわむげ(縱橫無碍)
 シエウオウムジン 志ゆわむじん(縱橫無盡)
 シエヨウ 志ゆえり(需要)
 シエヨウ 志ゆえん(樹葉)
 シエコウ 志ゆかう(首肯)
 シエコウ 志ゆかう(壽考)
 シエキユウ 志ゆきふ(首級)
 シエクギヨウ 志ゆきげ(宿業)
 シエクシユウ 志ゆくし(宿習)
 シエクシヨウ 志ゆくせり(縮少)
 シエクシヨウ 志ゆくせ(祝捷)
 シエクリヨウ 志ゆくれ(宿料)
 シエキヨウ 志ゆけ(受教)

シエキヨウ 志ゆけり(儒教)
 シエギヨウ 志ゆげ(授業)
 シエゾウ 志ゆざう(酒造)
 シエシヨウ 志ゆせり(朱蕉)
 シエシヨウ 志ゆせり(手抄)
 シエシヨウ 志ゆせり(樹梢)
 シエトウ 志ゆた(手套)
 シエツ 志ゆち(主治)
 シエジヨウ 志ゆぢやう(朱錠)
 シエツユウ 志ゆつやう(郵愛)
 シエツコウ 志ゆつかう(出港)
 シエツフウ 志ゆつな(出納)
 シエチヨウ 志ゆてり(壽家)
 シエウシヤク 志ゆしやく(襲爵)
 シエウセン 志ゆせん(習染)
 シエウセン 志ゆせん(茸繕)
 シエウゼン 志ゆぜん(十全)
 シエウソウ 志ゆそう(集族)
 シエウトウ 志ゆたう(襲踏)
 シエウチヤク 志ゆちやく(執著)
 シエウチユウ 志ゆちゆう(集中)
 シエウニリツ 志ゆにりつ(十二律)
 シエウノウ 志ゆのふ(十能)
 シエウホウ 志ゆほう(什寶)
 シエウモツ 志ゆもつ(什物)
 シエウレン 志ゆれん(習練)

のぬぬになさてつちたそせすしこけくきかおえういあ

假名遣發音索引

シユウアク 志ふあく(十悪)
シユウイ 志ふい(麗衣)
シユウイ 志ふい(習肄)
シユウイ 志ふる(拾遺)
シユウイ 志ふえい(集英)
シユウヨウ 志ふえり(釋耀)
シユウゴウ 志ふがふ(集合)
シユウカン 志ふくわん(習慣)
シユウグキ 志ふげき(襲撃)
シユウサツ 志ふさつ(襲殺)
シユウザン 志ふざん(集散)
シユウシユウ 志ふしふ(集輯)
シユウジガイ 志ふじがい(十字街)
シユウジセキ 志ふじせき(十字石)
シユノウ 志ふなり(酒囊)
シユノウ 志ゆなふ(受納)
シユエロウジン 志ゆえらうじん(壽老人)
シユエノウテン 志ゆえなうてん(春鶯)
シユンユウ 志ゆんいう(蓮由)
シユンゴウ 志ゆんがう(春郊)
シユンゴウ 志ゆんがう(俊家)
シユンゴウ 志ゆんがう(純孝)
シユンゴウ 志ゆんがう(巡幸)
シユンゴウ 志ゆんがう(春曉)
シユンギヨウ 志ゆんげり(春曉)

なぬぬわぬぬるりちよえゆいやもむみまほへふひは

假名遣發音索引

シヨウエイ せりえい(照影)
シヨウヨウ せりえり(逍遙)
シヨウヨウ せりえり(笑靨)
シヨウエン せりえん(招延)
シヨウエン せりえん(晴煙)
シヨウカ せりか(樵歌)
シヨウカ せりか(樵歌)
シヨウカイ せりかい(紹介)
シヨウコウ せりかう(技巧)
シヨウゴウ せりがふ(淡治)
シヨウキウ せりきう(捷急)
シヨウキウ せりきん(啼泣)
シヨウキンレイ せりきんるゐ(洩金類)
シヨウカ せりか(變和)
シヨウシユ せりしゆ(擷取)
シヨウシユ せりしゆ(擷取)
シヨウシユ せりしよ(顚顛)
シヨウシユ せりしよ(捷書)
シヨウシユ せりせり(少少)
シヨウセウ せりせう(稍船)
シヨウソク せりそく(饒足)
シヨウタ せりた(饒多)
シヨウダツ せりだつ(抄奪)
シヨウチヨ せりちよ(昭著)
シヨウジヨウ せりぢり(蕭條)

すノ部

スイコウ するかり(遂行)
 スイコウ するかり(推考)
 スイコウ するかり(水膠)
 スイコウ するかり(推敷)
 ズイコウ するかり(瑞香)
 ズイコウ するかり(隨行)
 スイコウ するかり(水開)
 スイコウシヤ するかり(水交社)
 スイキヨウ するかり(垂教)
 スイソウ するかり(水草)
 スイソウ するかり(水葬)
 スイゾウ するかり(蔭蔵)
 スイシヨウ するかり(垂鬚)
 スイトウ するかり(推倒)
 スイトウ するかり(醉倒)
 スイトウ するたり(出納)
 スイドウ するたり(隧道)
 スイドウ するたり(水道)
 スイトウ するたり(錐刀)
 スイトウカカリ するたり(出納掛)
 スイチヨウ するたり(水鳥)
 スイチヨウ するたり(水駒)
 スイチヨウ するたり(垂釣)

ズイチヨウ するたり(瑞兆)
 スイノウ するたり(水瀝)
 スイノウ するたり(出納)
 スイヒヨウ するたり(水萍)
 スイヨウ するたり(翠楊)
 スイヨウ するたり(垂楊)
 スイヨウ するたり(水楊)
 スイロウ するたり(衰老)
 スウコウ するたり(駁行)
 スウソウ するたり(趨走)
 スウソウ するたり(芻草)
 スオウ するたり(素襖)
 スギカワ するたり(杉皮)
 スギジュウ するたり(杉重)
 スクイアグ するたり(抄上)
 スクイアミ するたり(抄網)
 スクイケン するたり(救金)
 スクイゴヤ するたり(救小屋)
 スクイダス するたり(救出)
 スクイダマ するたり(救玉)
 スクイトル するたり(救取)
 スクイヌシ するたり(救主)
 スクイバチ するたり(救撥)
 スクイマイ するたり(救米)
 スクイトウ するたり(助蕪)

せノ部

スコウ するたり(速香)
 スジアイ するたり(筋合)
 スジガキ するたり(筋書)
 スジガキ するたり(筋金)
 スジカイ するたり(筋違)
 スナジ するたり(砂地)
 スホウ するたり(蘇枋)
 スホウ するたり(素袍)
 スモウ するたり(相撲)
 スロウニン するたり(素浪人)
 スロウモノ するたり(意慢者)
 スンゴウ するたり(寸毫)

セイコウ せいかり(征行)
 セイコウ せいかり(精好)
 セイコウ せいかり(精巧)
 セイコウ せいかり(精巧)
 セイゴウ せいかり(正行)
 セイコウ せいかり(正行)
 セイコウ せいかり(嗜好)
 セイコウ せいかり(精鋼)
 セイキヨウ せいかり(政教)
 セイキヨウ せいかり(聖教)
 セイキヨウ せいかり(正業)
 セイキヨウ せいかり(成業)
 セイケンゾウダツ せいかり(成金)
 政橋争奪
 セイツウ せいかり(生草)
 セイツウ せいかり(星霜)
 セイツウ せいかり(悽愴)
 セイツウ せいかり(清掃)
 セイツウ せいかり(正装)
 セイツウ せいかり(盛装)
 セイツウ せいかり(清爽)
 セイツウ せいかり(腥臊)
 セイツウ せいかり(聖像)
 セイツウ せいかり(製造)
 セイシエウザイサン せいかり(せいしふざいさん)

(世襲財産)
 セイシヨウ せいかり(聖詔)
 セイトウ せいかり(征討)
 セイトウ せいかり(政黨)
 セイトウ せいかり(正當)
 セイトウ せいかり(製糖)
 セイトウ せいかり(政道)
 セイトウ せいかり(正道)
 セイトウ せいかり(聖堂)
 セイトウシヨ せいかり(せいじよ)
 セイトウボウエ せいかり(せいじよ)
 セイトウナイカク せいかり(せいじよ)
 セイジ せいかり(政治)
 セイチヨウ せいかり(聖朝)
 セイチヨウ せいかり(征鳥)
 セイチヨウ せいかり(聲調)
 セイチヨウ せいかり(整調)
 セイジヨウ せいかり(制條)
 セイホウ せいかり(政法)
 セイホウ せいかり(税法)
 セイヒヨウ せいかり(旌表)
 セイビヨウ せいかり(聖廟)
 セイミヨウ せいかり(精妙)
 セイヨウ せいかり(青陽)
 セイヨウ せいかり(正陽)

セイヨウ せいかり(生養)
 セイヨウ せいかり(静養)
 セキジ せいかり(關路)
 セキノウエ せいかり(石腦油)
 セキヨウ せいかり(夕陽)
 セキヨウ せいかり(碩老)
 セキヨウ せいかり(積塞)
 セキヨウ せいかり(昔遊)
 セキヨウ せいかり(昔遊)
 セキヨウ せいかり(積疊)
 セキヨウ せいかり(石交)
 セキヨウ せいかり(石坑)
 セキヨウ せいかり(石甕)
 セキヨウ せいかり(石甕)
 セキヨウ せいかり(石甕)
 セキカヒヨウ せいかり(石華表)
 セキキヨウ せいかり(石橋)
 セキゾウ せいかり(石造)
 セキゾウ せいかり(石像)
 セキジエウシヤ せいかり(赤十)
 セキシヨウ せいかり(夕照)
 セキドウ せいかり(赤道)
 セキトウ せいかり(石塔)
 セキタンコウ せいかり(石炭坑)
 セスジ せいかり(脊筋)
 セチトウ せいかり(箆刀)
 セツソウ せいかり(舌争)

ゼツシヨウ	せつせり(絶笑)	センエウ	せんい(閑幽)	センゴウ	せんが(船歌)
ゼツトウ	せつた(竊盜)	センエウブツ	せんい(閑幽)	センゴウ	せんが(船歌)
ゼツトウ	せつた(絶倒)	センヨウ	せんえ(閃曜)	ゼンゴウ	ぜんが(前号)
ゼツトウ	せつた(絶島)	センヨウ	せんえ(閃曜)	ゼンゴウ	ぜんが(前号)
ゼツボウ	せつぼ(絶法)	センヨウ	せんえ(閃曜)	ゼンゴウ	ぜんが(前号)
ゼツミヨウ	せつめ(絶妙)	センオウ	せんわ(先王)	ゼンゴウ	ぜんが(前号)
ゼツリユウ	せつり(絶粒)	センオウ	せんわ(先王)	ゼンゴウ	ぜんが(前号)
ゼツヨウ	せつえ(絶要)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(雪行)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(折肱)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(横行)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(舌耕)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(絶交)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(接合)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツコウ	せつか(説教)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツキヨウ	せつけ(絶叫)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
ゼツソウ	せつさ(節操)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
セドウ	せだ(世道)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
セメドウグ	せめだ(攻道具)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
セメドウグ	せめだ(貴道具)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
セリヨウ	せり(施療)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
セワリヨウ	せわれ(世話料)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
センユウ	せんい(占有)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
センユウ	せんい(暇友)	センコウ	せんか(潜幸)	ゼンコウ	ぜんか(潜幸)
センユウ	せんい(専有)	センゴウ	せんが(僧號)	ゼンシヨウ	ぜんせ(戰捷)

ゼンシヨウ	ぜんせ(全捷)	ソウガ	さうが(瓜牙)	ゾウケイ	ぞうけい(遺計)
ゼンシヨウ	ぜんせ(全捷)	ソウカイ	さうかい(蒼海)	ゾウケツ	ぞうけつ(遺計)
ゼンシヨウ	ぜんせ(全捷)	ソウカイ	さうかい(草芥)	ゾウケン	ぞうけん(巢穴)
ゼントウ	ぜんた(剃刀)	ソウカイ	さうかい(創開)	ゾウコウ	ぞうこう(船口)
ゼントウ	ぜんた(洗湯)	ソウコウ	さうかう(瓜甲)	ゾウコク	ぞうこく(相尅)
ゼントウ	ぜんた(仙道)	ソウコウ	さうかう(糖糠)	ゾウコク	ぞうこく(相尅)
ゼントウ	ぜんた(先導)	ソウコウ	さうかう(倉庚)	ゾウザイ	ぞうざい(贓罪)
ゼンドウ	ぜんだ(善道)	ソウコウ	さうかう(裝甲)	ゾウサイ	ぞうさい(遺災)
ゼンシ	ぜんぢ(繕治)	ソウコウ	さうかう(操作)	ゾウソウ	ぞうそう(贈嘲)
ゼンチヨウ	ぜんて(前兆)	ソウコウ	さうかう(顧客)	ゾウソウ	ぞうそう(贈嘲)
ゼンシヨウ	ぜんで(前條)	ソウカク	さうかく(雙角)	ゾウソウ	ぞうそう(贈嘲)
ゼンボウ	ぜんぼ(戦法)	ソウカン	さうかん(藻鑿)	ゾウサツ	ぞうさつ(相殺)
ゼンボウ	ぜんぼ(戦法)	ゾウガン	ぞうがん(象眼)	ゾウシ	ぞうし(曹司)
ゼンビヨウ	ぜんべ(前表)	ゾウガク	ぞうがく(象眼)	ゾウシン	ぞうしん(衷心)
ゼンリヨウ	ぜんれ(染料)	ソウキ	さうき(早起)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ソウキ	さうき(叢記)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ソウキ	さうき(争議)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ゾウキ	ぞうき(雜木)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ゾウキユウ	ぞうきよ(躁急)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ソウキヨ	さうきよ(壯舉)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ソウキヨ	さうきよ(擲去)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ソウグウ	さうぐ(遺遇)	ゾウシヨウ	ぞうしや(争訟)
		ソウカ	さうか(菴花)	ゾウスイ	ぞうすい(蒼翠)
		ソウカイ	さうかい(爽快)	ゾウスイ	ぞうすい(蒼翠)
		ソウクイ	さうけい(儼型)	ゾウゼツ	ぞうせつ(壯絶)

Table of Japanese words and their meanings, organized by syllable (ソウ, ツウ, ズウ, グク, ソウ, ツウ, ズウ, グク).

假名遣發音索引

Table of Japanese words and their meanings, organized by syllable (ソエ, ツエ, ズエ, グク, タイ, タイ, タイ, タイ, タイ).

假名遣發音索引

タイリヨウ たいれろ(大獵)
 ダイリヨウ たいれろ(代料)
 タカクノウゼイシヤ たかくなりせいし
 多(多額納税者)
 タカクノウゼイギン たかくなりせい
 喜(多額納税員)
 タクコウ たくかう(卓行)
 タクノウ たくかう(豪蕪)
 タクボクタクヨウ たくぼうてう(啄木鳥)
 タクロウ たくろう(濁露)
 タゴウ たせう(惰傲)
 タシヨウ たせう(多少)
 タシヨウ たしやう(他生)
 タチアオヒ たちあふひ(立葵)
 タチカワリ たちかはり(立代)
 タチオウジヨウ たちわろじやう(立往生)
 タチヨウ たてふ(安帖)
 タチヨウ たてふ(駝鳥)
 タツコウ たつかう(脱稿)
 タツトウ たつたう(脱刀)
 タツトウ たつたう(脱黨)
 タツドウ たつたう(達道)
 タテカエ たてかへ(立替)
 タトウ たたら(安當)
 タビスモウ たびすまふ(旅相撲)

タビシ たびち(旅路)
 タライ たらひ(盟)
 タンヨウ たんえふ(單業)
 タンコウ たんかう(炭抗)
 タンコウ たんかう(單行)
 タンコウ たんかう(斷行)
 タンコウ たんかう(斷交)
 タンキユウシヨウガクコウ たんきよせ
 うがくかう(單級小學校)
 タンソウ たんざう(短槍)
 タンソウ たんざう(淡粧)
 タンソウ たんざう(端莊)
 タンシヨウ たんせう(短小)
 タンシヨウ たんせう(短管)
 タンシヨウ たんせう(談笑)
 タントウ たんたう(短刀)
 タントウ たんたう(短道)
 タントウ たんたう(壇當)
 タントウ たんたう(壇場)
 タンジヨウ たんぢやう(單調)
 タンチヨウ たんてう(單頂)
 タンペイキユウ たんぺいきよ(短兵急)
 タンヨウ たんやう(端陽)

チオウ ちわう(地黃)
 チオウセン ちわうせん(地黃煎)
 チカラノリヨウ ちからのれろ(主稅察)
 チキ ちき(地祇)
 チキヨウ ちけふ(地峽)
 チギヨウ ちげふ(知曉)
 チクヨウ ちくえふ(竹葉)
 チクコウ ちくかう(築港)
 チクコウ ちくかう(逐項)
 チクゴウ ちくかう(逐城)
 チクゾウ ちくざう(築造)
 チクゾウ ちくざう(竹槍)
 チクトウ ちくたう(竹刀)
 チクジ ちくぢ(慍怩)
 チクジヨウ ちくぢやう(逐味)
 チクシヨウシンギ ちくぢやうしんぎ(逐條審議)
 チクヨウ ちくやう(畜養)
 チソウ ちさう(馳走)
 チソウ ちさう(治裝)
 チゾウ ちざう(地蔵)
 チゾウガホ ちざうがほ(地藏願)
 チトウ ちたう(薙刀)

ちノ部

チヤクコウ ちやくかう(着港)
 チヤクゾウ ちやくざう(着想)
 チヤクトウ ちやくたう(着到)
 チヤクジン ちやくぢん(着陣)
 チヤドウ ちやだう(茶道)
 チヤリヨウ ちやれろ(茶寮)
 チユウシヨウ ちゆうしやう(抽象)
 チユウジヨウ ちゆうぢやう(衷情)
 チユウスイ ちゆうすい(抽水)
 チユウセキ ちゆうせき(晴昔)
 チユウセツ ちゆうせつ(狂襲)
 チユウゾウ ちゆうぞう(鑄造)
 チユウサク ちゆうさく(籌策)
 チユウサン ちゆうさん(晝餐)
 チユウジン ちゆうぢん(稠人)
 チユウジン ちゆうぢん(稠粧)
 チユウチヨウ ちゆうちやう(稠踏)
 チユウチヨウ ちゆうちやう(惆悵)
 チユウズリ ちゆうづり(宙吊)
 チユウニン ちゆうにん(廚人)
 チユウハイ ちゆうはい(儲輩)
 チユウボウ ちゆうぼう(廚房)
 チユウビヨウ ちゆうひやう(網縵)
 チユウヒツ ちゆうひつ(備匹)
 チユウミツ ちゆうみつ(稠密)
 チユウオウ ちゆうおう(中央)

チユウユウ ちゆうゆう(忠友)
 チユウユウ ちゆうゆう(中有)
 チユウヨウ ちゆうゆう(冲効)
 チユウヨウ ちゆうゆう(重要)
 チユウヨウ ちゆうゆう(忠孝)
 チユウヨウ ちゆうゆう(重創)
 チユウシヨウ ちゆうしやう(中宵)
 チユウドウ ちゆうたう(中道)
 チユウトウ ちゆうたう(偷盜)
 チユウロウ ちゆうらう(中老)
 チユウロウ ちゆうらう(中竊)
 チユウビヨウ ちゆうひやう(重病)
 チユウタクリヨウ ちゆうたくりやう(住宅料)

チヨウ ちえり(治要)
 チヨウ ちえり(血醉)
 チヨウイツ ちやういつ(漲溢)
 チヨウエキ ちやうえき(騰液)
 チヨウコウ ちやうかう(聽講)
 チヨウギン ちやうぎん(丁銀)
 チヨウキヨウ ちやうけい(長狹)
 チヨウギヨウ ちやうげい(定業)
 チヨウコン ちやうこん(悵恨)
 チヨウザイ ちやうざい(杖罪)

チヨウソウ ちやうさう(長槍)
 チヨウゾウ ちやうしやう(醸造)
 チヨウセイ ちやうせい(町政)
 チヨウシヨウ ちやうしやう(長嘴)
 チヨウダイ ちやうだい(脹大)
 チヨウダイ ちやうだい(脹刀)
 チヨウトウ ちやうたう(長刀)
 チヨウダツ ちやうだつ(暢達)
 チヨウジヨウ ちやうぢやう(長舒)
 チヨウジヨウ ちやうぢやう(長女)
 チヨウホウ ちやうほう(法定)
 チヨウロウ ちやうらう(長老)
 チヨウロウ ちやうらう(長老)
 チヨウラン ちやうらん(漲亂)
 チヨウリエウ ちやうりやう(漲流)

チトウ ちたう(池塘)
 チドウ ちたう(地道)
 チドウ ちたう(馳道)
 チダウ ちたう(治道)
 チジヨウ ちぢやう(治定)
 チジヨウ ちぢやう(管杖)
 チツコウ ちつかう(眠狎)
 チノウ ちなう(智囊)
 チブツドウ ちぶつたう(持佛堂)
 チヨウウ ちやうう(長吁)

假名遣發音遺索引

チヨウカ ちやうか(町家)
チヨウキ ちやうぎ(聴器)
チヨウジ ちやうじ(子規)
チヨウジ ちやうじ(停止)
チヨウジ ちやうじ(丈度)
チヨウフ ちやうふ(丈夫)
チヨウホ ちやうほ(場面)
チヨウホ ちやうほ(穠母)
チヨウモ ちやうも(暢茂)
チヨウイ ちやうい(朝衣)
チヨウイ ちやうい(用意)
チヨウイ ちやうい(用意)
チヨウイ ちやうい(用意)

チヨウシハズレ ちやうしはづれ(調子外)
チヨウシヨウ ちやうしやう(嘲笑)
チヨウダ ちやうだ(端な)
チヨウトウ ちやうたう(挑盪)
チヨウトウ ちやうたう(挑闘)
チヨウトウ ちやうたう(挑悼)
チヨウドウ ちやうたう(朝堂)
チヨウドウ ちやうたう(鳥道)
チヨウズ ちやうず(調度)
チヨウズ ちやうず(手水)
チヨウズタライ ちやうずたらひ(手洗盥)
チヨウヂヨウ ちやうぢやう(端條)
チヨウヂヨウ ちやうぢやう(端條)
チヨウボウ ちやうぼう(眺望)
チヨウホウ ちやうほう(調法)

チヨウヨウ ちやうやう(調和)
チヨウカ ちやうか(超過)
チヨウカ ちやうか(超畫)
チヨウカ ちやうか(眺望)
チヨウカン ちやうかん(條款)
チヨウカン ちやうかん(條款)
チヨウケン ちやうけん(眺望)
チヨウゴ ちやうご(鳥語)
チヨウソウ ちやうそう(挑争)
チヨウゾウ ちやうぞう(想像)

チヨウゾウ ちやうぞう(樂造)
チヨウゾウ ちやうぞう(影法師)
チヨウジ ちやうじ(樂始)
チヨウジ ちやうじ(停止)
チヨウシン ちやうしん(嘲晒)
チヨウシン ちやうしん(醫配)
チヨウシヨウ ちやうしやう(朝餉)
チヨウシヨウ ちやうしやう(影匠)
チヨウシヨウ ちやうしやう(頂上)
チヨウシチジミ ちやうしちぢみ(銚子縮)
チヨウコウ ちやうかう(龍幸)
チヨウシユウ ちやうしゆ(徵集)
チヨウシユウ ちやうしゆ(重襲)
チヨウシヨウ ちやうしやう(徵召)
チヨウシヨウ ちやうしやう(徵召)
チヨウシヨウ ちやうしやう(龍招)
チヨウシヨウ ちやうしやう(重陽)
チヨウガクコウ ちやうがくかう(女學校)
チヨクコウ ちよくかう(陸降)
チヨクコウ ちよくかう(直航)
チヨクコウ ちよくかう(直行)
チヨクドウ ちよくたう(直道)
チヨウオウ ちやうおう(儲王)
チヨウオウ ちやうおう(女王)
チヨクドウ ちよくたう(直答)
チヨクジヨウ ちよくぢやう(勸説)

假名遣發音索引

チヨゾウ ちよぞう(貯蔵)
チヨソウ ちよそう(女裝)
チヨソウ ちよそう(除草)
チヨソウ ちよそう(女道)
チヨゾウ ちよぞう(女郎)

チヨロウ ちよろう(地牢)
チヨロウ ちよろう(療勞)
チヨサウドウ ちよさわどう(痴話騒動)
チンコウ ちんかう(沈香)
チンガイ ちんがい(塵外)
チンゾウ ちんぞう(珍藏)
チントウ ちんたう(陳套)
チントウ ちんたう(陣刀)

チンソウ ちんそう(沈香)
チンソウ ちんそう(沈香)

チンソウ ちんそう(沈香)
チンソウ ちんそう(沈香)

つノ部

ツイ つか(終)
ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)
ツイヤス つかやす(贅)

ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)

ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)

ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)
ツイエ つかえ(贅)

ツツカイ つつかひ(突支)
 ツツカワラ つつかはら(筒瓦)
 ツツミイイ つつみいひ(包飯)
 ツツリアワス つつりあはす(綴合)
 ツツダライ つつだらひ(角盟)
 ツツヨウジ つつやうじ(爪揚枝)
 ツツニホイノヨロイ つつにほひのよろ
 ひ(爪釘)
 ツツミナオシ つつみねし(積疽)
 ツツエアオイ つつあふひ(梅雨癸)
 ツツカカリ つつかは(面皮)
 ツツガマエ つつがまへ(面構)
 ツツラマウ つつらまふ(捉)

てノ部

テアイ てあひ(手合)
 デアイ てあひ(出合)
 デアイバシヨ てあひばしよ(出會場所)
 テイコウ ていかう(抵抗)
 テイコウ ていかう(訂校)
 テイゴウ ていごう(啼號)
 テイキユウ ていきゆう(涕泣)
 テイキユウ ていきゆう(庭球)
 テイキユウ ていきゆう(低級)
 テイキユウ ていきゆう(帝京)

テイクアズケ ていきあづけ(定期預)
 テイクコウカイ ていきかうかい(定期
 航海)
 テイカイ ていかい(低徊)
 テイカン ていかん(帝冠)
 テイカン ていかん(定款)
 テイカク ていかく(鼎鑊)
 デイキヨウ ていきゆう(泥槌)
 テイキヨウ ていきゆう(帝業)
 テイソウ ていそう(貞操)
 テイソウ ていそう(貞争)
 テイソウ ていそう(丁壯)
 テイシヨウ ていしゆう(提唱)
 テイシヨウ ていしゆう(抵掌)
 テイチヨウ ていちゆう(偵諜)
 テイビヨウ ていびゆう(帝廟)
 テイリヨウ ていりゆう(程量)
 テイリヨウ ていりゆう(庭燎)
 デイオウ ていおう(帝王)
 テイオウ ていおう(提梁)
 テイコウ ていかう(丁香)
 テイユウ ていゆう(惕友)
 テイユウ ていゆう(丁憂)
 テオイ ておひ(手負)
 テカワリ てかはり(手代)
 デガハリ てかはり(出替)

テガラガオ てがらがう(手柄頭)
 デキアイ てきはひ(出来合)
 デキワ てきは(出際)
 テキヨウ てきゆう(捕要)
 テキシヨウ てきしゆう(敵將)
 テキシヨウ てきしゆう(敵情)
 テキシヨウ てきしゆう(敵愾)
 テキシヨウ てきしゆう(敵城)
 デキシヨウ てきしゆう(剔擯)
 デキシヨウ てきしゆう(滌淨)
 デキソコノウ てきそこなふ(出来損)
 テキトウ てきたう(適當)
 テイシヨウ ていしゆう(遞相)
 テイシヨウ ていしゆう(詆傷)
 テイシヨウ ていしゆう(頡頁)
 テイシヨウ ていしゆう(低唱)
 テイシヨウ ていしゆう(呈上)
 テイシヨウ ていしゆう(帝城)
 テイシヨウ ていしゆう(梯狀)
 テイシヨウ ていしゆう(庭上)
 デイシヨウ ていしゆう(泥匠)
 テイシヨウ ていしゆう(泥沼)
 テイシヨウ ていしゆう(詆笑)
 テイトウ ていたう(堤塘)
 テイトウ ていたう(抵當)
 テイトウ ていたう(薙刀)

テイトウ ていたう(剃刀)
 テイドウ ていだう(帝道)
 テイドウ ていだう(悌道)
 テイドウ ていだう(定道)
 テイチヨウ ていちゆう(亭長)
 テイトウ ていたう(低潮)
 テイトウ ていたう(適當)
 テイトウ ていたう(滌蕩)
 テキトウ てきたう(敵陣)
 テキトウ てきたう(敵堡)
 テキホウ てきほう(敵堡)
 テコマイ てこまい(手古舞)
 テシカ てしか(手近)
 テシヨウ てしゆう(手錠)
 テスウリヨウ てすうりゆう(手敷料)
 テスジ てすぢ(手筋)
 テソロイ てそろひ(出揃)
 テチヨウ てちゆう(手帳)
 テツコウ てつかう(鐵坑)
 テツコウ てつかう(鐵坑)
 テツコウ てつかう(手甲)
 テツコウ てつかう(鐵甲)
 テツゴウ てつごう(手都合)
 テツカ てつかわ(鐵靴)
 テツコウ てつかう(鐵管)
 テツカン てつくわん(鐵管)
 テツガン てつぐわん(鐵丸)

テツギヨウ てつぎゆう(徹曉)
 テツキヨウ てつきゆう(鐵橋)
 テツゾウ てつぞう(鐵造)
 テツゾウ てつぞう(鐵像)
 テツシヨウ てつしゆう(徹宵)
 テツシヨウ てつしゆう(鐵蕪)
 テツトウ てつたう(跌宕)
 テツトウ てつたう(跌宕)
 テツトウ てつたう(鐵杖)
 テツジヨウ てつじゆう(鐵條)
 テツジヨウ てつじゆう(鐵條網)
 テツボウ てつぱう(鐵砲)
 テツドウ てつたう(鐵道)
 テツトウボク てつたうぼく(鐵刀木)
 テツドウオウジヨウ てつたうおうじゆう
 ら(鐵道往生)
 テツジヨウ てつじゆう(徹除)
 テツチヨウ てつちゆう(鐵腸)
 テツヨウ てつゆう(鐵葉)
 テドウグ てたうぐ(手道具)
 テナラヒゾウシ てならひざうし(手習
 草紙)
 テノゴイ てのこひ(手拭)
 デバボウチヨウ てはばうちゆう(出刃

庖丁)
 デバライ てはらひ(出拂)
 テビカエチヨウ てびかえちゆう(手拍帖)
 テビヨウシ てびゆうし(手拍子)
 デブデブ てぶてぶ(肥肥)
 テマルチヨウチン てまるちゆうちん
 (手丸提灯)
 テムカイ てむかい(手向)
 デムカエ てむかへ(出迎)
 テウアシ てうあし(蝶脚)
 テウガイ てうがい(蝶貝)
 テウコウ てうかう(蝶候)
 テウシ てうし(帖子)
 デウシ てうし(帖子)
 テウシヨウ てうしゆう(蝶狀)
 デウシヨウ てうしゆう(出養生)
 デウシヨウ てうしゆう(疊嶂)
 テウツガイ てうつがい(蝶番)
 テウチヨウ てうちゆう(蝶)
 テウチヨウ てうちゆう(蝶噪)
 テリアワセ てりあはせ(照合)
 テンカ てんくわ(甜瓜)
 テンカ てんくわ(典貨)
 テンカ てんくわ(點化)
 テンコウ てんかう(天潢)

トギカワ とぎかは(研草)
トキワギ ときはぎ(常盤木)
トキワヅ ときはづ(常盤津)
トクコウ とくかう(篤孝)
トクコウ とくかう(德行)
トクコウ とくかう(特効)
トクキヨウ とくきやう(獨活)
トクカツ とくかつ(獨活)
トクキヨウ とくきやう(膏教)
トクギヨウ とくぎやう(得業)
トクギヨウ とくぎやう(特業)
トクソウ とくさう(毒草)
トクソウ とくさう(得喪)
トクソウ とくさう(特創)
トクソウ とくさう(特操)
トクソウ とくさう(特操)
トクソウ とくさう(特操)
トクシユウ とくしゆ(獨習)
トクドウ とくたう(得道)
トクドウ とくたう(實道)
トクヒヨウ とくへう(得票)
トクエウ とくえう(待有)
トコウ とかう(渡航)
トコウ とかう(左右)

ドゴウ どがう(土膏)
ドゴウ どがう(土豪)
ドゴウ どがう(怒號)
トシヨウ としやう(杜松)
トシヨウ とじやう(都城)
トシヨウ とじやう(土壤)
トシヨウ とせふ(徒涉)
トジイト とぢいと(綴糸)
トジガネ とぢがね(綴金)
トジコミ とぢこみ(綴込)
トジヨウ とぢやう(泥鎗)
トソウ とさう(斗骨)
トソウ とさう(抖擻)
トゾウ とぞう(土藏)
トチヨウ とちやう(度謀)
トツオウ とつあふ(凹凸)
トトウ とたう(徒黨)
トトウ とたう(怒濤)
トトウキ とたうき(土當歸)
トノモリヨウ とのもりやう(主殿寮)
トビドウグ とびだうぐ(飛道具)
トビヨウ とひやう(土俵)
トホウ とほう(途方)
トホリヨコウ とほりよかう(徒步旅行)
トモダオリ ともだふれ(共倒)

トモマワリ ともまはり(伴廻)
トモライ とむらひ(巾)
トヨウ とえう(土曜)
トリナワ とりなほ(捕縄)
トリナオス とりなほす(取直)
トリマワス とりまはす(取廻)
ドリヨウ どりやう(度量)
トリウ とれう(塗料)
トロウ とらう(徒勞)
ドンヨウ どんえふ(嫩葉)
トンコウ とんかう(遁甲)
トンキヨウ とんきやう(頓狂)
ドンガン どんぐわん(鈍頑)
トンシユウ とんしゆ(屯集)
トントウ とんたう(遁迹)
ドントウ どんたう(鈍刀)
ドンチヨウ どんちやう(緩帳)

ニチヨウ にちえう(日曜)
ニツカ につくわ(日課)
ニツカウ につくわ(日光)
ニツシヨウ につしやう(日章)
ニトウ にたう(二刀)
ニトウリユウ にたうりやう(二刀流)
ニナイ にない(擔)
ニナイオケ にないをけ(擔桶)
ニノマイ にのまひ(二舞)
ニホントウ にほんたう(日本刀)
ニモウ にまう(二毛)
ニヤクドウ にやくたう(若道)
ニエウコウ にえうかう(乳香)
ニエウコウ にふかう(入港)
ニエウカン にふくわん(入棺)
ニエウシヨウ にふしやう(入掌)
ニエウジヨウ にふじやう(入城)
ニエウトウ にふたう(入湯)
ニエウドウ にふたう(入道)
ニエウジヤウ にふぢやう(入定)
ニエウジヨウ にふぢやう(入場)
ニエウジヨウ にふぢやう(入場)
ニエウチヨウ にふてう(入朝)
ニヨウドウ にうたう(尿道)

假名遣發音索引 さ、な

ナイヨウ ないやう(内洋)
ナイユウ ないいう(内憂)
ナイカ ないくわ(内科)
ナイカン ないくわん(内患)
ナイキヨウ ないきやう(内敷)
ナイソウ ないさう(内争)
ナエ ない(苗)
ナエギ ないぎ(苗木)
ナエシロ ないしろ(苗代)
ナガエノチヨウシ ながえのてうし(長柄銚子)
ナカセンドウ なかせんたう(中仙道)
ナカドオリ なかどおり(中通)
ナカナオリ なかなほり(中直)
ナキジヨウゴ なきじやうご(泣上戸)
ナギタオス なぎたほす(難倒)
ナキタオル なきたほる(泣倒)
ナコウド なくあうど(仲人)
ナゴヤオウギ ながやあうぎ(名古屋)
ナシジ ないぢ(梨地)
ナスロウ なくらふ(準)
ナナエ ないへ(七重)
ナマズ ないまづ(鱧)
ナマズ ないまづ(白癩)
ナマズ ないまづ(生爪)
ナマエ ないまへ(名前)

ナマエワケ ないまへわけ(名前分)
ナリカワル ならかはる(成代)
ナンジ なんぢ(汝)
ナンジ なんぢ(爾)
ナンジ なんぢ(難治)
ナンジヨウ なんじやう(何味)
ナンボウ なんぼう(南邦)
ナンボウ なんほう(南方)

ニオウ にわう(二王)
ニギワイ にぎはひ(賑)
ニギワフ にぎはふ(賑)
ニクコウ にくかう(肉交)
ニクカウ にくかう(肉羹)
ニクカイ にくくわい(肉塊)
ニクカン にくくわん(肉冠)
ニクソウ にくさう(肉相)
ニクシヨウ にくしやう(肉障)
ニクシヨウ にくしやう(肉漿)
ニクシヨウ にくじやう(肉情)
ニクシン にくちん(肉陣)
ニシジンオリ にしちんおり(西陣織)
ニゾウ にざう(二藏)
ニチジヨウ にちじやう(日常)

ニチヨウ にちえう(日曜)
ニツカ につくわ(日課)
ニツカウ につくわ(日光)
ニツシヨウ につしやう(日章)
ニトウ にたう(二刀)
ニトウリユウ にたうりやう(二刀流)
ニナイ にない(擔)
ニナイオケ にないをけ(擔桶)
ニノマイ にのまひ(二舞)
ニホントウ にほんたう(日本刀)
ニモウ にまう(二毛)
ニヤクドウ にやくたう(若道)
ニエウコウ にえうかう(乳香)
ニエウコウ にふかう(入港)
ニエウカン にふくわん(入棺)
ニエウシヨウ にふしやう(入掌)
ニエウジヨウ にふじやう(入城)
ニエウトウ にふたう(入湯)
ニエウドウ にふたう(入道)
ニエウジヤウ にふぢやう(入定)
ニエウジヨウ にふぢやう(入場)
ニエウジヨウ にふぢやう(入場)
ニエウチヨウ にふてう(入朝)
ニヨウドウ にうたう(尿道)

假名遣發音索引 な、に

二ヨカン によくわん(女官)
 ニヨツウ によさう(女相)
 ニヨソウ によさう(女装)
 ニワイシ にはいし(庭石)
 ニワウメ にはちめ(庭梅)
 ニワカ にはか(俄)
 ニワカアメ にはかあめ(俄雨)
 ニワカオドリ にはかおどり(俄踊)
 ニワキド にはきど(庭木戸)
 ニワグタ にはびた(庭下駄)
 ニワチヨウ にはちやう(庭蜃)
 ニワビ にはび(庭火)
 ニンソウミ にはんさうみ(人相見)
 ニンシヨウ にはんしやう(又傷)
 ニンオウ にはんわう(人皇)

ぬノ部

ヌカバエ ぬかばへ(糠蠅)
 ヌキンズ ぬきんづ(抽)

ねノ部

ネガイ ねがひ(願)
 ネガイテ ねがひて(願手)
 ネガエリ ねがへり(寢返)

ネカン ねくわん(寢棺)
 ネギワ ねきは(寢際)
 ネキロウ ねきらふ(寝)
 ネジ ねぢ(螺旋)
 ネジオウ ねぢあふ(寝合)
 ネジキ ねぢき(螺木)
 ネジキル ねぢきる(寝切)
 ネジクビ ねぢくび(寝首)
 ネシヨウベン ねせうべん(寝小便)
 ネズミオホズ ねずみおほづ(鼠大津)
 ネゾウ ねぞう(寝像)
 ネソウ ねさう(寝相)
 ネツキヨウ ねつぎやう(熱狂)
 ネットウ ねつたり(熱鬧)
 ネットウ ねつたり(熱湯)
 ネットイトウ ねていたう(寝抵當)
 ネドイ ねどひ(根間)
 ネットイハトイ ねとひはとひ(根間葉間)
 ネットカワイシ ねぶかはいし(根府川石)
 ネットウ ねぼう(寝坊)
 ネットイ ねらひ(狙)
 ネットイウチ ねらひうち(狙撃)
 ネットコウ ねりかち(煉香)
 ネットカワ ねりかは(練革)
 ネットゴウ ねんがう(年號)
 ネットコウ ねんかう(拈香)

ネンキエウ ねんきふ(年給)
 ネンコウ ねんくわう(年光)
 ネンカイ ねんくわい(年回)
 ネンガン ねんぐわん(念願)
 ネンシヨウ ねんせう(年少)
 ネンボウ ねんぼう(年報)
 ネンボウ ねんぼう(念望)
 ネンブツドウ ねんぶつどう(念佛堂)
 ネンリヨウ ねんれう(燃料)

のノ部

ノウオウ ならおち(懶快)
 ノウカツ ならくわつ(囊括)
 ノウシヨウ ならしやう(臘漿)
 ノウシントウ ならしんたう(臘蜜湯)
 ノウトウ ならたう(臘漿)
 ノウチエウ ならちゆう(臘中)
 ノウラン なららん(懶亂)
 ノウギヨウ ならぎふ(農業)
 ノウソウ ならさう(農桑)
 ノウジエウ ならじふ(膿汁)
 ノウリヨウ ならりやう(納涼)
 ノカジ のかぢ(野殿治)
 ノガワ のがは(野川)
 ノカイ のかひ(野飼)

ノキズケ のきづけ(軒附)
 ノギヨウコウ のぎやうかう(野行幸)
 ノクシ のけぢ(除地)
 ノザリ のさは(野澤)
 ノシアラビ のしあはび(野斗鮑)
 ノチゾイ のちぞひ(後添)
 ノメリヨウ のみれち(飲料)
 ノリアイブネ のりあひぶね(乗合船)
 ノリジ のりぢ(乗地)
 ノリマス のりまはす(乗廻)

はノ部

ハイコウ はいかう(廢校)
 ハイコウ はいかう(背向)
 ハイコウ はいかう(佩香)
 ハイコウ はいかう(陪行)
 ハイゴウ はいがふ(配合)
 ハイゴウ はいがふ(媒合)
 ハイゴウヨウシ はいがふよろし(媒合容止)

ハイキエウ はいきふ(配給)
 ハイカ はいくわ(梅花)
 ハイカ はいくわ(寶貨)
 ハイカイ はいくわい(敗漬)
 ハイカイ はいくわい(徘徊)

ハイカン はいくわん(拜觀)
 ハイカン はいくわん(肺患)
 ハイカン はいくわん(廢官)
 ハイカン はいくわん(神官)
 ハイカン はいくわん(陪觀)
 ハイキヨウ はいけち(背教)
 ハイギヨウ はいぎふ(背業)
 ハイゾウ はいざう(肺藏)
 ハイソウ はいさう(煤館)
 ハイシヨウ はいしやう(俳倡)
 ハイシヨウ はいしやう(廢媼)
 ハイシヨウ はいしやう(敗將)
 ハイシヨウ はいしやう(廢城)
 ハイシヨウ はいしやう(梅葉)
 ハイシヨウ はいしやう(壁償)
 Haito はいたう(廢刀)
 ハイジク はいぢく(敗奴)
 ハイジヨ はいぢよ(排除)
 ハイジヨ はいぢよ(寶女)
 ハイチヨウ はいてち(敗兆)
 ハイチヨウ はいてち(廢朝)
 ハイノウ はいなち(背囊)
 ハイノウ はいなち(佩囊)

ハイノウ はいなふ(拜納)
 ハイノウ はいなち(敗報)
 ハイボウ はいぼち(敗亡)
 ハイイロ はいいろ(灰色)
 ハイエ はいえ(延枝)

ハイオサエ はいおさへ(灰押)
 ハイコム はいこむ(道込)
 ハイボウ はいぼち(牌勝)
 ハイロウ はいらう(肺癆)
 ハオウ はわち(霸王)
 ハガイ はがひ(羽交)
 ハガエ はがへ(羽替)
 ハガエ はがへ(蕪替)
 ハカライ はからひ(計)
 ハカロウ はからふ(計)
 ハカリザオ はかりざお(秣芋)
 ハキヨウ はきやう(破鏡)
 ハギヨウ はぎふ(羈業)
 ハクコウ はくかう(薄倖)
 ハクコウ はくかう(薄行)
 ハクコウ はくかう(薄治)
 ハクキエウ はくきふ(薄給)
 ハクキヨウ はくきふ(迫脅)
 ハクソウ はくさう(舶輪)
 ハクソウ はくさう(薄餅)

Table with 2 columns: Kanji/Kana and Readings/Definitions. Includes entries like ハクドウ, ハクダイ, パクコウ, ハシジカ, etc.

Table with 2 columns: Kanji/Kana and Readings/Definitions. Includes entries like ハトウ, ハトウ, ハトウ, ハトウ, etc.

Table with 2 columns: Kanji/Kana and Readings/Definitions. Includes entries like ハリオホギ, ハリカエ, ハリタオス, etc.

Table with 2 columns: Kanji/Kana and Readings/Definitions. Includes entries like パンノウ, パンシヨウ, パンチヨウ, etc.

Table with 2 columns: Kanji/Kana and Readings/Definitions. Includes entries like ビキヨウ, ビキヨウ, ビキヨウ, etc.

Table with 2 columns: Kanji/Kana and Readings/Definitions. Includes entries like ビキヨウ, ビキヨウ, ビキヨウ, etc.

マイソウ 愛いさう(味爽)
 マイソウ 愛いさう(埋葬)
 マイソウ 愛いさう(埋蔵)
 マエイワイ 愛いはい(前視)
 マガイカワガミ 愛がひかはがみ(擬革紙)
 マカリモウス 愛かりまらす(罷申)
 マカナイ 愛かなひ(贈)
 マカナイリヨウ 愛かなひれう(賄料)
 マキツク 愛さちく(巻軸)
 マクラゾウシ 愛くらざうし(枕草紙)
 マクラナホシ 愛くらなほし(枕直)
 マゴイ 愛ごひ(真鯉)
 マジナイ 愛じなひ(呪禁)
 マジワリ 愛じはり(交)
 マジヨウ 愛じよふ(交)
 マゼカエス 愛せかへす(雜返)
 マチジヨロウ 愛ちぢよろう(待女郎)
 マツコウ 愛つかふ(眞甲)
 マツコウ 愛つかふ(抹額)
 マツカワビシ 愛つかはひし(松川菱)
 マツコウクジラ 愛つかうくじら(抹香鯨)
 マツカワボウソウ 愛つかはぼうさう(松皮瘡)
 マツゾウ 愛つざう(未造)
 マドウ 愛たう(寃道)
 マドウ 愛たう(摩羅)

マドゴウシ 愛どかうし(窓格子)
 マトワス 愛とはす(纏)
 マドワス 愛どはす(惑)
 マトイ 愛とひ(纏)
 マホウ 愛はふ(寃法)
 マムカイ 愛むかひ(眞向)
 マロシ 愛はし(廻)
 マワシキリ 愛はしきり(廻錐)
 マンガ 愛んぐわ(漫畫)
 マンカン 愛んぐわん(萬卷)
 マンガン 愛んぐわん(萬出)
 マンゴウ 愛んごふ(萬劫)
 マンソウ 愛んさう(蔓草)
 マンドウ 愛んたう(滿堂)
 マンシヨウ 愛んちやう(滿場)
 マンチヨウ 愛んてう(滿潮)
 マンチヨウ 愛んてう(滿朝)
 マンユウ 愛んいう(漫遊)

みの部
 ミアイ 愛あひ(見合)
 ミエイドウ 愛えいだう(御影堂)
 ミカケタオシ 愛かげたふし(見掛倒)
 ミカワス 愛かはす(見云)
 ミギワ 愛きは(江)

ミキワメ 愛きはめ(見梅)
 ミジマイ 愛じまひ(身仕舞)
 ミシヨウ 愛しやう(未詳)
 ミシヨウ 愛しやう(實生)
 ミシヨウ 愛しやう(身上)
 ミシヨウ 愛せう(微笑)
 ミシヨウ 愛ぢやう(未定)
 ミシンコ 愛ぢんこ(微塵子)
 ミシンコ 愛ぢんこ(微塵粉)
 ミズ 愛づ(瑞)
 ミズ 愛づ(針孔)
 ミズグイ 愛づぐい(水杓)
 ミズクロイ 愛づおろひ(身繕)
 ミズガシ 愛づくわし(水菓子)
 ミスジノイト 愛すぢのいと(三筋糸)
 ミズナワ 愛づなは(水牢)
 ミズロウ 愛づらう(水牢)
 ミゾウユウ 愛そらいう(未曾有)
 ミゾコナイ 愛そこなひ(見損)
 ミタオシ 愛たふし(見倒)
 ミチガイ 愛ちがひ(見違)
 ミチギワ 愛ちきは(道際)
 ミチヅレ 愛ちづれ(路連)
 ミツオウギ 愛つあふぎ(三屬)
 ミツコウ 愛つかう(密行)
 ミツコウ 愛つかう(密航)

ミツカシワ 愛つかしは(三柏)
 ミツキヨウ 愛つけう(密教)
 ミツゾウ 愛つざう(密造)
 ミツシユウ 愛つしゆ(密集)
 ミツシヨウ 愛つしやう(密商)
 ミツシヨウ 愛つせう(密認)
 ミツドウ 愛つたう(三道具)
 ミツロウ 愛つらふ(密蠟)
 ミツリヨウ 愛つれふ(密獵)
 ミナロウ 愛ならふ(見習)
 ミナワ 愛なは(水繩)
 ミノウ 愛なふ(木納)
 ミハカライ 愛はからひ(見計)
 ミマイ 愛まひ(見舞)
 ミミサワリ 愛みさはり(耳障)
 ミヨウアン 愛ゆあん(妙案)
 ミヨウキ 愛ゆき(妙技)
 ミヨウケン 愛ゆけん(妙技)
 ミヨウケン 愛ゆけん(妙見)
 ミヨウト 愛ゆと(夫婦)
 ミヨウミ 愛ゆみ(妙味)
 ミヨウオウ 愛ゆおう(冥應)
 ミヨウゴウ 愛ゆがう(名號)
 ミヨウゴニチ 愛ゆごにち(明後日)
 ミヨウホウ 愛ゆはふ(明法)

ミヨウフ 愛ゆらふ(命婦)
 ミヨウリ 愛ゆり(名利)
 ミリヨウノイン 愛れうのいん(未了因)
 ミンユウ 愛んいう(民有)
 ミンチヨウ 愛んてう(明朝)

むの部
 ムカカ むくわくわ(無花果)
 ムカワル むかはる(向變)
 ムカイ むかひ(向)
 ムカイビ むかひび(向火)
 ムカエ むかへ(迎)
 ムカンケイ むくわんけい(無關係)
 ムギナワ むぎなは(夢繩)
 ムキユウ むきふ(無給)
 ムコウキズ むかうきづ(向疵)
 ムコウズネ むかうずね(向腰)
 ムコウズラ むかうづら(向面)
 ムジヨウ むじやう(無常)
 ムジヨウ むじやう(無情)
 ムジンゾウ むしんざう(無盡藏)
 ムジントウ むじんたう(無人島)
 ムソウ むさう(夢想)
 ムソウ むさう(無雙)
 ムゾウサ むざうさ(無造作)

ムソウバオリ むさうはおり(無雙羽織)
 ムダグイ むたぐい(徒食)
 ムチヨウコウシ むちやうこうし(無腸公子)
 ムホウ むはふ(無法)
 ムリオウジヨウ むりわうじやう(無理往生)
 ムリヨウ むれう(無料)

めの部
 メイコウ めいかう(明香)
 メイゴウ めいがう(名號)
 メイキヨウ めいきやう(冥境)
 メイキヨウ めいきやう(明鏡)
 メイキヨウ めいきやう(名教)
 メイソウ めいさう(鳴噪)
 メイソウ めいさう(冥想)
 メイソウ めいさう(迷想)
 メイソウ めいさう(明爽)
 メイシユウ めいしゆ(迷執)
 メイシヨウ めいじやう(各匠)
 メイトウ めいたう(名刀)
 メイロウ めいらう(明朝)
 メイリヨウ めいらう(明瞭)

メイオウ めいおう(明王)
 メガワラ めがはら(牝瓦)
 メザワリ めざはり(目障)
 メツソウ めつさう(滅相)
 メツホウ めつぱう(滅法)
 メドウ めだう(馬道)
 メノウ めなう(馬腦)
 メマイ めまい(眩暈)
 メロウ めらう(女郎)
 メンユウ めんい(面友)
 メンカ めんくわ(綿花)
 メンソウ めんさう(面相)
 メンドウ めんだう(面倒)
 メンヨウ めんやう(綿羊)

もノ部

モウイ まうる(猛威)
 モウウ まうち(猛雨)
 モウカ まりか(孟夏)
 モウコ まりこ(猛虎)
 モウゾウ まうざう(妄想)
 モウジヤ まうじや(盲者)
 モウジヤ まうじや(亡者)
 モウマク まうまく(網膜)
 モウラ まうら(羅網)

モウゾウ ちりざう(夢想)
 モクゾウ ちくざう(木造)
 モクゾウ ちくざう(木像)
 モクシヨウ ちくせう(目笑)
 モクトウ ちくたう(黙禱)
 モジ ちぢ(緞)
 モジ ちぢ(緞)
 モツソウ ちつさう(物相)
 モノウイ ちのいはひ(物賦)
 モミジバ ちみぢは(紅葉)
 モヤイタイ ちやひをひ(舫杙)
 モンヨウ ちんやう(門葉)
 モンドウ ちんだう(問答)
 モンボウ ちんぱう(門傍)
 モンモウ ちんまう(文旨)
 モンヨウ ちんやう(門傍)

やノ部

ヤカ やくわ(野花)
 ヤカン やくわん(懸鐘)
 ヤキズ やきづ(矢創)
 ヤクキヨウ やくけふ(藥醫)
 ヤクソウ やくさう(藥草)
 ヤクリヨウ やくれう(藥料)

ゆノ部

ユイノウ ゆいなん(結納)
 ユウエキ いうえき(郵驛)
 ユウエン いうえん(遊苑)
 ユウコウ いうかう(有効)
 ユウコウ いうかう(遊行)
 ユウキヨウ いうきやう(遊興)
 ユウキヨウ いうきやう(遊興)

ユウキヨウ いうけふ(遊俠)
 ユウゼン いうぜん(友禪)
 ユウジヨウ いうじやう(棋讓)
 ユウミン いうみん(邑民)
 ユウトウ いうたう(遊蕩)
 ユウドウ いうだう(誘導)
 ユウジヨウ いうぢやう(遊女)
 ユウチヨウ いうちやう(優長)
 ユウビン いうびん(郵便)
 ユウビヨウ いうべい(幽眇)
 ユウロウ いうらう(憂勞)
 ユウリヨウ いうれい(遊獵)
 ユウキヨウ いうけい(遊俠)
 ユウソウ いうさう(男壯)
 ユウモウ いうまう(男猛)
 ユオウ いうわう(雄黃)
 ユオウ いうわう(雄黃)
 ユキカウ いうきかう(行交)
 ユクワイ いうくわい(愉快)
 ユクリン いうくわん(湯灌)
 ユコウ いうかう(柚柑)
 ユコウ いうさい(葉菜)
 ユズウ いうづう(融通)
 ユズエ いうづえ(弓杖)

よノ部

ユズカ ゆづか(弓束)
 ユズキ ゆづき(湯注)
 ユズケ ゆづけ(湯漬)
 ユズリ ゆづり(讓)
 ユラタオビ ゆはたおび(結肌帶)

ヨウチヨウ いうてう(透視)
 ヨウボウ いうぼう(香花)
 ヨウビヨウ いうべい(香滲)
 ヨウビヨウ いうべい(窮滲)
 ヨウミヨウ いうみやう(功名)
 ヨウヨウ いうよろ(要用)
 ヨウリヨウ いうりやう(要領)
 ヨウカ いうくわ(洋貨)
 ヨウゲン いうげん(揚言)
 ヨウゲン いうげん(揚言)
 ヨウゲン いうげん(伴音)
 ヨウソウ いうさう(洋裝)
 ヨウシヨウ いうしやう(羊子葉)
 ヨウカ いうくわ(洋貨)
 ヨウコウ いうかう(洋行)
 ヨウコウ いうかう(影向)
 ヨウカク いうかく(羊角)
 ヨウキヨウ いうきやう(揚弓)
 ヨウゾウ いうざう(鑄造)
 ヨウシヨウ いうせう(鑄錫)
 ヨウシヨウ いうせふ(鑒妾)
 ヨウドウ いうたう(甬道)
 ヨウジヨウ いうぢやう(腰女)
 ヨウヨウ いうえう(媿女)
 ヨウヨウ いうえう(媿女)
 ヨウジヨウ いうぢやう(養生)

るノ部

ルイキエウ るるきふ(累及)
ルイシヨウ るるせう(類焼)
ルイシヨウ るるせふ(累捷)
ルイチヨウ るるてり(累朝)
ルロウ るらう(流浪)

れノ部

レイシヨウ れいせう(荅菁)
レイシヨウ れいせう(冷笑)
レイシヨウ れいせう(冷情)
レイドウ れいだう(令堂)
レイジヨウ れいちやう(令嬢)
レイホウ れいはう(靈寶)
レイボウ れうばう(禮貌)
レイホウ れいはふ(禮法)
レイヒヨウ れひへう(浮標)
レイビヨウ れいべう(靈貓)
レイビヨウ れいべう(靈廟)
レイユウ れいゆう(伶儻)
レイヨウ れいゆう(羚羊)
レイヨウ れいえう(靈囑)

レイカイ れいくわい(戻乖)
レイカイ れいくわい(冷灰)
レイカイ れいくわい(靈性)
レイカン れいくわん(冷官)
レイソウ れいざう(禮裝)
レイソウ れいざう(靈像)
レイソウ れいじやう(勵獎)
レイシヨウ れいじやう(禮讓)
レイキヨウ れきてう(歷朝)
レツカウ れつくわ(烈火)
レツカウ れつくわ(列皇)
レツトウ れつたう(列島)
レツジヨウ れつぢやう(烈女)
レンコウ れんかう(連衡)
レンコウ れんかう(鍊鋼)
レンゴウ れんがう(聯合)
レンカン れんかん(煉瓦)
レンソウ れんさう(連獲)
レンソウ れんさう(靈箱)
レンソウ れんさう(聯想)
レンシヨウ れんせう(連宵)
レントウ れんたう(憐悼)
レンチヨウ れんてう(連朝)
レンボウ れんばう(聯邦)

ろノ部

ロウオウ ろうあう(老嫗)
ロウイツ ろういつ(勞逸)
ロウエイ ろうえい(朋詠)
ロウヨウ ろうえう(廊腰)
ロウヨウ ろうえう(老幼)
ロウエン ろうえん(狼煙)
ロウカ ろうか(廊下)
ロウガイ ろうがい(勞艾)
ロウカン ろうかん(牢檻)
ロウカン ろうかん(琅玕)
ロウキヨウ ろうきやう(老朽)
ロウギヨウ ろうぎやう(擄魚)
ロウキヨウ ろうきやう(老境)
ロウゲ ろうげ(狼芽)
ロウコウ ろうかう(陋巷)
ロウガ ろうが(弄尾)
ロウソウ ろうさう(蠟燭)
ロウソウ ろうさう(老壯)
ロウソウ ろうさう(老僧)
ロウソウ ろうさう(老境)
ロウソウ ろうさう(老境)
ロウソウ ろうさう(老境)
ロウソウ ろうさう(老境)
ロウソウ ろうさう(老境)

假名遣發音索引 終

ロウバイ ろうはい(臘梅)
ロウシヨウ ろうしやう(勞症)
ロウシヨウ ろうしやう(老將)
ロウシヨウ ろうせう(老少)
ロウトウ ろうたう(郎黨)
ロウチヨウ ろうちやう(潦漲)
ロウチヨウ ろうちやう(郎暢)
ロウロウ ろうらう(牢籠)
ロウヨウ ろうえう(落葉)
ロカ ろくわ(濼過)
ロガ ろくわ(露臥)

ロクキヨ ろくきよ(緑給)
ロクウ ろくだう(六道)
ロクジン ろくぢん(六塵)
ロクジユウ ろくぢゆう(勒住)
ロコウ ろかう(魯縞)
ロジ ろぢ(路地)
ロノウ ろなう(無論)
ロヒヨウ ろへう(路標)
ロンキユウ ろんきゆう(論及)
ロンソウ ろんさう(論争)

わノ部

ワイコウ わいかう(猥狎)
ワイシヨウ わいせう(矮小)
ワカトウ わかたう(若黨)
ワケマエ わけまへ(分則)
ワコウド わかうど(若人)
ワザワイ わざはい(災)
ワシユウ わしゆう(和習)
ワライ わらひ(笑)
ワレガオ われがほ(我願)

大正五年三月廿五日印刷
大正五年三月三十日發行

著作
所有

(錢拾參圓貳價定)

發行元

大阪市東區博勞町四丁目

立川文明堂

電話南三〇九四番
振替大阪一四六一番

監修者 大町桂月

編纂者 文明堂編輯部

發行者 立川熊次郎

印刷者 宮野孝恩

大阪市東區博勞町四丁目十三番地

大阪市東區博勞町四丁目二番地

終

